

部 報

平成15年度 No.49

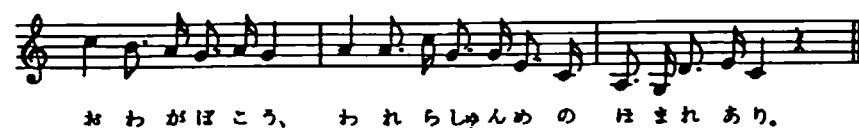
—市川先生退任特集号—



北海道大学馬術部

馬術部賛歌

滝沢南海雄君作曲



馬術部賛歌 (昭和三十五年頃)

三浦清一郎君 作歌

一

春来たれば 大地光る
銀の連山 夢花々たり
高らかに 今ぞ嘶け！
われら駿馬のはまれあり

二

時来たれば 旗をかざせ
青雲の旅路に 意気軒昂たり
高らかに 今ぞ嘶け！
われら駿馬のはまれあり

三

雲流れて 旅路遙か
青春の孤杖 泥濘はばめど
凜然と 進みて行かむ
駿馬のはまれあるかぎり

北大！ 北大！ お、我が母校
われら駿馬のはまれあり

“実現可能で理想的な北大馬術部”を描く

北大馬術部部长 市川 瑞彦

当欄の原稿を依頼されたが、題材に困って今まで書いた原稿を見直してみた。いつも似た内容になっているのにいまさらながら気づく。新しい内容は望めそうもないので、以下に総集編として、きわめて個人的だが、実現可能で理想的な北大馬術部を想像してみた。

まず部活動の面をみよう。北大に入学したら馬術部に入りたいという志をもった学生と、北海道らしいスポーツをやりたいという動機で馬術部を選ぶ学生がいるので、毎年20人ぐらいの新入部員が入る。部員はアルバイトにも時間を割かなければならないが、部員が多いし、後援会からの援助もあるので以前ほど大変ではない。学業に関しては、勉強だけに集中できる連中のようなわけにはいかないが、部員はみな部活動と学業の両立を目標として努力する結果、卒部後もう一年勉強に集中したいとして留年する部員はいるが、全学教育（教養）段階での留年はない。部活動を通じて、馬のみならず、人とのコミュニケーションができるようになるので、人間性豊かで、肉体労働に裏打ちされた自律精神旺盛で、行動力、問題解決能力に優れた学生を輩出している。勉強だけの学生とは一味違うとの会社の評価も定着したせいか、入部志望の学生が多いし、途中でやめる部員も少ない。

上級生だからといって皆が北日本学生馬術大会などに出場できるわけではないが、それぞれ力に応じ大会出場の機会はある。戦績の面をみると、外産馬が多くスポーツ推薦卒で入学してくる部員ばかり揃えている私立大学があるので、団体成績ではトップ3はなかなか難しいが、いつも入賞圏内にいて私立大学馬術部の一角を食い破って存在感がある。日常の練習では議論や批判が活発に行われ、その結果各自の克服課題やそのための練習が明瞭であることが、経験年数不足を補っているといわれる。親睦のため、酒を飲む機会もあるが、下級生に対する無理強いや、急性アルコール中毒などの問題は聞いたことがない。

OBは出張や旅行の折には部室に手土産を持ってよく立ち寄り、その際現役に対し率直な苦言や提言がなされるが、現役もそれを正面から受け止め、現状説明や自分の考えを述べ、意思疎通が活発に行われる。OBの中でも年代の近い世代のつきあいも活発だが、世代横断的なつきあいもまたかなり盛んで、馬を離れた世界でも役に立っている。殺伐とした「リストラ社会」で馬術部のつながりは、帰るべきふるさとの役割を果たしている。

部長、監督（コーチ）、現役、OBの権限と責任の所在と範囲は明確に整理されており、みなそれぞれの立場から言いたいことを言っている。OBグループは、部長、監督（コーチ）の去就に影響を与えるよい意味での圧力団体として機能している。OBグループは、馬術部のファームの機能をもつ組織をもち、ボランティアで学生に適した能力ある馬を発掘して調教し昇格させ、また故障・調教崩れで降格された馬の再調教もやっている。

こんな馬術部にしたいものと個人的には思ってきましたが、皆さんはいかがでしょうか。

(2004・1・6)

目次

巻頭書 ― “現実可能で理想的な北大馬術部” を描く ―	市川 瑞彦	1
前主将より	寺島 良	4
会計報告	馬場 紘子	5
活動報告		6
戦績報告		11
市川先生退任特集		
退任にあたって	市川 瑞彦	18
市川先生退任によせて	斉藤 善一	23
	井上 京	24
	鎗木 照夫	25
	中村 晃史	25
	池田 智義	26
	角堂 豪	27
	川崎 洋史	28
	森田 崇之	28
	杉山 賢治	29
	山口 剛司	31
	寺島 良	31
調教報告		
北凌号	武井 亮	32
北旋風号	竹田 敏宏	47
北彗号	木村 滋之	60
北鳳号	木村 滋之	66
サラマンダー号	武井 亮	71
エルグレイ号	高島 涉	73
北翔号	前野 伸策	74
入厩報告		
シーベスト号	前田 晋也	76
パワフルショット号	小阪 梨奈	76
離厩報告		
北鈴号（調教報告）	寺島 良、小阪 梨奈	77
北陽号（調教報告）	高島 涉、橋場 拓冬	78
リッチステート号（調教報告）	竹田 敏宏、馬場 紘子	81
ウッドバイン号（調教報告）	寺島 良	85

OB 寄稿

我がボブラ並木横の青春	宮崎 健	86
雲流れて旅路遥か	春田 恭彦	93
馬術部を振り返って	松原 貴史	97
北海道大学水産学部馬術部活動内容活動報告	鈴木 雅人	99
卒部にあたって		101
部員紹介		107
OB 名簿		113
現役部員名簿		123
広告		124
編集後記		128

【前主将より】

寺島 良

主将となって1年間、あっという間に過ぎてしまいましたが、この1年馬術部に関して皆さんには本当に感謝しています。ありがとうございました。後輩の皆さんには全日二走・総合団体出場という目標を達成できなくて申しわけなかったと思っていますが、上級生1人1人がその目標に向かって一生懸命だった姿は見せられたと思います。4年目が抜けた後人数が少なくなって大変でしょうが、がんばって欲しいです。人数が少ないということは1人1人の質を今まで以上に上げていかないと、部の力は向上していきません。当たり前のことを当たり前にやる、現状に満足せず常に向上心をもつ、これを頭の中に置いてこれからやっていって欲しいです。人が少なくて大変な面はみんなで考えてその場その場にいちばん合った対応をしていけばいいと思います。そしてよりよい部活をつくっていくことを期待しています。

会計報告 2003年1月～12月

会計 馬場紘子

収入

部費	550,000
モモセ	543,800
道庁バイト	181,500
道馬連バイト	192,000
JRA開催	2,232,146
セレクトセール	108,500
メインフィールズバイト	148,000
朝日新聞バイト	59,200
選挙バイト	339,161
生協バイト	47,700
大会運営	1,761,600
学馬連補助	1,235,000
エルドラランチバイト	48,000
その他バイト	79,000
寄付	75,000
計	7,600,607

支出

飼糧	1,115,761
薬品	784,371
電話	85,054
装蹄	1,542,860
交通	1,274,541
車両	975,019
馬具・備品	121,268
作業	92,865
後援会	124,312
馬匹	63,220
部報	1,811
ビデオ・カメラ	57,052
記録	30,387
衛生	18,700
企画	39,965
大会関係	99,143
大会エントリー	426,440
雑費	119,069
計	6,971,838

【主将】

前野 伸策

今の部員数は3年目2人、2年目4人、1年目6人の12人、馬匹は9頭です。このように部員数（特に最上級生）が少ないために今シーズンは下級生もかなり負担が大きくなると思います。実際に馬配の面からしてもほとんどの2年目が1頭の馬を任されています。このことは下級生から権利を目指して行動できるという点ではよいと考えられます。しかし、新馬調教や1年目の技術指導に余裕がなくうまくいっていないのが現状です。

・指導方針・練習体系について

指導方針についての明確な問題として上級生によって言っていることがばらばらでわかりにくいこと、1年を通した指導方法がないため効率のよい指導ができていないということがあげられると思います。結果として2年目の代替わりの時点で1頭の馬を任されるレベルまで持っていくのができていないと思います。対策として練習を部班でやるにしろ、各個でやるにしろ1年目から2年目の代替わりまで通しての確固とした指導方針が必要だと思います。このことは1年で確立するのは難しいかもしれませんが必ずやっていかないといけない、やっていこうと思っています。結局いい馬がいなくても技術がなければ乗りきれないいくら良い新馬が来ても育てられないと思います。今シーズンやるべきことの1つとして指導方針をしっかりとしたものにしていき、下級生の技術のベースアップすることだと思います。

・馬匹について

二走	北旋風（14） エルグレイ（15） 北翔（14）	総合	北凌（17） 北旋風（14） 北曄（11） 北鳳（8）
新馬	シーベスト（7） パワフルショット（7）	練習馬	サラマンダー（21）

昨シーズン久々に団体で総合の権利をとることができました。しかし、権利を取った馬も含めて高齢であったり、体が悪かったりしていて将来的に部の核になる馬がい

るかといわれればそうではありません。現状として新馬を積極的に探していき、部の核になる馬を育てていかななくてはなりません。今新馬はOBの方をお願いしていますが、現役がしっかり引き継げるためにも技術向上が課題であります。また新馬の調教に現役からも積極的ににかかわり話し合い、新馬調教のプロセスなどをしっかり勉強することも将来的に重要だと思います。練習馬についてはいろいろな意見がありますが、体の悪い馬がいる・新馬を入れていきたい・主戦馬の負担を減らす・下級生のベースアップをしたいなどの理由から現状としては必要だと考えます。

ほかにもいろいろ感じていることはありますが主に以上のことを念頭においてやっていこうと思います。

【副将】

前田 晋也

現在の北大馬術部は、最上級生が2人である上に全員で12人しかいない。この人数で9頭の馬を管理し、バイトをし、また学生であるために勉強もしなければならない。

そういった状況の中でこそ全員で協力することが必要だと思う。厳しい状況であることはだれでも分かっているはずなのだが、そういったことは思っているだけではどうにもならず、現状を打開するための行動をおこさなければ意味がないと思う。「誰かがやるだろう」といった他人まかせの考えや「自分さえよければいい」といったひとりよがりな発想は捨て、自分から動いて部全体がよい方向に向かうようにしていかなければならないと思う。

【主務】

小阪 梨奈

主務の仕事は施設管理、大会運営が主なものである。

施設管理に関しては、現在は特に目立った問題はない。何かあれば大学の施設という事もあり学生部の方が対応してくださる。

大会運営については部員数の減少により部員一人一人に対する負担が大きくなっている。他大学の協力がなくては、主管をこなすのが困難な状況でもある。主管の大会では競技に臨む体制が十分にできていない。この点は、なんとかしなくてはいけない問題である。

【馬匹】

馬場 絃子

ここ数年、馬のケガに加えて人のケガが急速に増加しています。昨年度はケガ人が多すぎて体育会の保険がおりなくなったほどです。馬匹の仕事は、人馬ともにベストコンディション(肉体的・精神的に)で臨めるように導くことだと思います。そのためには、普段の体調管理・運動管理が重要なのは言うまでもありません。まず第一に事故・怪我にならないよう細かいところまで気を配り、最小限に抑えることが大切であり、それでも発生する事故・ケガは早急に発見し、しかるべき対処がなされるべきです。そのためには部員全員の意識の向上が必要で、また部員全員が自分のついている馬だけでなく、他の馬や人を含めて全体を見渡せることが必要だと思います。私は馬匹として、率先してその雰囲気作りをしていきたいと思っています。まだまだ未熟者なので OB の皆様にご意見を伺うこともあるかもしれませんが、どうかご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願いします。

【飼料】

利根川 正明

平成 15 年度の飼料の報告をしたいと思います。

昨年度報告したとおり、飼料の与え方を 2 点変更しました。その 2 点はリットルを単位として飼料を与えていたのをグラムを単位として与えていくこととサプリメントとして使っていたリンカルをやめ新たにパワーサブリ 25 を使うことです。

今年度、私用した主な飼料は燕麦、ふすま、ヘイキューブ、塩、パワーサブリ 25 の 5 種類で、運動をした馬にはおよそ燕麦 1kg、ふすま 0.3kg、兵キューブ 0.6kg、パワーサブリ 25 0.1kg を朝昼夕に与え、塩を大さじ 2 杯朝夕に与えています。またこれらの飼料は湯でふやかして与えています。乾草は各馬約 1.5kg を朝昼夕夜に与えています。これらの飼料は明治史料から購入しています。また乾燥や敷藁は畜大 OB の長岡さんと中曽根さんからバイト代としていただいています。

飼料の与え方を変えてからは馬が以前よりも、たくさん乾燥を食べるようになりました。やはり、以前に比べ全体的に濃厚飼料が減ったために粗飼料である乾燥を多く食べるようになったのだと思います。そのために昨年度はなんとか長岡さんからいただいた乾燥でやってこれましたが今年度は足りなくなる可能性が高いと思います。そこを青草を与えていきカバーしていきたいのですが、人手不足もありなかなか青草を刈って与えるという作業を行う余裕がない状態となっています。そうすると業者から購入する方法を取らなくては

ならなくなるのですが、部員の減少によって部費やバイトによる収入が減っている厳しい財源の中では、かなり会計を圧迫してしまうことになります。このために、上手にバランスをとりつつ、濃厚飼料を多少増やし、粗飼料(乾燥)を一年通してやっていけるだけの量を毎回与えていくなどの対策を立てなくてはいけないのかもしれないかもしれません。

次にボロ山の回収ですが、今年度も上田さんや農崎さんなどの農家の方々に堆肥として改修していただきました。

また、北大農場との関係ですが、農場のアルファルファを刈らせてもらったりしましたが、これもほかのバイトや大会などの兼ね合いもありなかなか満足に行うことができず、あまり農場との関係を深めることはできませんでした。これも来年度の課題だと思います。

来年度も部外の方々への感謝の気持ちを忘れず、飼料としての役割を果たしていきたいと思っています。よろしくお願いします。

【後援会】

前田 晋也

後援会という役職では、OBの方々と馬術部のパイプ役として、年4回のコンパや初乗り・OB戦を行ったり、戦績や部報を送らせていただいていたたりしています。

北大馬術部のOBの方は全国各地に散らばっておられ、すべての方と交流をもつことは容易ではありません。しかし、平成6年卒の倉本さんが開設してくださっている「北海道大学馬術部後援会」のホームページ(<http://www4.big.or.jp/~nono/hokudai/>)や昨年から始めたEメールなどを通して、遠くにお住まいの方とも交流をもち続けていきたいと思っています。現役のほうからもホームページの掲示板の書き込みなどをどんどん行ってきたいと思いますので、皆様もぜひお立ち寄りください。

また、昨年皆様のご協力により、郵送の代わりにEメールによるご連絡を始めました。これにより年間約5万円の経費を削減することができます。ご協力ありがとうございました。また、新たにEメールでの連絡を希望される方やアドレスに変更のある方は北大馬術部のメールアドレス(hokudaibajutubu@hotmail.com)や部室(Tel/Fax 011-737-1626)のほうまでお知らせください。

札幌にお越しの際はぜひ部室のほうへお立ち寄りください。

【会計】

馬場 紘子

現在、北大馬術部の会計の状況は 2 年でとんとんといったところですが、馬運車やトラクターなど老朽化が進み早急に買い換えなければならないもののことを考えると、非常に厳しいと言えます。この危ない状況を打開して少しずつでも蓄えを増やしていくべきだと思いますが、そのためには部費を上げる、バイトを増やすという手段をとらざるを得ません。授業との両立を考えると、部員数の減少に伴ってバイトの数を思うように増やすこともできず、現役部員の負担がますます大きくなっているのが現状です。部活の規模を縮小させずにやっていくためにも、是非とも OB の皆様のご理解とご協力を賜りたいと存じます。

●対東北大学定期対抗戦(於 東北大学 3月30日)
 参加選手 前田(2) 利根川(2) 横場(2)
 優勝 北海道大学
 準優勝 東北大学

●第33回関東東北女子学生馬術大会(於 原町市馬事公苑 3月30日)

◇団体飛越競技

参加選手 佐賀(4) 馬場(3)
 優勝 帝広畜産大学
 準優勝 北海道大学
 3位 岩手大学

◇ジムカーナ競技

1位 武田 サウスイーグル 岩手大学
 2位 今野 ヘルフラワー 福島大学
 3位 三越 メイクウーク 福島大学
 10位 小坂 ヘルフラワー 北大(2)

総減点 走行所有時間
 0 40.04
 0 40.46
 0 40.79
 8 63.63

●四立七大学総合体育大会(於 名古屋大学)

参加選手 木村(4) 高島(4) 竹田(4)
 優勝 名古屋大学
 準優勝 北海道大学
 3位 東京大学
 最優秀選手 八木 名古屋大学
 優秀選手 木村 北大(4)
 石井 東京大学

●第31回半沢杯記念馬術大会(於 北海道大学 5月4,5日)

◇一般馬場馬術第2課目競技(市川杯)

1位 田中 ティエムダンガン ライディングファーム・フセ
 2位 中川 フィールド・サタデー ライディングファーム・フセ
 3位 木村 アトム・シャワー ライディングファーム・フセ
 4位 木村 北風 北大(4)

得点率

58.4
 58.3
 52.5
 51.3

◇一般馬場馬術第3課目競技(斉藤杯)

1位 西井(H.14卒) カットパイロ 乗馬倶楽部メインフィーズ
 2位 馬場 北陽 北大(3)
 3位 ティエムダンガン ライディングファーム・フセ
 4位 佐賀 北鈴 北大(4)

得点率

60.9
 43.6
 43.5
 42.3

◇複合馬術大会(太極杯)

1位 木村 北鈴 北大(4)
 2位 尾崎(H.12卒) キー・ネーク 乗馬倶楽部メインフィーズ
 3位 小島 ユーフォー 駒倉学園大学
 open 武井 北凌 北大(4)
 open 寺島 北鈴 北大(4)

競技審査減点 障害減点 総減点
 69 0 69
 71 0 71
 72 5 77
 — 8 —
 71 — —

◇標準障害飛越競技120cmクラス(半澤杯)

1位 大林 タイナミックハート JRA札幌競馬場馬術部
 2位 西原 タイナミックハート JRA札幌競馬場馬術部スポーツ少年団
 3位 根田 リーダーズ 駒倉学園大学
 5位 寺島 ウッドハイン 北大(4)

減点

0
 8
 13
 20

◇標準障害飛越競技100cmクラス(河田杯)

1位 木村 アトム・シャワー ライディングファーム・フセ
 2位 木村 ヘル・エリス ライディングファーム・フセ
 3位 石田 フーダレス JRA札幌競馬場馬術部スポーツ少年団
 4位 松井(S.46卒) 岩倉 モモセライディングファーム
 5位 松井(S.46卒) タニノレド モモセライディングファーム
 14位 寺島 北鈴 北大(4)
 17位 竹田 北凌風 北大(4)

減点

0
 0
 0
 0
 0
 9
 12

J.O.タイム

37.00
 44.84
 47.92
 48.56
 50.36

◇標準障害飛越競技80cmクラス(小池杯)

1位 瀬戸 ロイヤルブルー 駒倉学園大学
 2位 前田 北鈴 北大(2)
 3位 馬場 サラマンダー 北大(3)
 9位 木村 北風 北大(4)
 10位 利根川 北凌風 北大(2)
 13位 小坂 サラマンダー 北大(2)
 24位 高島 北陽 北大(4)
 29位 日野 北凌風 北大(2)
 open 川崎(H.12卒) タイナティ 乗馬倶楽部メインフィーズ

タイム

78.75
 77.55
 76.54
 70.43
 69.14
 65.60
 50.80
 111.82
 96.24

減点

0
 0
 0
 0
 0
 0
 7
 24
 8

●三大学定期戦(於 北海道大学 5月11日)

参加選手 小坂(2) 利根川(2) 前田(2)
 優勝 駒倉学園大学
 準優勝 北海道大学
 3位 帝広畜産大学

●第17回北海道新緑馬術大会(於 ノーザンホースパーク 5月23日～25日)

◇新馬障害飛越競技A

川崎(H.12卒) ファンキー・パブル 乗馬倶楽部メインフィーズ
 高野(S.41卒) ウィットワーム 乗馬クラブ・キーク

減点 獲得賞金
 8 0
 2反E 0

◇一般第2課目馬場馬術競技

1位 佐野 アリエル ビクトリーライディングクラブ
 2位 山田 フロンソノ ノーザンホースパーク
 3位 森下 パンブ・キンバイ 北星乗馬クラブ
 4位 木村 北風 北大(4)

得点率

57.0
 51.0
 48.9
 47.5

◇一般第3課目馬場馬術競技					得点率
1位	山口	ウナルケイノ	ノーザンホースパーク		62.6
2位	八戸	シェラスガイ	ノーザンホースパーク		61.2
3位	多田	クルーグ	モセサディングファーム		60.0
7位	佐賀	ウラマンダー	北大(4)		50.4
15位	馬場	北陽	北大(3)		43.8
◇一般ツースター総合馬場馬術競技A					得点率
1位	尾崎(H.12卒)	キティネーク	泉馬倶楽部メインフィーズ		54.3
2位	鈴木	マキシマムプレイス	酪農学園大学		53.7
3位	斉藤	ユウハク	酪農学園大学		42.0
◇L級A標準障害飛越競技(一般の部)					減点
1位	大林	柏未瑠	帝広畜産大学	減点	J.O.タイム
2位	近藤	ハツツイオ	コンドウファームライディングジール	0	43.82
3位	橋本	ラッカー・ウ・アン・ボムビ	ノーザンホースパーク	0	45.07
5位	松井(S.46卒)	ミズ電	モセサディングファーム	0	48.55
9位	高島	エルグレイ	北大(4)	0	49.55
10位	高野(S.41卒)	カルハリス	泉馬クラブテキーラ	0	54.48
13位	武井	北凌	北大(4)	0	55.56
14位	塚崎(H.12卒)	キティネーク	泉馬倶楽部メインフィーズ	0	70.28
19位	松井(S.46卒)	タニボレロ	モセサディングファーム	4	落馬E
29位	竹田	北庭風	北大(4)	25	
◇M級C標準障害飛越競技					減点
1位	広瀬	柏瑠	帝広畜産大学	減点	J.O.タイム
2位	堀坪	モンテウエルデ	モセサディングファーム	0	48.47
3位	川北	リートハーモニー	ノーザンホースパーク	2	58.28
9位	木村	北替	北大(4)	9	
◇L級B標準障害飛越競技(初心者一般の部)					減点
1位	河合	柏未瑠	帝広畜産大学	減点	J.O.タイム
2位	岩本	柏瑠	帝広畜産大学	0	47.57
3位	高川	オレンジカウティ	白井牧場不二ファーム泉馬クラブ	0	48.43
4位	佐賀	ウラマンダー	北大(4)	0	48.85
7位	高島	北陽	北大(4)	0	53.23
8位	寺島	北鈴	北大(4)	4	
10位	前野	ウラマンダー	北大(3)	4	
11位	木村	北庭	北大(4)	4	
12位	小野(H.14卒)	キティネーク	泉馬倶楽部メインフィーズ	4	
18位	前田	北庭風	北大(2)	11	
	馬場	ウラマンダー	北大(3)	落馬E	
◇新馬障害飛越競技B					減点
	川崎(H.12卒)	ファンキーハブル	泉馬倶楽部メインフィーズ	0	獲得賞金
◇ビギナーズ標準障害飛越競技L1A(基準タイム90秒)					タイム
1位	加藤	イースタンフラワー	白井牧場不二ファーム泉馬クラブ	83.04	減点
2位	秋山	イースタンフラワー	白井牧場不二ファーム泉馬クラブ	81.37	0
3位	中垣	ルグエリ	ライディングファーム・フセ	80.41	0
4位	坂本	北風	北大(2)	75.59	0
open	高野(S.41卒)	ウィットワール	泉馬クラブテキーラ	79.40	0
◇ビギナーズ標準障害飛越競技L2A(基準タイム90秒)					タイム
1位	堀	タニボレロ	モセサディングファーム	88.26	減点
2位	鈴木	ブラッジーニズ	酪農学園大学	95.01	0
3位	秋山	イースタンフラワー	白井牧場不二ファーム泉馬クラブ	83.86	0
open	高野(S.41卒)	ウィットワール	泉馬クラブテキーラ	73.23	4
◇スピードアンドハンディネスLA障害飛越競技(一般の部)					成績時間
1位	松井(S.46卒)	タニボレロ	モセサディングファーム	63.61	
2位	橋本	ラッカー・ウ・アン・ボムビ	ノーザンホースパーク	65.38	
3位	近藤	ハツツイオ	コンドウファームライディングジール	67.24	
11位	高野(S.41卒)	カルハリス	泉馬クラブテキーラ	74.16	
22位	寺島	北鈴	北大(4)	105.00	
23位	高島	北陽	北大(4)	115.08	
	竹田	北庭風	北大(4)	2反E	
◇ツースター総合馬場馬術競技B					得点率
1位	三万	柏瑠	帝広畜産大学		57.1
2位	木村	北替	北大(4)		56.4
3位	大林	柏未瑠	帝広畜産大学		53.9
5位	高島	北陽	北大(4)		53.2
8位	寺島	北鈴	北大(4)		51.6
17位	武井	北凌	北大(4)		45.6
◇一般スピードアンドハンディネスMC障害飛越競技					成績時間
1位	村上	アーレストローク	札幌泉馬倶楽部	69.40	
2位	白井	ヤング	白井牧場不二ファーム泉馬クラブ	69.80	
3位	堀坪	モンテウエルデ	モセサディングファーム	72.61	
open	高野(S.41卒)	カルハリス	泉馬クラブテキーラ	2反E	
◇ビギナーズ障害飛越競技L2B(基準タイム70秒)					タイム
1位	坂本	北風	北大(2)	67.45	
2位	高橋	イースタンフラワー	白井牧場不二ファーム泉馬クラブ	66.90	

●第38回北海道春季馬術大会(於ノースホースパーク 6月13日～15日)

◇一般第2回馬場馬術競技				得点率	
1位	山田	ブロンソ	ノースホースパーク	53.7	
2位	方原	ウインセニ	酪農学園大学	52.7	
3位	八戸	藤澄	酪農学園大学	52.4	
5位	駒田	サラムダー	北大(2)	51.1	
9位	小坂	北陽	北大(2)	47.6	
11位	日野	北凌	北大(2)	47.1	
◇一般ツースター総合馬場馬術競技A				得点率	
1位	三方	柏海	帝広畜産大学	60.8	
2位	娘川	エレストクワイ	酪農学園大学	58.4	
3位	木村	北風	北大(4)	56.0	
10位	竹田	北風	北大(4)	44.8	
◇L級A標準障害飛越競技(一般の部)				減点	J.O.タイム
1位	迫野	エクスオー	十勝柏友会乗馬クラブ	0	46.37
2位	村上	バンブーキンバイ	札幌乗馬倶楽部	0	47.05
3位	加藤	ナショナルバトル	にいかつぶ乗馬倶楽部	0	47.86
23位	高島	北陽	北大(4)	6	
27位	寺島	北鈴	北大(4)	12	
30位	竹田	北風	北大(4)	13	
33位	武井	北凌	北大(4)	16	
◇一般M級C標準障害飛越競技				減点	J.O.タイム
1位	阿部	プリンスファイター	ノースホースパーク	0	39.81
2位	川北	ワキンス	ノースホースパーク	0	41.53
3位	岩坪	モンテウエルテ	モモセライディングファーム	0	45.73
12位	尾崎(H12卒)	キティホーク	乗馬倶楽部マンフィールズ	8	
	高島	エルグレイ	北大(4)	落馬E	
◇一般新馬障害飛越競技B				減点	獲得賞金
1位	川北	ショウガンアニー	ノースホースパーク	0	¥10,000
2位	近藤	ミスマンティ	コルドウファームライディングジール	0	¥10,000
川崎(H12卒)	ファンキーハブル	乗馬倶楽部マンフィールズ	0	¥10,000	
◇ビギナーズ障害飛越競技L1				減点	
1位	橋本	ニクスリット	新設乗馬スポーツ少年団	0	
2位	前野	北翔	北大(3)	0	
3位	中垣	ルウエリ	ライディングファーム・フセ	0	
5位	坂本	北風	北大(2)	0	
12位	橋場	北風	北大(2)	0	
◇一般ツースター総合馬場馬術競技B組				得点率	
1位	大林	柏来鶴	帝広畜産大学	59.5	
2位	宮田	ウモニシキ	酪農学園大学	56.5	
3位	武井	北凌	北大(4)	55.3	
4位	高島	北陽	北大(4)	55.1	
7位	寺島	北鈴	北大(4)	52.5	
◇L級スピードアンドハンディネス障害飛越競技(一般の部)				タイム	
1位	加藤	ナショナルバトル	新設乗馬スポーツ少年団	61.52	
2位	森田	モンテウエルテ	JRA日高育成牧場	65.07	
3位	村上	バンブーキンバイ	札幌乗馬倶楽部	69.28	
17位	竹田	北風	北大(4)	100.83	
◇L級B標準障害飛越競技・新人の部				減点	
1位	高橋	イースタンフラー	白井牧場不二ファーム乗馬クラブ	0	
2位	藤下	バンブーキンバイ	北星乗馬クラブ	4	
3位	河津	モンテウエルテ	清川高校	5	
4位	佐賀	北鈴	北大(4)	8	
◇L級B標準障害飛越競技・初心者一般の部				減点	J.O.タイム
1位	下山	柏海	帝広畜産大学	0	29.54
2位	森久保	タノホレロ	モモセライディングファーム	0	32.85
3位	利根川	サラムダー	北大(2)	0	35.53
6位	木村	北風	北大(4)	0	41.00
19位	竹田	北風	北大(2)	5	

●第44回札幌市民体育大会(於 北星乗馬クラブ 6月29日)

◇札幌市民長杯争奪障害飛越競技				減点	J.O.タイム
1位	西原	ハルステッド	札幌光星高校	0	33.53
2位	菊池	インターラプター	東海中学校	0	42.00
3位	森下	バンブーキンバイ	手稲仁会病院	0	46.73
前野	北翔	北大(3)		0	棄権

●第75回北日本学生馬術選手権大会(於 岩手大学 7月6日)

◇参加選手				得点率
◇1回戦	木村(4)	高島(4)		
1位	木村	コルドウ	北大(4)	52.27
2位	高島		北大(4)	48.48
3位	野呂		岩手県立大学	47.73
◇準決勝				得点率
1位	阿部		岩手大学	54.67
2位	高	オリエンタ	東北学院大学	50.89
3位	奥村		帝広畜産大学	48.44
4位	高島		北大(4)	46.67

◇準決勝				得点率
1位	木村	ルーベンス	北大(4)	51.89
2位	三宅		東北大学	49.89
3位	吉賀		酪農学園大学	48.78
◇決勝				総得点
1位	宮		東北学院大学	526.0
2位	河部		岩手大学	483.0
3位	木村		北大(4)	443.0
●第39回北日本学生馬術女子選手権大会(於 岩手大学 7月6日)				
◇1回戦				得点率
1位	馬場	トートップ	北大(3)	47.73
2位	高橋		岩手県立大学	45.15
3位	一色		北里大学	44.85
◇2回戦				得点率
1位	佐賀	ウラン	北大(4)	47.88
2位	湯野		酪農学園大学	45.76
3位	高橋		東北大学	45.00
◇準決勝				得点率
1位	佐賀	ルーベンス	北大(4)	45.89
2位	菊池		東北学院大学	45.22
3位	馬場		北大(3)	44.11
◇決勝				総得点
1位	西		岩手大学	430.0
2位	菊池		東北学院大学	341.0
3位	辻		岩手大学	-260.0
4位	佐賀		北大(4)	-308.0
●第28回北海道馬術大会(於 ノーザンホースパーク 7月18~20日)				
◇新馬障害飛越競技A				減点 獲得賞金
	橋本	ジュテイル	ノーザンホースパーク	0 ¥8,000
	川北	シヨットカンアニー	ノーザンホースパーク	0 ¥8,000
	川崎(H.12卒)	ファンキーバブル	泉馬倶楽部メインフィールズ	0 ¥8,000
	窪田	ジッパ	ノーザンホースパーク	0 ¥8,000
	近藤	ミスマンディ	コンドウファームライディングジール	0 ¥8,000
◇一般スビートアンドハンディネス障害飛越競技MB				成績時間
1位	近藤	ハツワイ	コンドウファームライディングジール	68.85
2位	村上	ハンフキンバイ	札幌泉馬倶楽部	70.94
3位	下田	トカチアス	十勝柏友会泉馬クラブ	72.62
9位	前野	北陽	北大(3)	92.06
◇一般ツースター総合馬場馬術競技				
1位	高島	北陽	北大(4)	
2位	竹田	リクスリート	北大(4)	
3位	尾崎(H.12卒)	キティホーク	泉馬倶楽部メインフィールズ	
7位	木村	北陽	北大(4)	
9位	寺島	北陽	北大(4)	
◇スビートアンドハンディネス障害飛越競技LA(一般の部)				成績時間
1位	守山	トカチアス	十勝柏友会泉馬クラブ	66.64
2位	森田	コンモロウ	JRA日高育成牧場	67.40
3位	八木	ナシヤルバトル	にいかつぶ本通り泉馬クラブ	68.49
4位	松井(S.46卒)	岩登	モモタラディングファーム	69.39
14位	高野(S.41卒)	カルバトス	泉馬倶楽部メインフィールズ	79.79
	尾崎(H.12卒)	キティホーク	2反E	
	松井(S.46卒)	タニホレロ	モモタラディングファーム	落馬E
◇新馬障害飛越競技B				
	川崎(H.12卒)	ファンキーバブル	泉馬倶楽部メインフィールズ	
	近藤	ミスマンディ	コンドウファームライディングジール	
	橋本	ジュテイル	ノーザンホースパーク	
	川北	シヨットカンアニー	ノーザンホースパーク	
	高野(S.41卒)	ウィクトワール	泉馬倶楽部メインフィールズ	
◇一般M級C標準障害飛越競技				減点 J.O.タイム
1位	佐々木	サントロベック	JRA日高育成牧場	0 38.71
2位	小島	ユフオー	酪農学園大学	0 45.32
3位	中井	チャレンジ8	酪農学園大学	0 51.89
10位	高島	エルクレイ	北大(4)	12
15位	竹田	北陽風	北大(4)	30
◇L級A標準障害飛越競技(一般の部)				減点 J.O.タイム
1位	武蔵	サントロベック	JRA日高育成牧場	0 38.83
2位	森久保	タニホレロ	モモタラディングファーム	0 43.31
3位	森田	コンモロウ	JRA日高育成牧場	0 46.91
4位	松井(S.46卒)	岩登	モモタラディングファーム	0 49.24
11位	武井	北陽	北大(4)	11
14位	寺島	北陽	北大(4)	13
15位	高野(S.41卒)	カルバトス	泉馬倶楽部メインフィールズ	13
	高島	北陽	北大(4)	2反E
	木村	北陽	北大(4)	2反E

◇L級B標準障害飛越競技(婦人・壮年の部)				減点	J.O.タイム
1位	河津	トカチアス	清河高校	4	
2位	岩坪	シムバリエ	モモセイアイディングファーム	6	
3位	佐藤	リザーブ	オーフルホースコミュニオン	8	
open	高野(S.41 卒)	ウイットワール	泉馬クラブテキーラ	0	46.23

◇L級B標準障害飛越競技(一般の部)				減点	J.O.タイム
1位	坂野	リュートハーモニー	ノーザンホースパーク	0	37.16
2位	香田	タニホレロ	モモセイアイディングファーム	0	37.83
3位	葛西	モチョホス	ノーザンホースパーク	0	39.89
7位	一色	サラマンダー	北大(1)	4	
	植場	サラマンダー	北大(2)	2反E	
	前田	サラマンダー	北大(2)	2反E	
	竹田	リッチステート	北大(4)	2反E	

●第38回北日本学生馬術大会(於 ノーザンホースパーク 8月4～12日)

◇二回走行障害飛越競技				一走目	二走目	総減点	J.O.タイム
1位	広瀬	柏楓	帝広畜産大学	4	4	8	44.20
2位	三方	柏海	帝広畜産大学	8	0	8	49.13
3位	小島	ユフォー	酪農学園大学	4	8	12	
4位	柴田	柏風	帝広畜産大学	12	4	16	
5位	真	ハワーステーション	東北学院大学	12	8	20	
6位	石原	ルシファー	東北学院大学	0	22	22	
7位	斉藤	リーダース	酪農学園大学	29	12	41	
8位	高島	エルグレイ	北大(4)	31	12	43	
9位	七木田	ハリアン	岩手大学	16	29	45	
10位	中井	チャレンジャー	酪農学園大学	12	34	46	
	寺島	ウットハイム	北大(4)	24	3反E		
	前野	北鷲	北大(3)	3反E	3反E		
	木村	北鷲	北大(4)	3反E			
	竹田	北駿風	北大(4)	障害問E			

◇学生実業総合馬術競技				調教	耐久	余力	総減点
1位	三方	柏海	帝広畜産大学	71.8	0.0	1	72.8
2位	広瀬	柏楓	帝広畜産大学	73.1	0.0	0	73.1
3位	富山	尋	帝広畜産大学	74.4	0.0	8	82.4
4位	小島	ユフォー	酪農学園大学	66.8	4.0	13	83.8
5位	竹田	北駿風	北大(4)	81.4	0.0	7	88.4
6位	柴田	エベレストクライマ	酪農学園大学	66.5	2.8	20	89.3
7位	栗川	テリオ	酪農学園大学	70.7	20.0	8	98.7
8位	中井	チャレンジャー	酪農学園大学	73.2	20.0	10	103.2
9位	木村	北鷲	北大(4)	68.6	40.0	16	124.6
10位	方崎	ウインゼニス	酪農学園大学	85.0	49.6	12	146.6
11位	阿部	アップルハー	岩手大学	67.5	63.6	26	157.1
12位	斉藤	ユウバク	酪農学園大学	83.0	40.4	48	171.4
15位	武井	北駿	北大(4)	77.6	149.8	0	227.4
	寺島	北鷲	北大(4)	71.2	20.0	インスペクションE	
	竹田	リッチステート	北大(4)	65.2	3反E		
	高島	北鷲	北大(4)	66.1	5反E		

◇L級B標準障害飛越競技				減点	J.O.タイム
1位	山下	柏朱鷲	帝広畜産大学	0	37.87
2位	長瀬	柏訓	帝広畜産大学	0	45.41
3位	島野	ユフォー	酪農学園大学	0	45.64
13位	馬場	北駿	北大(3)	4	
14位	利根川	北鷲	北大(2)	4	
16位	植場	サラマンダー	北大(2)	6	
	日野	北鷲	北大(2)	3反E	
	佐賀	北駿	北大(4)	3反E	
	前田	サラマンダー	北大(2)	障害問E	

◇新人新馬障害飛越競技				減点	
1位	瀬戸	ブラッグゼンズ	酪農学園大学	0	
2位	中村	テリオ	酪農学園大学	0	
3位	磯元	ザ・シエネス	岩手大学	0	
20位	一色	北鷲	北大(1)	11	

●第17回北海道秋季馬術大会(於 ノーザンホースパーク 9月20、21日)

◇一般新馬障害飛越競技A				減点	獲得賞金
	橋本	ジュディム	ノーザンホースパーク	0	¥6,600
	高野(S.41 卒)	ウイットワール	泉馬クラブテキーラ	0	¥6,600
	森野	アラビアンスキー	ビクトリアライディングクラブ	0	¥6,600
	川北	ワカミ	ノーザンホースパーク	0	¥6,600
	川崎(H.12 卒)	ファンキーハブル	泉馬クラブメインフィールズ	0	¥6,600
	近藤	ミス マンディ	コンドウファームライディングシール	0	¥6,600

◇一般第3級馬場馬術競技				得点率	
1位	八戸	ジュラスカイ	ノーザンホースパーク	61.01	
2位	山口	ヴァルゲイナ	ノーザンホースパーク	60.58	
3位	秋田	マデイストーム	ノーザンホースパーク	60.14	
13位	佐賀	サラマンダー	北大(4)	49.57	

◇一般M級C標準障害飛越競技				減点	J.O.タイム
1位	橋本	ワキンス	ノーザンホースパーク	0	46.67
2位	橋本	カサノバデンディ	ノーザンホースパーク	0	50.93
3位	斉藤	ユウバク	酪農学園大学	0	60.29
8位	高島	エルグレイ	北大(4)	4	
16位	竹田	北駿風	北大(4)	16	

◇L級B標準障害飛越競技				減点	J.O.タイム
1位	川久保	ビッグガン	十勝柏友会乗馬クラブ	0	55.60
2位	川久保	レオン	十勝柏友会乗馬クラブ	0	経路E
3位	森原	アサシン	十勝柏友会乗馬クラブ	4	
open	高野 (S.41卒)	ウィットワール	乗馬クラブテキーラ	0	54.42
◇L級B標準障害飛越競技 初心者一般の部				減点	J.O.タイム
1位	春田	タニホレロ	モセライディングファーム	0	43.14
2位	玉井	柏海	帝広畜産大学	0	43.97
3位	森	柏海	帝広畜産大学	0	44.77
6位	木村	北風	北大(4)	0	48.78
◇ビギナーズ障害飛越競技L1A				減点	タイム
1位	林	北旋風	北大(1)	0	68.02
2位	沢川	マキシムブレイズ	酪農学園大学	4	64.33
open	植場	シーベスト	北大(2)	0	66.93
open	一色	シーベスト	北大(1)	0	61.02
◇ビギナーズ障害飛越競技L2A				減点	タイム
1位	坂本	ゼットマクイーン	モセライディングファーム	0	66.70
2位	石谷	インターラプター	北星乗馬クラブ	0	66.46
3位	堤	タニホレロ	モセライディングファーム	0	68.73
◇一般新馬障害飛越競技B				減点	獲得賞金
近藤	ミス マンディ	コトウファームライディングジール	0	¥8,000	
川崎 (H.12卒)	ファンキーハブル	乗馬クラブメインフィーズ	0	¥8,000	
森野	アラビアンシキー	ピクチャーライディングクラブ	0	¥8,000	
高野 (S.41卒)	ウィットワール	乗馬クラブテキーラ	0	¥8,000	
橋本	ジュテイル	ノーザンホースパーク	0	¥8,000	
◇ビギナーズ障害飛越競技L2B				減点	タイム
1位	井上	ジュバリエ	モセライディングファーム	0	60.99
2位	堤	タニホレロ	モセライディングファーム	0	78.82
3位	石谷	インターラプター	北星乗馬クラブ	0	81.24
5位	日野	ゼットマクイーン	モセライディングファーム	6	97.95
open	木村	北風	北大(4)	4	81.35
open	島崎	北風	北大(3)	落馬E	
●OB戦(於 北海道大学 10月12日)					
◇L級A標準障害飛越競技				減点	タイム
1位	武井	北渡	北大(4)	16	114.62
◇M級C標準障害飛越競技				減点	タイム
1位	高島	エルグレイ	北大(4)	4	93.61
◇L級B標準障害飛越競技				減点	タイム
1位	木村	シーベスト	北大(4)	0	
2位	武井	サラマンダー	北大(4)	0	73.94
3位	木村	北風	北大(4)	4	69.91
4位	利根川	サラマンダー	北大(2)	8	104.83
◇標準障害飛越競技80cmクラス				減点	タイム
1位	島崎	北風	北大(3)	0	67.02
2位	植場	シーベスト	北大(2)	0	67.29
3位	前田	北風	北大(2)	0	71.42
4位	一色	リチャステート	北大(1)	4	88.50
5位	竹田	リチャステート	北大(4)	8	120.88
◇標準障害飛越競技60cmクラス				減点	タイム
1位	関田	北渡	北大(1)	0	77.08
◇標準障害飛越競技クロスバー				減点	タイム
1位	野中	北渡	OB(S.59卒)	0	63.41
2位	尾崎	シーベスト	OB(H.12卒)	0	72.07
3位	坂井	北旋風	北大(1)	0	72.70
4位	岡崎	リチャステート	北大(1)	0	73.46
5位	鈴木	北旋風	北水(3)	0	75.95
6位	久保	サラマンダー	北大(1)	0	82.88
7位	林	北風	北大(1)	0	83.92
8位	安河内	リチャステート	北水(4)	0	89.21
9位	植持	サラマンダー	北大(1)	0	90.49
◇リレー				個人タイム	チームタイム
1位	吉川	北風	OB(H.15卒)	97.75	
	加藤	サラマンダー	OB(H.15卒)	101.35	283.99
	野中	リチャステート	OB(S.59卒)	84.89	
	岡崎	リチャステート	北大(1)	103.22	
2位	林	北風	北大(1)	90.22	290.73
	関田	サラマンダー	北大(1)	97.29	
	市川	北風	OB(S.38卒)	107.79	
3位	浜田	サラマンダー	OB(H.13卒)	108.15	316.69
	桑原	リチャステート	OB(H.12卒)	100.58	
	梅原	リチャステート	北水	108.33	
4位	藤部	サラマンダー	北水	124.08	333.00
	高島	北風	北大(4)	100.58	

●第24回山下杯・河田杯記念馬術大会

◇障害飛越競技80cmクラス

1位	木村	シーベスト	北大(4)
2位	鈴木	ムービング	北海道大学水産学部
3位	森	驍道	帯広畜産大学
7位	前田	シーベスト	北大(2)

減点	タイム
0	72.37
0	74.73
0	75.31
0	77.87

◇ジムカーナ競技

1位	宮部	エベレストクライマ	北海道大学水産学部
2位	伊与田	コイン	酪農学園大学
3位	井筒	レイン	酪農学園大学
5位	関田	レイン	北大(1)
7位	久保	エリモウインダム	北大(1)
15位	猪狩	コイン	北大(1)
18位	岡崎	エリモウインダム	北大(1)
	坂井	驍道	北大(1)

減点	タイム
0	96.72
0	95.74
0	99.66
0	100.74
0	102.45
1	108.62
16	154.39
3反E	

●第53回全日本学生騎乗飛越競技大会(於JRA馬事公苑 11月5日～9日)

◇第53回全日本学生騎乗飛越競技会

1位	辻本	月録	関西学院大学
2位	菅野	ヒルスカラ	東海大学
3位	戸本	明劇	明治大学
46位	高島	エルグレイ	北大(4)

一走目	二走目	総減点	JOタイム
0	4	4	52.89
0	4	4	54.14
4	0	4	56.76
12	28	40	

◇第46回全日本学生騎乗総合馬術競技会

1位	高橋	明桑	明治大学
2位	小林	桜陽	日本大学
3位	林	明劇	明治大学
12位	木村	北慧	北大(4)
35位	竹田	北院風	北大(4)
42位	武井	北凌	北大(4)

調教	耐久	余力	総減点
42.8	2.4	4	49.2
49.4	0.0	0	49.4
43.4	0.0	16	59.4
68.6	18.4	0	85.0
93.9	20.0	28	141.9
91.0	77.6	31	199.6

退任にあたって

部長 市川 瑞彦

1. 就任のころ

この3月末をもって、定年により馬術部長を退任いたします。早いもので、10年が経過したことになる。齊藤善一郎部長より部長就任の話があったとき、断りきれないと思った。部長はできればOBがいいにきまっているし、私に近い年齢では私のほかに、部に顔を出している（私も少しだが）OB教官はいなかったからである（当時部長可能OB教官は3人ぐらいはいたと思う。今ではなんと1人で、その虎の子の1人、井上京氏、を後任の部長としてお願いしてしまったので、これで左庫はなくなったわけである。新しい人材の出現が切望される）。当時は（そして今も）、自分のことだけでも面倒見きれていないので、はじめはできることならあまり深く関わらないで済ませたいという気があった。しかし、すぐにそれでは済まないと思った。なぜなら、私と部生活をともにした先輩・後輩（±3年世代）からの無言の圧力を感じたからである。何もしないでいては、「お前は何をやっているのか」という叱正で、夜もおちおち安眠してられないような気がしたのである。したがって、何ができるかは別として、実際にはやるしかなかったのである。「熱心ですね」と時折言われることがあるが、これが実態であった。就任の年には、同期の連中が東京などから札幌に集まってくれ、激励会を開いてくれた（ちなみに、昨年秋の全日学の折には、東京OB会幹事長の大場善明先輩の呼びかけで、「市川瑞彦君を囲む会」を開いていただき、前述の±3年世代が集まってくれました。中には、卒業以来40年ぶりに会った人もいて、時間があつという間に過ぎました。ありがたいことでした）。

就任後すぐに出た問題は、岡田光夫監督からの辞任の申し出であった。辞意が固いことと、指導いただいてからは46年、監督としての期間だけでも30年以上もお願いしてきた方だけに、ご意向を酌まないわけにもいかず、顧問に就任いただくということで了承せざるを得なかった。後任の監督として年代の若い2人の方をお願いをしたが、結果的には引き受けてもらえず、変則的なスタートとなった。この状態がいいとは思わなかったが、できれば馬場に頻繁に顔を出せる現役と比較的年代の近い人がいいと考えていたので、ずるずるとそのままの状態経過してしまった。私自身も30年ぶりに乗りはじめることも考えたが、時間的に見通しがたたなかった。もっとも、やってみても成算はなかったかもしれない（30過ぎまではいきなりでもなんとか乗れたように思うが、体重・体型も変わり、感覚が以前と違われ、スポーツがそんなに甘いものとは思えなかった）。畜大OBのK氏からは乗ることをすすめられたり、また同期の中では、乗らないで指導すればある程度学生は言うことを聞くかもしれないが、乗ると化けの皮がはがれて言うことを聞かなくなるから、「口頭馬術」に徹せよというありがたい(?)忠告もあつたり、さまざまであった。馬術の指導とは、できなければその場で自分でやって見せるという、我々の頃の言葉でいえば、基本的に「どれ、貸してみ」の世界であろう。これができないでは限界があつたと

いべきだろう。

2. 部長の役割

監督がいない以上、部長としての私の役割は、「戦績の向上」と、以下に述べる「現役とOBのコミュニケーション促進」の手助けをすることと自覚した。私のパソコンに10年前の斉藤前部長の送別パーティーでの挨拶原稿のメモが残っていたので、その一部を引用する。“なぜ私が大変だなあと感じたかと考えてみますと、先程申しました点に加えて北大馬術部の歴史と伝統があると思います。歴史とか伝統とかいうものも、煎じ詰めれば、人と人との連なり、つまり連鎖、つながった鎖、であると思います。その鎖のひとつひとつにOBの場合、大袈裟に言えば、若き日の人生がぶら下がっているわけですし、その鎖は大変に重いものであるわけです。一方、鎖の端には毎年新しい鎖が現役諸君の卒部によって絶えることなく、つくられているわけです。部長としての役目としては、最小限この現役とOB諸兄の結節点にいて、この鎖の一つとなって本当によかったなと思えるように、手助けをするということかと思えます。”

とはいえ、そんなに私の思い通りになるわけではない。この点はOBからの苦言を聞くとき、つらいところである。それは、何とんでも、かつて今も、部活動の主役は現役諸君であり、また彼らに近いOB諸君の影響が一番大きいのである。スタイルの急激な変更は、彼らがやってきたことの否定にもつながり、たとえ表面上は応諾したとしても、内部に大きなひずみを生じ、混乱の原因にもなりかねない。したがって、私の立場からみて、まどろっこしいことに必然的にならざるを得ない。

3. いくつかのこと

部長の立場は、一方で他の誰よりも恵まれた立場であることもわかってきた。自分の子供ですら言うことを聞かせるのが難しいというのに、同年齢以下の学生が、部長だからとにかく話を聞かなければならないと思っているのである。そんなわけで、はじめはいやだと思っていたが、この部長の特権に味を占めて、ずいぶんと楽しませていただいたのも事実である。つまり、「ハマった」のである。おそらく、やめた後はさびしい感じがするであろう。以下に、断片的に思い出すことを述べる。

1) 大会おじゃま虫

なにしろ30年もブランクがあるので、文句を言うにも最低実情を知らなければ話にならない。というわけで、大会などにはできるだけ観戦の機会をもった。この延長線で、帯広畜大、北里大学、福島県原町馬事公苑で行われた北日学の折には、テント持参で応援に行った。テント持参で部長がくっついてくる大学はないので、大会関係者から「ホテルをとります」などと言われたが、ホテルに泊まって実情把握はできない。現役時代のように、学生の食事当番が作った食事を食べてテントで寝るのは、まさに部長特権で、学生の料理

腕前の変遷を知るなど、得がたい経験をさせてもらった。日程的には、夏休みの1週間も消えていなくなるので、日数の確保、職場や家庭での言い訳は大変であったが、貴重で楽しい体験であった。

2) 馬場移転

馬場移転の経過は、すでに詳細に部報に報告したので省略するが、大きなイベントであったし、多くのOB諸兄のご協力もいただき立派なものになった。この件に関する斉藤前部長の申し送りは「火事場泥棒のようなことはするな」であったが、同時にこの機会を失すると数10年施設充実のチャンスがないと思ったのも事実であった。現在の問題は、a) 場所柄風が強く砂が飛散することと、b) 地盤が固まらないうちに使用せざるを得なかったことからくる(?) 水はけの悪さだが、前者のもっといい場所は私の力では及ばなかったし、後者は当時思い至らなかった。北大施設部、学務部、市役所、設計事務所関係者が一堂に会した集まりで、当事者である馬術部に施設部からは前以て資料提供はないし、市役所サイドは現状補償一点張りの主張がされたので、これでは先行きが思いやられて、「怒鳴って」会議が一時進まなくなったのもいい思い出である。

3) 馬の出し入れ

これは、私がもっとも頭を痛めているにもかかわらず成功していない問題で、難しいと思っているが、責任も感じている。部長になって数年間は、実情を知らないこともありあまり口を出さなかったが、誰か悪者になって見込みのない馬を出さないと将来が展望できないと思い、「出せ、出せ」と言うようになった。抵抗が強く、長い年月が流れた。この馬はだめだと烙印を押すのは非常に困難で、異論が出るのも当然である。しかし、私は何もしないよりも、失敗しても決断して先に進むのがいいと考え判断してきた。

競技馬としての資格は、かなり厳しい。競走馬上りのサラブレッドの場合、3分の1ぐらいはものになるかと考えていたが、今ではこれは甘く5分の1ぐらいかと思っている(まだ甘いという声もある)。この基準を守ると、5頭入れて3頭か4頭を出さなければならないことになる。遅くなればなるほど投資した時間と労力を考えると手放せなくなる。もう一つ関連する点は、現役には馬が育っていないから育つまで我慢せよとは、部長としてはかわいそうで言えなかったということがある。みんな最上級生は1回しかないからである。そのため、乗る馬がいない時には、1年でも2年でも試合に使える可能性がある馬を入れてその場しのぎをしてきた。これが本質的な解決策にならないのは明らかだが。残念ながら、馬を入れる方針を固めた時にうまい話が転がり込んでくるわけではない。いい話が合った時には馬房が満杯であったり、空いている時にはなかなか話がなくなったり選り好みせずに入れざるを得なかったり、といった具合だ。

もうひとつの問題点は、サラブレッドに限っても、部に入ってくる前の段階での馬の質の選抜である。正直言って、北大の馬の能力・馬体については、現在見劣りがすると思う。帯畜大や酪農大では前段階選抜をかなり厳しくやっているようだ。乗馬に適している馬は早くから目をつけられていて、川上で抜かれているのだ。川下に流れてくる馬ばかりでは、

歩留まりが悪くなるのは当然かもしれない。北大馬術部でもOBの力を結集すれば、もう少しは力があると思うので、今後の追求課題である。

4) その他

この間にも、いろいろな「事件」やできごとがあった。ハイライトは、1日のうちに2回も、別の用件で副学長室に呼び出され、釈明する羽目になったことである。いずれも一大事件にならないですんだのは幸いであった。今はなつかしい話題で、今後も折にふれて思い出し、語り草になるであろう。

5. おわりに

ふりかえってみると、自分なりに努力をしたつもりだが、力不足で、自己評価としては、施設の改善 70 点、現役・OBコミュニケーションの仲介 60 点、戦績・技術 40 点、自馬の整備 30 点といったところで、いまだ道半ばという感じである。ほかにも、いろいろ述べたことがあるが、紙数も尽きた。以下は、巻頭言の文章と併せて私の真意を酌んでいただきたい。いささか唐突かもしれないが、この間に得た教訓めいたことを今後の参考にまとめておく。当然のことながら、これらは次期部長を拘束するものではないことをお断りしておく。

1) 最上級生の1年はきわめて短い、あまり新しいことをやるな。

新しい代に替わると意義込みに燃え、練習方法などに新しいことを持ちこむ傾向がある。しかし、1年で定着するのは難しい。9月に代が変わっても、全日本学生馬術大会まで出場馬は人が変わらない。終わればすぐ雪で、障害はできない。雪が解ければ、すぐに半沢杯にはじまる試合の連続で、北日学が来てしまう。よそから来た馬は、今まで乗られてきたやり方にあわせよ。学生向きに変えるのには時間がかかるし、馬が混乱して迷惑だろう。

2) 基本馬術・部班運動の意義を重視せよ

北大の選手は姿勢はきれいになったが、ひ弱との評価がある。姿勢がきれいなのが悪いはずがない。問題は、馬が問題ある動きをしたとき、それをすばやく察知する感覚とそれに対処する技術を、いつどのようにして、鍛えるのかということだ。それにガッツである。障害ばかり飛んでいても、なかなか身につかないと思う。部班運動は、優れた指導者が一人いれば、多くの人を同時に指導できるし、みなが同じ課題意識をもつ機会にもなる。「基本馬術」は、障害飛越に必要な馬体の柔軟性や筋肉を鍛えることの基本であると思う。馬が飛ぶことがわかったら、まず基本馬術に戻ってこれをじっくりやって体ができてから障害の程度を上げるのが結局近道だと思う。

3) 部長、監督（コーチ）、現役、OBの権限と責任を明確に

馬の出し入れ、練習方法の決定などは、長いスパンで考える立場の監督が行い、現役はその年1年の部活動に集中するのがいいと思う。

最後になってしまったが、提言・批判・激励を通じて支援していただいた私と年代の近

いOB諸兄、新馬の調教や現役部員との仲介役を通じて支援してくれた現役と年齢の近いOB諸君、ありがとうございました。また、指数の関係で名前は省かせていただきますが、さまざまな形で（大会応援、写真撮影、物品寄付、宿舎提供、飲み代負担などなど）支援していただいたOB（他大学を含む）諸兄、即戦力馬や新馬をいただいたJRA関係者、乗馬クラブ、牧場・道馬連関係者、個人OBのみなさんに、厚くお礼申し上げます。

最後の最後に、さきに引用した10年前のメモの最終部分を記して終わります（結局10年間同じことを言ってきたような気がします）。“....この観点から、努力をしなければとは思っております。そのため、現役の諸君には「君達だけで勝手に部の運営をやっているなどと思うな」と小言をいうこともありましょうし、OB諸兄に向かつては「まあ、かつて我々がやったように、現役が考えた結果やっていることだから」と理解を求めることもありましょう。そのようなときは、私の真意はそこ（注：メモ前半部参照）にあるとご理解いただき、ご支援をお願いするしだいです。北大馬術部の歴史と伝統を考えると、莫大な財産が蓄積されているわけですし、これを活用しない手はないと思います。皆さんの財産をタンス預金などしておかないで、現役なり部長なりに出していただいて、活用させていただきたいと思います。”

まれに見る名部長と感服していた市川瑞彦馬術部長も、いよいよ本年度限りで御定年退職とうかがいました。表面に現れないいろいろな気苦労があった事とお察し致します。本当に御苦労様でした。早速、馬術部後援会の仕事をお願い致そうと思っているのですが、さらに、これからも学生馬術や北海道乗馬連盟のために御活躍を續けて頂けると期待申し上げます。

さて。2年前から計画をしていたのですが、北海道大学馬術部75年史(誌)の投稿期限が6ヵ月後に迫ってまいりました。良いものを作るとすれば大事業で、現役部員、OB・OGの御協力が会って初めて達成されるものと存じます。馬術部30年史や創立40年記念写真集を讀んでみますと、75年史を編集するのは大変なことで痛感致します。簡単に考えていたことと反省しておりますが、部員はじめ皆様方の御協力で何とか完成させたいと存じております。私にとりまして、75年史の発行は、永年いろいろな形で御世話になり、私の人生を有意義なものにしてくれた馬術部に対する最後の御奉公と心得ておりますので、資金も含め全力をあげて発行にこぎつけたいと思っております。

現在は、大場義明氏の言行があるだけと聞いております。私はOB・OGの方々にお会いするたびに執筆をお願いしておりますが、これからも重ねて依頼致すつもりです。馬術部にも、30年史以降の成績一覧表の作成をお願いしました。部報からの転載といってもまとめるとなれば、結構手間がかかるでしょう。

75年史の内容は、単なる憶い出の記にとどまらず、調教、競技、部運営などについて参考になる内容が含まれると思いますが、堅い事を言わず気軽に書いて頂いても結構です。御協力のほど、心からお願い申し上げます。

間もなく、新しい馬術部長が発表されると存じますが、新部長のもとで北大馬術部がさらに発展されることを祈っております。

市川先生の後を受けて

井上 京

この4月より、市川先生より馬術部の部長を引き継ぎました昭和57年3月卒部の井上です。現在、農学研究科に勤めております。卒部後いつとき札幌を離れ、昭和60年に戻りましたが、馬場に最も近いところにいるOBの一人でありながら、さっぱり顔も出さず、市川先生のお手伝いもせずに過ごしておりました。その間、後援会活動を停滞させるなど、むしろ足を引っ張るようなこともあり申し訳なく思っていたところです。が、昨年秋に市川先生より次期部長の覚悟を決めるよう申し渡され、お引き受けすることとなりました。

本当に私のようなものが馬術部の活動に関わってよいものなのか、いまだ逡巡するところなきにしろあらずですが、引き受けた以上、それなりの責任を全うしなければいけないと感じています。

とはいえ、馬から離れてすでに20年、とても馬術面での指導ができるとは思えません。むしろ私の役回りは他のところにあるものと思っております。

自分自身、馬術部での生活はかけがえのないものであり、そこでいろいろなことを見聞きし、教えられ、育てられました。単に「馬に乗る」ということだけでなく、馬を養い、育て、部を運営するという中で、どれだけ成長させてもらったことか、ということはいまもつくづく感じています。

同じ体験を、毎年入部してくる人たちも積んでいるわけであり、そこにクラブ活動としての馬術部の存在意義の一つもあるのだと信じています。そこで私の役回りといえ、ほんの少し年を取ったものとして、的確な示唆を与えられる指導者とはとてもいきませんが、せめてよき相談相手程度になれるよう努めたいと思っております。

馬術部を卒部された諸姉諸兄には、現役部員への一層のご支援とご指導、また私自身へのご指導をお願いし、紙面をお借りして部長就任のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

平成7年度主将 鍋木照夫

大変ご無沙汰しております。鍋木と申します。

現在、日本ハムのタイ工場に駐在して、商品開発・品質管理をしております。

もうすぐ4年となり、日本（特に札幌）が恋しいです。

市川先生は、私が現役のときから面倒をみて下さっており、少し辛口のコメントを頂いたことが印象に残っております。また、たまに誉めて頂いたとき、もっと頑張ろうという気持ちになりました。

私達の代は、良い成績を残せなかったほろ苦い思いがありますが、それ以降に華々しい活躍ができたことは、市川先生のご尽力によるところも大きかったのではないのでしょうか？

いつか、お会いする機会があれば、市川先生の目からみた馬術部の話しをお聞きしたく思っております。

本当にお疲れ様でした。

市川部長退任に寄せて

平成8年度主将 中村晃史

10年間にわたって部長のお仕事、本当にご苦勞様でした。

良きにつけ悪しきにつけ、自主性と称して、勝手気ままに現役時代を過ごしたことをここに深くお詫び申し上げます。ご迷惑をおかけしました。また今更になりますが、現役のわがままに正面から向き合い、理解し、サポートして下さった姿勢に、今の自分に照らして感服いたします。ほんとうにありがとうございました。

引退にはまだまだ早い気がしますが、今後とも変わらず、軽いフットワークで、馬術部の応援だけといわず活躍されることを願っております。

この度は本当にご苦勞様でした。

先生のご退官を聞き、改めて時の過ぎる早さを実感しています。

私は、先生が馬術部の部長に就任された平成 6 年度に入部し、平成 9 年度に卒部しました。その間、先生は、私達現役部員が部活動をやりやすいようにとの視点から様々な助力をしてくださいました。

例えば、当時は馬の頭数が少なかったために馬の入手ルートを確立しようと、方々の O B や馬関係者に声を掛けてくださり、その結果、優秀な競技馬をいただきましたし、毎年新馬を入厩させることも可能になりました。

最近では、部員に対して馬の数が多すぎるという意見も聞こえてくるようになったのですが、これも先生のご尽力の賜物だと思います。馬の適正な頭数がどの程度かは、部の状況により変わるのでなんとも判断が付きませんが、少なくともたくさんの馬の中からより良い馬を選りすぐっていけるという現在の状況は、極めて恵まれていると思います。

また先生は、種々の競技会にも必ず応援に来てくださり、私達に核心を突いたアドバイスをしてくださいましたし、北日では、現役部員や学生 O B 達と一緒に試合会場で寝泊りをされ、現役部員や学生 O B ともども一丸となって応援をしてくださいました。

更に一方で先生は、学生だけでは乗り切れない学校側の事務局との交渉事等も円滑に進めてくださいました。

例えば、平成 8 年当時の部室の暖房は石炭ストーブでしたが、部室で飲み会をしていた泊りの者が、石炭を目一杯くべてこのストーブを加熱しすぎてしまい、床の一部が少し炭化したことがありました。そして、夕当時にそれを知った別の部員が、慌てて消防車を呼び、4 台もの消防車が駆けつけてきました。結局、火の気はどこにも無く、消防士は「鎮火と決定しました」と書いた紙切れ一枚置いて気が抜けたように帰っていきましたが、このとき、学生部の事務官も何事かと血相を変えて駆けつけてきました。私達現役は、このことに関して学生部からたいしてお咎めを受けなかったように記憶していますが、実は先生が肩代わりをしてくださっていたのではとひそかに案じていました。蛇足ですが、この厩舎ほや事件のおかげで、その後部室の暖房は、石炭ストーブから石油ストーブへと進化しました。

また高速道路で馬運車事故が起こった際にも、先生は、学生部が私達部員の活動を制限してしまうことのないように、また獣医学部に馬の治療をしていただけるように尽力くださいました。

今から振り返っても本当に先生のお手を煩わすことの多い私達でしたが、先生は、ご自身が部長として為すべきことの中で、現役が主体として行うべきことを手助けすることと、部長としてご自身が主体となって行動するべきことをはっきり区別されていたように思います。

現役が主体として行うべき練習の方針ややり方に関しては、決してOBとしての主張や部長としての主張を押し付けることなく、私達部員が自主的に考えて行動できるようにという視点に立って、アドバイスや助力をしていただきましたし、私達部員の力の及ばない範囲、例えば前述した馬の入手経路の確立や石炭ストーブ事件や馬場の移転問題等における学生部との交渉事については、先生が主体として行動され、馬術部にとって必要な事柄を、現役部員から直接見えないところで確実に補って頂いていたように思います。

おかげで私達は、学生部やその他厄介な交渉ごとに悩まされることなく、自分達の練習や試合に全力を注ぐことが可能な馬術部生活を送らせていただくことができたと本当に感謝しています。

そして、このような先生の部長としてのご尽力が、先生の部長時代10年のなかで4年も全日団体出場ができたという結果につながったと思います。

市川先生、本当にありがとうございました。また全日等でお目にかかれる日を楽しみにしております。

(2003・12・31)

市川部長退官に際してのメッセージ

平成10年度主将 角堂 葵

今まで長い間、北海道大学馬術部の代表として私達平成11年卒部生含め、多くの馬術部員を支えて頂き誠に有難うございました。市川先生の類稀なるご指導とご鞭撻のお陰で、昨今の時代の変化にも関らず、北大馬術部が競技志向をもった力強い体育会系部活動として存続し、部員一同今まで頑張ってきたのではないのでしょうか。

思い起こせば、私が卒部する前後の年、平成10年から平成11年にかけて、北大馬術部移転問題が発生致しました。北18条に在った旧馬場から現在の北24条新馬場への移転完了まで、先生に多大なる労力を割いて頂いたのはつい最近のような気が致します（私がその直後に北海道を出てしまったからでしょうか・・・）。お陰さまで、現役馬術部員が日常の活動に打ち込める為の土壌として現在の素晴らしい環境が生まれたと言っても過言ではありません。

北大馬術部及び数多くの部員への甚大なるご支援とご指導に対し、心からの感謝を申し上げます。本当に長い間お疲れ様でした。先生の今後ますますのご隆盛とご健康を陰ながら祈っております。

市川先生、お疲れ様でした。

平成 11 年度主将 川崎洋史

退官おめでとうございます。私たちが 4 年生の時に北大馬術部にとって 2 度目になる移転がありました。その際、市川先生が何年も前から準備され、学生部および工事関係者との交渉など毎日のように忙しくされていたことを覚えています。どこの大学にも負けないすばらしい馬場、厩舎も市川先生のおかげだと思います。また、毎週末のように朝の練習および各大会に顔を出していただき、いろいろ指導していただきました。私たちは市川先生のおかげで楽しい馬術部生活を送ることができました。本当にありがとうございました。

今後、馬術部はいろいろな問題と直面していかなければならない時期に差し掛かるかと思いますが、退官されてからも、今までと変わらない馬術部 OB としての活躍を期待しています。これからも体に気をつけて、がんばってください。10 年にわたりお疲れ様でした。

平成 12 年度主将 森田 崇之

10 年にもわたり北大馬術部の部長として我々馬術部員を支えていただき本当にありがとうございました。私が主将を務めた年は、北大馬場が 24 条通りに移転して 2 年目ということで、様々な問題点が浮き彫りになった年でありました。特に大きな問題となったのは、馬場の表面が強風の影響で起伏し始めたことだったように思われます。廻りをモデルバーンや獣医学部の施設で囲まれた 18 条の旧馬場とは違い、24 条の新馬場は廻りが農場一体の環境となりました。よって馬場は常に風邪の吹きさらし状態、強風が吹いた日には砂が飛び荒れ、馬場の状態も徐々に凹凸が目立つようになりました。この問題を解決するにあたり、工事関係者との交渉、そして新しい砂が入るまでの様々な折衝など市川先生には本当に多大なるご尽力いただいたこと、今も忘れません。本当にありがとうございました。

最後になりますが、いろいろとご迷惑をおかけした我々 H12 年卒の代表として、市川先生の類なきご指導・ご鞭撻に対し、深謝申し上げます。よく市川先生は「OB は現役馬術部員に対し、口出しは控え、お金・差し入れは惜しみなく出すのが理想」とおっしゃっていましたが、市川先生におかれましては、今後とも、なにかと未熟な部員達へのアドバイスを“惜しみなく”して頂きたく存じます。10 年にわたり本当にお疲れ様でした。

私達は98年から01年の間市川部長のお世話になりました。私達の代は18条の旧馬場、旧部室で活動したことのある最後の世代でもあります。入部当初10数人いたドンバも、最上級生となった時には、山本の2人となってしまっていました。先に水産に行った小野、川辺も先生にとっても良くして頂いていました。私達の最上級生の時は、上級生、乗り役の層が薄く、高齢馬が目立つチーム編成であり、その点が市川先生を悩ませていたのではないかと思います。本当に多くの面で助けて頂いており、挙げれば数え切れません。私が現役の時の「市川先生のメモリー」、特に今でも印象に残っているコトを3つお話ししたいと思います。

一つ目、「タカ派の市川先生」

市川先生はけっこう過激なところもあるんだなと思った出来事です。24条の馬場に移転してきた時に「不法建築物」「植林問題」で大学側と揉めたことがあります。馬術部の敷地の北端に障害置場を作ったのですが、大学側から許可を得ずに作った不法建築物？であり、撤去するように言われたコトがありました。また馬場の周りにOBの協力を得て牧草の種を植えていた広いスペースがあり、野外練習や曳馬の場所（18条時代のモデルバーンの代わり）として利用していました。しかし大学が構内緑化の構想（構内を緑で囲む）を打ち上げ、馬場の周りに植樹し林にすると言い始めたのです。林にされたら曳馬の場所が無くなり、野外練習も出来なくなるので大変困ったことになります。

その時、市川先生の判断は「18条から24条に移ってきたのは我々の意思ではない。障害置場も旧馬場にあり現馬場でも必要だ。撤去する必要はなし。障害置場は夕方・休日に部員が手作業で作ったもの。それでも撤去したいというなら大学自身にやらせなさい。部員でやる必要はない。たとえ撤去されてもまた作ればいいさ。」

植林問題に関しては「移転補償として18条と同等の環境を提供する義務大学にはあるはずだ。馬場周りのスペースは曳馬で利用しており、馬の健康管理上必須である。林にはさせない。強行に植樹をするなら入り口にバリケードでも築きなさい。業者を入れる必要はない。」ととても強いことを仰っていました。その後、人馬の出入りが十分可能な植樹間隔とすることで妥協し、植樹された後には「曳馬、野外の練習に自由に使いなさい。大学には曳馬、放牧地として利用すると言っている。馬だから苗を食べてしまうこともあるだろう。林にならないかもね。」

結局、障害置場は撤去されず、バリケードを築くこともなかったが、ウチの部長は流石に力強いなど強く印象に残っています。その後の曳き馬では“ドリームグリーン”が苗を良くかじっていました。今年の春まだ苗木が成長していなかったらドリームのせいだと思います。

二つ目、「先を見据えた市川先生」

先ほどお話しした馬場環境も市川先生が次世代の事も考えて先を見据えた判断だったと思います。市川先生は馬術部の4年後、10年後の事も良く考えていました。

特に次世代の馬術部を背負う、新馬の調教に注目していました。午前8時過ぎ、通常の練習の終了後、OB先輩方が新馬の調教を行っていたそれを真剣に見ている姿が印象に残っています。また良い新馬を獲得することにも努力していました。新馬を獲得するために高いアンテナを張っており、競技会の場でもそのような話がないか気にされていました。実際に新馬を牧場に見に行っていることも何回もあり、見てきた馬の話を非常に真剣してもらいました。

学生馬術の期間はたった4年間であり、北大の学生はほとんどが素人から始めています。その中で強くなり、関東の学生と同等以上に戦う為には騎乗する馬も重要なポイントになってきます。安定した馬配を維持する新馬のサイクルが必要であり、そのために努力されていたのだと思います。

三つ目、「OBとしての市川先生、部長としての市川先生」

何年か前の部報にも現役部員とOBの繋がりについて書かれていました。OBであり部長である市川先生は微妙な立場であると思います。

どの社会でも、どの世代でも、「最近の若いもんは…」の様なシーンはあります。北大馬術部の全盛期のOBの方から見ると現役は頼りなく不甲斐ない様に映ると思います。だから弱いんだよとの指摘があります。しかし部活を実で行なっている現役は決して手抜きをしているわけではなく、必至になって練習・調教・馬の世話、はたまた馬の養育費を稼ぐバイトをしています。勉強はどうか判りませんが、部員は強くなる為に様々な努力をしています。

市川先生はOBであり部長でもありOBとしての現役に対する意見、注意も判る立場にいます。しかも全日本での北大全盛期の主将でもあるからなお一層かもしれません。しかし、部長として現役の意見、実情もわかっています。理想と現状とは言わないが実情にはギャップがあるのは確かです。つきつめれば現役もOBも馬術部を良くしたい、強くしたいとの思いが根底にあり、その両者の立場にいた市川先生の思い・苦労は並大抵のことではなかったのではないかと思います。そのような意味では、市川先生退官の最後の年、現役が全日でも団で良い結果を残したのは嬉しいことでした。

馬術部の部長という立場は色々な意味で他の体育会の部長です。大学の教官であり研究という大切な仕事を持ちながら、私達のために尽力して頂きました。私達4年間の馬術部生活が、とても貴重な経験、勉強、そして楽しい思い出になっているのも市川部長のお陰です。ありがとうございました。

平成14年度主将 山口剛司

お忙しい中時間を割いてわざわざ練習に来てアドバイスなどをしていただきどうもありがとうございました。いろいろとご迷惑をおかけして申し訳ございません。今までどうもお疲れ様でした。

平成15年度主将 寺島良

部長として最後の年に主将となってなんとか全日二走・総合団体出場を果たして最後にいい思いで終わってもらいたかったのですが、それができなくて非常に残念でした。しかし、市川先生には感謝の気持ちでいっぱいです。毎週のように馬場へ足を運んでもらい、部員にアドバイスをして、大会の時も1人1人の姿をしっかりチェックしてメモをし、後からあれはよかった、こういうのはだめだったとか、これからはこうした練習もしていったほうがよいと、事細かに教えてもらえました。部の向上のために本当に一生懸命やってもらえたと思います。本当にありがとうございました、そして長い間本当におつかれさまでした。

馬にヒトに!
doriola.co.jp

株式会社 ドリオラ
東京・新宿



🐎北凌(ハギノレジェンド)🐎



騾 サラ 鹿毛
昭和62年4月10日生
北海道浦河郡浦河町産
父 ハギノカムイオー
母 ハギノコトブキ
競走名 ハギノレジェンド
平成4年6月12日入厩

調教報告

武井 亮

はじめに

これまでの調教報告の多くは一年間行ってきたの調教のエッセンスを書くというスタイルのものがほとんどだと思う。確かにこのような調教報告は内容も濃くなり、参考になるところがたくさんある。しかし、いざこれからこの馬と一年間やって行くぞと思ったときにその流れを掴めず不安感に駆られるということもあると思う。そこで、あえて僕はこれまでの調教報告とは違うスタイルで書いていこうと思う。つまり、一年間行ってきたことを時間軸にそって行ってきたこと、その時僕が感じたこと、今になって思うことなどをそのまま書こうと思う。そのため、長い文章で内容が薄く退屈なものになってしまうかもしれないが、これからの現役の、特に初めて馬を任されて調教しようとする人にはぜひ読んでもらいたい。自分と大してレベルの変わらない人間がどのように一年間を過ごしてきたかを知って参考にしてもらいたい。

まずはスタートを切る前に

僕は代替わり後の9月から北凌号の調教を担当することになった。北凌号はすでに北大在籍が最も長い馬となっはいたが、全日学出場は僅か2回という成績しか残せていないし、その全日学では完走したことがないという馬だ。特にここ3、4年はエースとしての活躍を期待されながらもいまいまいましい成績しか出せていなかった。これは、この馬の騎乗者がシーズン中に代わるということが多かったため、通年で馬を育てるための調教がなされてきたわけではなく、問題点が改善されないまま、その場その場でそれを騎乗者の力量で押さえつけよう乗ってきたためだと思う。特に大きな問題点は、1)経路中に徐々に

速くなりコントロールを失って逃避、またフラットな飛越による落下を繰り返すこと、2) 環境や状況の変化に大変敏感でそれによって馬が“切れて”しまいとんでもないことをやってしまうことがあるという二点だった。じっさい、北凌の北日学での失敗はほとんどがこれに当てはまると思う。その他にも問題はあったが、この一年間はこの点の特に 1) の方を改善していくことを目標とした調教をしていくことにした。2) の方は外乗に頻繁に行くことでの外の世界への慣れと僕との信頼関係を高めることによって改善してくれることを願うことにした。また、僕は技術的に足りないところがおおいにあったので前任者の堀内兄に1年間調教と一緒にやってもらうことをお願いした。

乗り換わりから雪が積もるまで

この時期は主に常足飛越と駈足飛越を中心に運動をしていた。

常足飛越は北凌が障害に対し少しでも落ち着いて近くから踏み切り、また前ではなく上に飛ぶようにと期待したものだった。これは、はじめに書いたように北凌は、どうしても障害に対し遠くから踏み切り、フラットな飛越をしてしまうことが多いのでその悪い癖を矯正することを期待したものだった。実際、北凌は近くから踏み切るようになっていくのだが、この調教が良い影響を与えた結果だと思う。常足飛越をする際に僕が気をつけた点がいくつかある。それは、たてがみを持つこと、むやみに高さをあげないことだ。この常足飛越の調教の意味を考えれば、馬の邪魔をしないためにたてがみを持つのは当たり前だし、高さを求める必要はない。しかし、当初の僕はついでに拳をゆずる練習もやろうと考え、たてがみを持たなかった。このため、北凌の口を引っ張り飛越後に走られることがあった。もしこのまま続けていけば、逆に障害に対し悪いイメージばかりを植えつけることになっただろう。そして高さに関しては、馬の筋力アップにつながると思い110cmまであげていた。しかし人の実力的に90cmくらいまでしかついていけず、ここでも馬の邪魔をしていた。やはり、馬の邪魔をしては意味がないと思い高さは自分がついていける高さまでにした。責任者になって運動しているときに大切なことは、今行っている運動は馬の調教のためなのか、人の練習のためなのか(もちろんそんなにはっきり分かれるわけではないが)どちらに重きをおいているのかをよく意識することだと思う。馬の調教のためなら馬のことだけを考える、人の練習のためなら馬にも多少我慢して貰わなくてはならないだろう。(ただし、その際にも馬にとって一番良い方法を考えるのは当たり前である。)二兎を追うものは一兎を得ずという諺があるが、つまり目的意識が散漫ならばたいした成果は期待できない。またこの調教は、北凌だけでなく僕にとっても思わぬ良い結果をもたらした。それは、鐙に乗るということを強烈に意識できたことである。常足飛越は鐙にしっかり支持していないとついていくのが難しいし、飛越時に飛び込むとおおられてしまう。常に馬との重心を変えないで飛越についていく良い練習になった。

駈足飛越は、ひとつの障害を八の字で飛んでいくというものでこれは僕の練習に重きを置いたものであった。障害に向かう廻転の前半でベースとリズムをつくり、廻転の後半で

はまえを怪くして推進すること、アブローチに入ったら静かに待つこと、飛越時は大きな随伴を取らず鑑にのっていること。以上のことを心がけ何度も練習した。全て当たり前のことで、下級生のうちにマスターできることかもしれないが、僕にはこの練習が必要だった。とくに障害前で静かに待つということがうまくつかめず、うまくいえないが静かに待ちながらプレッシャーを与えていることができなかった。静かに待っているときは何のプレッシャーも与えていない、またはプレッシャーを与えているときは追っているというような感じになってしまっていた。とにかく追って遠くから踏み切らせては今行っている調教の意味がないと思ったので、拒止されても良いという心持ちで静かに乗り、練習を続けた。このため何度も拒止されたが、拒止される毎になんとか感覚がつかめてきた。この秋で完全にその感覚をものにすることは出来なかったが、来年に向けては手ごたえのようなものを感じることが出来た。そして、翌年には自然とできるようになっていった。また、この練習で北凌の踏み切りが安定してきて迷っても遠くから飛ばなくなっているのを感じることが出来たため、これからの方向性に自信をもつことができた。このような練習をするのであれば前任者などに準備運動をしてもらって馬が良い状態で人の練習をすることが大切だと思う。馬が悪い状態で人の練習をしても人は練習に集中できずうまくならないし、馬もますます悪くなるだけである。また、失敗した時にも準備運動に問題があるのか、その練習内に問題があるのかもあやふやになり、その後に活かし難い。僕も準備運動は堀内兄にお願いしていた。

この時期には、二つの大会があった。秋季自馬体と OB 戦である。秋の目標には OB 戦での LA で逃避なく走行することをすえていた。そのため、秋季自馬体では試合経験をつむためにフレンドリーは LA と LB、試合は失敗しないために LB に出場した。フレンドリーは馬に緊張感がなく本気になっていなかったため、速くなることはなかったが門扉を見て拒止した。しかしこの時、僕はあまりかからなくてよかったかなというくらいにしか思っていなかった。次の日の準備馬場では馬のテンションがあがっていた。この時僕は、馬に遠慮して何とかなだめようとしていたが、同輩の木村に「馬に遠慮しすぎて、馬がぜんぜん本気になっていない」といわれ、確かに乗り換わってから、馬を落ち着かせて緊張感を与えずに障害を飛ぶ練習しかしていなかったため、馬のテンションがあがったときに馬を本気にしたなかで折り合いをつけていくことも練習していかなければならないと痛烈に感じた。しかし、その場ではどうすることもできず、そのまま試合に臨み、本番は逃避、拒止こそなかったものの散々な内容だった。この大会での収穫は馬に緊張感を与えた中で手の内に入れる練習、つまり実戦に近い形の練習も必要だと身を持って知ったことだった。とは言うものの、まずは落ち着いて障害を飛ばせることのほうが重要だと考えたので、この秋は上に書いた練習をつづけ、OB 戦はとにかくいいペースで帰ってくることを心掛けた。結果は一落一逃避だったと思う。この逃避は 4 歩のところを 3 歩でトリプルに向かいトリプル後の最終障害のオクサーを逃避したものだ。つまりはじめに書いた北凌の悪いところが出たものだったが、なんとか最後まで我慢してくれたことからある程度の手ごた

えで冬を迎えることになった。

またこの期間には畜大に野外の馴致にも行った。これは、野外経験のない僕がすこしでも野外に慣れるためのものだった。畜大の野外のコースは一本道で逃げ場がほとんどないため、野外初心者でも安心して練習ができると思う。北凌は、畜大のような一本道のコースは得意にしていたため、僕もこの馴致で一通りコースを廻ってくることができ、経験と自信をつけることができた。総合に出場する人馬はなるべく早く、なるべく多く野外の馴致に出かけ、経験をつむ必要があると思う。近場では畜大しかないが、行く度になにか学ぶものがあるはずである。

またこの時期から外乗には週に2回くらいのペースで出かけていた。これは、たとえ試合が近くても北大にいたときには続けていった。なるべく、いろいろなところに行くようにして、環境が変わっても常に僕と一緒にいることにより、少しでも僕のことを信頼してくれるよう期待したからだった。このことによる効果かどうかは断言できないが、北凌は環境がかわっても落ち着いて過ごせるようになっていったと思う。

雪が積もってから雪解けまで

この時期は馬のけがや僕のけがでほとんど運動できなかった（トータルで10週間くらいやすんだ）。北凌は年齢のわりにすぐにいらいらして、我を忘れて暴れて踏みかけなどをしてしまうので、普段からストレスがたまらないように引き運動や馬場で寝かせたりしていたが、なかなか効果はなかったと思う。引き運動中や馬房内でもわんこをつけるなどの対策が必要かもしれない。

僕がやった運動といえば放棄手綱での速足だった。この運動では脚で馬にリズムを伝えることを重点的にやっていた。毎週1回は障害をやりたかったが、休みが多く結局冬の間は、合計3,4回しかやってないと思う。

下級生には主に調馬策での運動を課した。これは、北凌は足場が悪いとどんどん早くなって下級生が安心して練習できないこと、また部班だとなかなか止まらないため口を引っ張ることになるため馬に対する悪影響が大きいと思ったためだ。実際、冬合宿の部班で北凌は口を切って、その後2週間休むことになったこともある。北凌は非常に歩様のいい馬なので、手綱をもたなくても下級生には十分練習になったと思う。

当然のことだが、上級生は下級生に十分意味のある練習をさせなくてはならない。人によっては、どう見てもやっつけ仕事にしかみえない練習をさせる人もいるが、上級生はしっかり勉強して下級生を指導するようにしなくてはならない。僕は北凌の歩様のよさがあれば調馬策だけでも充分な練習をさせられると判断したからそれだけをやらしていたのです(また調馬策かと思っていた下級生へ)。

そしてここで触れなくてはならないのは、僕のけがについてである。これは北凌を放牧に出す際に僕が頭を蹴られ一時意識を失い1週間入院したというものだ。原因は僕の慢心にあった。このころには、もう北凌にもなれ、北凌は僕に歯向かうことはないと思っ

ていた。このため、通常北大馬術部で決められている放牧の出し方ではなく、近くの乗馬クラブで行われていた放牧の出し方をしてしまった。もし決められた出し方をしていればこんな事故は起こらなかった。もしもっと大きな事故になっていれば僕は活動できなくなっていただろうし、市川先生にも多大な迷惑をかけてしまっただろう。これからの現役には、こんなバカな先輩がいたことを反面教師にして安全にはよくよく気をつけて欲しい。今ある北大馬術部の決まりごとの中で活動していれば、そう事故は起こらないと思う。ただ僕のように慢心からルールをやぶったり、ボケーとして馬を扱っていたりすると本当に危ない。部員全員が意識を高め事故のない部活にしてもらいたい。

雪解けから半澤杯まで

雪解け後は秋の状態はなんだったのかと思うほど、全てを忘れているようであった。コンビネーションでは障害に突っ込んでいくので、コンビネーションは練習にならなかった。そこで、試合まで時間はなかったが、もう一度秋にやっていた駈足飛越をやることにした。この練習は馬が覚えていたのか障害につくこともなく良い踏み切りで飛越していた。そのため、この練習を繰り返していくことにした。もちろん秋よりは自分に余裕が出来たので、秋に意識していたことに加え飛越後すぐにバランスを立て直し、リズムを作ることを意識するようにしていた。春になってもこんな練習をしていたので、市川先生や中田兄からはもっと実戦的な練習をしたほうが良いと何度も言われたが、この練習でもまだ出来ることはあると思っていたので、半澤杯まではこの練習を続けることにした。

半澤杯は障害の LA だけにエントリーした。馬場の練習を全くしていなかったため、どうせうまくいくはずがないと思いツースターにはエントリーしなかった。半澤杯だけなら障害に集中できたためこの選択は良かったと思うが、後々のことを考えるとこのとき僕の経験のためにツースターに出場したほうがよかったかもしれない。次の大会で分かることだが、試合に出ないと自分がどこまで出来ないかを知ることは難しいし、こういうことは早くに知るのにこしたことはない。

試合の内容は僕としてはこの時点で満足のいけるものであった。これまでの練習から経路中に流れを切っても、良いリズムで一つ一つの障害を丁寧に行くことを心掛けた。じっさいには、二回ほど速足をいれ、坪をつかって経路の流れを切って走行することになった。この走行を見た OB には全体の流れがないから意味がないという人もいたが、北凌のここ数年の半澤杯の成績を考えると良いものだし、僕としては経路走行の最低ラインを作ることが出来たと思い、満足のいける内容になった。次の目標は経路走行の流れの中で経路を廻ってくることになった。そのために練習に実戦に近い形を取り入れていく必要があった。

半澤杯から新緑馬術大会まで

この期間は例年に比べ時間があったために、ゆとりを持って練習に取り組めた。この時

期からより実戦に近い形の練習を取り入れていった。具体的にはひとつの障害を駆足で飛んでいくのではなく、4完歩もしくは5完歩のダブルや7完歩もしくは8完歩の鈍角回転の練習を週2回のペースでやることにした。しかし、この練習はなかなかうまくいかなかった。このような練習の場合、はじめの障害後の数歩で馬を戻し、次の障害2、3歩前ではまえを楽にする必要があると思うが、障害を飛んだ後に僕のバランスの戻しが遅れてしまうため、馬を戻すのも遅れてしまい、しかも手だけで馬を戻そうとするので、結局持ったまま頭を挙げて次の障害に向かってしまうという失敗を繰り返した。このような状態で飛越をすると馬は体を使えず落下を繰り返すことになるし、窮屈な飛越になるため障害に対して嫌なイメージを持ちかねない。そのため、週1回はコンビネーションで1完歩の中でも人がバランスを戻せるようにと練習をした。またこのコンビネーションは北凌にとって完歩をすこし狭く設定して馬自身にもバランスバックの癖がつくことを期待した。はじめのうちこそ、北凌はかなり窮屈そうに飛越していたが、僕がバランスを戻せるようになるとともに北凌もバランスを戻して飛越するようになってきた。あいかわらず駆足飛越のほうはうまくいかなかったので、駆足飛越の練習で崩れた北凌の飛越をコンビネーションで直すという意味合いもあってこのコンビネーションの練習はとても意味があったと思う。どの時期であっても週1回くらいは馬が自信を持って障害を飛越できる練習を入れたほうが良いと思う。

新緑馬術大会ではフレンドリー、LA、ツースターに出場した。フレンドリーでは久しぶりの大会の雰囲気にな凌はまいあがってしまっていた。準備運動で何とか手の内に入れようとするあまりまえを持ちっぱなしになってしまい常に背中を張った状態での運動になってしまっていた。そのため、フレンドリーでは逃避こそなかったものの走ってしまい巻き乗りをいれることになった。次の日のLAでは準備運動を堀内兄にお願いした。昨日のような状態で試合に出場しても準備運動がうまく出来ていないという課題以外に試合で得るものは少ないと考えたからだ。堀内兄のあとに騎乗すると昨日とはうって変わってまとまったよい状態であった。堀内兄には前を持つこととゆるすこととはっきりメリハリをつけなくてはだめだとアドバイスを受けた。試合では満点でJOも満点だった。僕は試合が終わった直後は、大きな課題はないなと思っていたのだが、ビデオで見るとペースが遅く馬も動いていなかった。これは、これからずっとついてくる問題なのだが、どうしても馬に遠慮して積極的に騎乗できないということであった。とにかくこのときはもっと積極的に乗ろうと思ったがたいした対策は考えなかった。3日目はツースターに出場した。この日も堀内兄に準備運動をしてもらいかなりの良い手ごたえで試合に向かったが、いったん馬場坪内に入ると北凌はテンションがあがってしまいそれを抑えようと拳をがちがちに固め馬とけんかして、反抗を繰り返されるという散々な結果となった。やはり柔らかな拳が必要でそのためには安定した騎座だと思い今後の練習に調馬策を取り入れることにした。

新緑馬術大会から春季自馬体まで

今年はこの間が 2 週間しかなく、また畜大に野外の馴致にいったので調教や練習はほとんどできなかった。

野外の馴致では昨年は無反抗であったが、ことしは何度か反抗された。これは、昨年の感じから、これは大丈夫だろうという障害でやられたものだった。北大の人馬にとって野外で大丈夫だというのはひとつもない。人は常に集中して馬をコントロールしておくことが必要だ。たとえ馴致したことがある障害でも野外の経験が年 2,3 回の経験しかない人馬にとって気を抜くところなどひとつもないのだ。このとき、このことをもって強烈に意識していれば北日本での失敗も防げたはずだった。

春季自馬体ではフレンドリー、LA、ツースターに出場した。今回の準備運動は前回アドバイスされたメリハリに気をつけて準備運動をおこなった。結果、ある程度まとまった運動が出来たと思う。フレンドリーでは馬の状態もよく 120 cm までチョイスしたと思う。この馬にとってアプローチさえ間違わなければ 110 と 120 の差はさほどないと分かったことは収穫だった。次の日の準備馬場では、大変なことが起こった。北凌が拒止を繰り返したのだ。僕は原因が分からなかった。下で見てくれていた堀内兄は馬が動いていないためだと言ったが、僕としては昨日より動いている感じはあったし、言われた後にもっと動かして向かって拒止されたので、とても混乱し、どうしようかと不安におそわれていた。そんな状況を見かねた乗馬クラブメインフィールドの小野さんがアドバイスをしてくれ、しばらく準備運動を見てくださった。小野さんによると、僕は障害前のアプローチのときだけ腰を張るので、馬がアプローチに入ってから押されることになり踏み切りが判からなくなっている、ということだった。そこで常に腰を張ることを意識して騎乗したところ、これまでがウソのように北凌は飛ぶようになった。障害前の意識が強すぎたためその他のところで悪い癖が出たのだろう。しかしこういう微妙な違いはなかなか判らないもので小野さんがアドバイスしてくださって本当に良かった。外部とのつながりはふとしたところで自分達を助けてもらえることになるということを現役には忘れないでもらいたい。試合は雨でぬかるんだ馬場に足を取られて最終障害に向かえなかったため一反抗をとられたが、全体としてはよいものだったと思う。ただ、後半のペースがややはやくなり一番障害と最終障害のペースが違ってしまっていたので、全体のペースを一定にする必要を感じた。3 日目はツースターに出場した。北凌は馬場の雰囲気にも慣れ落ち着いて演技できた。速足からの駆足発進で反対駆足を出してしまったが、落ち着いてさえいれば北凌はある程度は点が取れる演技ができるのでこの大会では 3 位に入賞した。馬場は大きな失敗さえしなければ良いと思っていたので、特に問題にすることはないと感じていた。

春季自馬体から北海道馬術大会まで

この期間の練習は、内容自体は半澤杯以後とほとんど変わっていないが、駆足での練習では常に腰を張ることを意識して練習していた。障害もうまくいくことが多くなっていた

と思う。この時期にはもう新しいことにはあまり手を出さずに今までやってきたことを完璧することを考えたほうが良いと思う。また、この期間には障害をやらない日に、中田兄に調馬策をまわしてもらったりもした。上級生になると調馬策をまわしてもらうことは極端に減ると思うが、定期的に調馬策をまわしてもらうことは、きっとプラスになると思う。僕も時間的にそこまで余裕はないと思っていたのでそんなに何回もまわしてもらったわけではないが、この時に調馬策で確認できたことは、その後の騎乗に大きく役に立った。具体的には、鐙の踏み方とひざの使い方だ。自分の姿勢、バランスだけを気にして乗ることがしばらくなかったので、微妙な癖を修正するのに役立ったと思う。

北海道馬術大会はフレンドリーと LA に出場した。野外の馴致もあったのでツースターはキャンセルした。フレンドリーは良い感じで終わることが出来たと思う。LA にはかなりの自信をもって臨むことが出来た。下見では JO の経路ばかり確認していたくらいである。じっさい、準備運動もうまくいきスタートを切ったのだが、なんでもないと思っていた 4 番障害で逃避されてしまった。毎回下見で半分以上の障害を注意しようとチェックするのだが、その障害はノーマークだった。そのため、ものすごいあせりを覚えた僕は必死で経路を廻ってきた。内容は、まえをがちがちに固めて、がんがん推進していくというもので、一落下だけではあったが、もっと落下が増えてもおかしくないものだった。しかし、今までの丁寧ののって北凌まかせに経路を廻ってくるというのではなく、自分主体で強引にでも帰ってこられたということが自信にもなったし、そして、なによりこんな強引な騎乗でも踏み切りが遠くなることもなく、手の内から外れることもなかったことが一番の収穫になった。これまでやってきたことは生きていけると実感できたからだ。失敗からではあるが、逆にその失敗によって北凌の成長を感じることができた。この 4 番障害での逃避は北凌が飛越体勢に入ろうとしているのにまえをいじったために北凌がいやになったためだった。初歩的な僕のミスであったので北凌の状態は何の問題もないと自信を持って北日本に臨むこととなった。

野外の馴致はじっさいに北日本が行われるノーザンの野外でできることになっていたののでしっかりと落ち着いた状態で拾い飛びをしようと考えていたが、どうしても北凌が落ち着かなかったため、その時は三分の一くらいの障害しかできていなかったがその障害を通してやることにした。このときは、障害に対しては非常に前向きで森への入りや森から出るところなど心配していたポイントもあっさりクリアしてくれた。しかし、ここでうまくいったことが本番でのミスにつながることになる。

北海道馬術大会から北日学まで

この期間は時間が無かったこともあり、コンビネーションを主におこなっていくことにした。直前の時期になったら人も馬も自信を持って気持ちよくできる練習だけをして、いいイメージで本番に向かうのが良いと思う。もちろん総合馬なので野外や馬場もやるくではないのと思うが、僕は野外をチョコチョコ拾い飛びするくらいで、ほとんどコン

ビネーション以外何もしなかった。

いよいよ北日学

北日学は夏場の一番暑い時期に行われることと、長期滞在になり飼い食いに不安が出る可能性があったので、少し太いくらいの状態で入厩させた。実際には、試合で慣れたノーザンでの開催だったことと、ふだんから外乗で環境の変化をあたえていたため、環境の変化によって飼い食いが落ちることも無く、馬体的には良い状態で本番を迎えることができた。

練習では二回走行は出場しないため、ゆとりを持って練習していた。本馬場を使える日に本番の経路で難しそうなところを作って練習することにしていたのだが、このとき、北凌は馬の多さに落ち着きが無く頭を上げてどうしようもない状態で、ランニングマルタンを切ってしまうほどであった。ここまできたら今までやってきたことを信じるしかない。ひとつの障害を丁寧に飛ばし、馬に今までのことを思いださせるつもりで時間をかけて状態を戻していった。まるで去年から今までの練習を順を追ってやっているようだったのを覚えている。一年間同じコンビで練習できる強みだったと思う。きちんと自分がやっている練習の段階を意識して、着実にステップアップを繰り返してくれば、馬の状態が崩れたときも何とかなると思うし、そのために一年間やっていくのだろう。この日の練習で、なんとか難しそうなポイントをクリアしてフレンドリーを向えた。

今年の大会では、今までに見たことも無い障害が何個も使われることが分かったのでフレンドリーでは主にそれらの障害をチョイスして飛ぶことにした。高さに高低の差があったので途中で速足をいれ、走行を2つに分けることにした。準備馬場での調子もよく、フレンドリーの本番に臨んだ。前半部分は非常に良い走行ができたと思う。行く気も充分であったし、しっかりと馬も戻せていた。この時、わざわざ流れをきらずにそのまま後半部分に向かえばよかったとが、僕は予定どおりいったん流れを切ってから後半部分に向かった。しかし、その一番目の障害が、新しい箱もの障害でその障害を見る時間を与えてしまったために、北凌は障害に向かう前に逃避してしまった。僕は、この時に始めて北凌はかなり遠くから物を見るということを知った（北凌は昔からそうだったらしいのだが、僕は知らなかった）。やはり、ここはテンションを維持したまま流れの中で行くべきだったかもしれない。慎重になるあまり馬の行く気をそいでしまったと思う。乗り手は充分な下見でしっかりとした作戦を立てることももちろん重要だが、その場その場で馬の状態を感じて騎乗していくことが何よりも重要である。僕にはその後者が足りなかった。逃避されたあとは落ち着いて対処できたためスムーズな走行ができた。たとえ失敗しても、落ち着いてやり直すことも重要なことだ。こんな時は、周りで見ている人がいると頼りになる。どうすればよいか分からなくなったときは、外野の声を聞いてみるとちゃんと指示を出してくれていることが多い。僕もこの時、OBの中田兄の声が耳に入ってしっかりと向かい直すことができた。フレンドリーが終わった時点で、馬の状態は変わらず良いこと、とはい

っても油断はできず常にプレッシャーは与えておく必要があるということが確認できた。

総合だけに出場する選手は2回走行のときに早く自分も試合をやりたいと、いてもたってもいられない気持ちになるが、この時は気楽に2回走行の人馬を応援しているほうがいいと思う。選手にプレッシャーを与えすぎないように笑顔で送り出してあげよう。

二回走行が終わるといよいよ調教審査である僕は調教審査の練習はほとんどしていなかったもので、大きなミスさえなければいいと思っていた。実際には速足区間はまとめたものの駆足区間で折り合いを欠き20位となった。2面馬場が今期初めてだったことも影響したようであった。半澤杯に出ていれば多少は変わったかもしれない。それでも圏内には4点差と充分逆転可能であったし、予想していた最悪の結果よりも良かったので気にすることなく耐久審査を迎えることができた。

耐久審査は大雨のため調教審査の翌日の午後に延期され、それにともなってオフィシャルウォークも耐久審査前の午前中に延期された。このため下見が忙しくなってしまうじつくりと見るができなかった。通常の日程では下見をする時間はあるので選手はあらゆることを想定してコースを歩いておく必要がある。最低でも4回は廻っておきたい。また、この時、他人と一緒に廻ると自分ひとりでは気が付かない注意点も聞けるので色々な人とコースを廻ると良いと思う。今回のコースは例年の北日学のコースと比べると林への出入りが多く、オープンスペースにも幅の狭い障害がいくつか置いてありコントロールを必要とするコースとなっていた。一反抗は圏内、二反抗でも何とか勝負になると思った。僕は北凌の苦手な林の出入りやオープンスペースの障害が集中して設置されている前半部分に特に気をつけなくてはならないと思っていた。逆に言うときこのときに後半部分に対する意識が弱かった、前半部分をクリアしさえすれば後は何とかかなると思っていたのだ。前にも書いたが北大馬術部の人馬において耐久で気を抜けるところはひとつも無い。これからの人は絶対にこの障害は大丈夫だろうなどと考えて耐久に望まないこと、そんな風に思う経験も技術も無いはずなのだ。本当に、後悔先に立たずである。さて、準備運動では少し元気が良さすぎるくらいだったが、障害にも前向きで、斜め飛びも難なくこなし、良い感じでコースに向かった。本番ではスタートボックスに入るのを多少嫌がったが、時間には余裕があったのであせることは無かった。耐久では何が起こるかかわからないし、馬装も今までとは変わってくるので時間には相当な余裕を見ておいたほうが良い。スタートの合図の後、一番障害を北凌は嫌がるそぶりを見せたが何とか押し込んでクリアー、2番障害と3番障害はアプローチに入る前に障害を物見してコース外に出てしまった。アプローチには入っていないため反抗はとられていないがタイムをかなりロスしてしまった。4番障害は審判の笛に驚きアプローチラインから外れてしまいそのまま向かったが逃避した。ここまでは、慎重に入ろうとしすぎるあまりペースが遅く、また馬のテンションが耐久を廻るのには足りなかったために集中せず、逃避につながってしまったと思う。耐久を廻るには馬場内よりはるかに高いテンションでないと物見なども多くなり、逆に反抗につながってしまうかもしれない。北凌は逃避した後、僕に怒られたことでやっと本気になり集中

力のある良い走行をしはじめた。その後の障害は次々とクリアーして不安のあったオープンスペースの障害もきれいにクリアーした。そして後半部分に向かうときに僕にある考えが浮かんだ。そんなに不安の無い後半部分でタイムを稼ごうという考えだ。後半部分での最初にある障害はこのコース中で一番ボリュームのある障害でだった。しかし、馴致で飛んでいるので大丈夫だろうと思いペースをあげた。これがあだとなり北凌は逃避してしまった。そしてその時立ち木をよけようと横に飛んだため、僕は落馬してしまった。この時点で権利内には到底及ばない差が付いてしまい、その後もう一度騎乗して何とかゴールを切ったが、もはや余力での逆転は絶望的だった。時間がたつにつれ悔しさがこみ上げ、馬を無視して自分のペースを押し付けた自分が情けなかった。精神的にかなりまいったが、一年間やってきた北凌と自分のために、また一所懸命にやってくれていた一年生のためにも良い形で終わろうとモチベーションを作り直し、余力審査をむかえようと決意し直した。

余力審査の朝にはインスペクションがあった。ここで僕達は大きな出来事にあう。権利内につけていた北大の人馬が引っ掛かったのだ。そのときの破行はたいしたものではなく気づかなくても仕方ないくらいのものであったが、インスペクションの前に誰かが気づいてしっかりと動かしてからインスペクションに臨んでいたらパスしたかもしれない。じっさい、全日本のスチュワードをやっている秋田さんも直前に調馬策を廻していればパスしていたかも知れないと言っていた。僕達は、当日の朝も各馬をその担当者が管理していて、みんなでそれぞれの馬をチェックしていなかった。もちろん横目で見て大丈夫だねくらいのことは言っていたが、その程度では見逃すものも多いと思う。インスペクションの日くらいは、全員で各馬の歩様をチェックして、万全をきたすくらいのことをしたほうが良いと思う。

北凌はインスペクションも無事にパスし、余力審査に向かった。前日に耐久を廻っているため、当然いつもよりは重かったのですが、準備運動でかなり前に出して馬に行く気をつけてから本番にむかった。本番は本当に満足のいく今までで最高の内容と結果だった。障害にはしっかりと起きた状態でむかい、飛越後も人がバランスを戻すと馬もバランスバックして次の障害に向かう準備がすぐにできていた。結果減点ゼロで帰ってくることができた。この一年で北凌は乗り手を選ばず、115cm クラスなら無過失、無反抗で帰ってくる馬になった。そう確信できる内容であったと思う。とはいっても、耐久の減点を逆転できるはずもなく僕と北凌の一年間は幕を閉じることになるはずだった。

10月からOB戦まで

様々なことがあり、繰上げで全日学に出場できることになった。この時点で、僕は全日学での目標を完走に定めた。北凌は今まで2度全日学に出場しているが、いずれも耐久審査で失権していた。余力審査については、北日学までで自信を持てる状態になっていたのので、今後は耐久審査に向けた練習をしていくことにした。とはいっても、出場が決まったのが9月の終わりだったので、僕は約1ヶ月乗馬から離れていたし、その間北凌も部班を

中心に運動されていたので、久しぶりにやった障害はまた雪解けの時期に戻ってしまったかのようなひどい状態になっていた。そのため、まずは北凌の状態を北日学の時のレベルに戻すことを考えた。

OB戦までの時間が2週間しかなかったことから、この時点ではOB戦に出場するつもりはなかったのだが、練習をやっていくうちに北凌はすぐに今までやってきたことを思いだしてくれ、障害に対する姿勢や状態は北日学前と遜色ないくらいになった。それに、北日学後からは練習が軽かったので疲れが取れたのか、体の動きもよく、北凌の調子自体はむしろ良くなっている気さえした。そのため、OB戦にも出場することにした。全日学に出場する馬で特に高齢の馬は、北日後に思いきって1ヶ月から2ヶ月くらい楽をさせてあげた方が、良いのかもしれない。

OB戦ではLAに出場した。準備馬場では今までで最高の状態であった。満点で帰ってくる自信を持って試合に臨んだ。結果は2反抗、2落下と僕が出た試合の中で一番悪いものだった。さすがにこれにはショックだった。2反抗は1落下後にリズムが壊れそのリズムを立て直した後に向かった連続障害でやったものだった。市川先生や他のOBからは立て直した後に何もせずにそのまま行かせてしまったためではないかと言われたが、プレッシャーはかけていたし、あんなにあっさり止まる馬ではなかったはずだった。結局、試合間隔が約2ヶ月空いたために連続障害にひるんでいたためでは、という結論に至り、1週間後に同じ経路を練習で試してみても問題がないことを確認した。また、OB戦ではOBの野中さんも北凌に騎乗した。野中さんの騎乗は、がっちりとはみを持ってどんどん推進していくというもので、北凌ははみを強くもたれるのが嫌いで、またそのような騎乗に慣れていないため、体を硬くして決して良い動きをしているとは言えないと僕は思った。つまり、余力審査でこの乗り方をしたら落下が増えるだろうと思ったのだ。しかし、むしろ耐久審査ではこの乗り方の方が馬を完全に押さえつけることができ反抗されづらくなるのではないかと考え、全日学までの間この乗り方も試してみる事にした。

OB戦から全日学まで

この時期には主に耐久の練習を行った。具体的には障害の斜め飛びやジグザグに置いた障害を飛ばせたり、そでのない幅の狭いついたてを飛ばせたりするものである。この練習にははみをしっかり持ち、馬がわがまましないようにすることが必要だと思うが、野中さんの騎乗を見ていたので思い切ってはみを持つことができ、よい練習ができたと思う。この練習では、試合を想定してなるべく馴致をせずにいきなり飛ばせることにした。このため何回かは反抗をしたが反抗された後はすぐに障害に向かいなおして、どんな飛越姿勢だろうと、とにかく僕が行けと言ったら、行かなくてはだめだという関係を作っていた。このとき、たとえ一度反抗されたとしても、もう一度向かえば飛ばせることができることを確認できたことで、耐久に余裕をもって望むことができるようになったと思う。この練習は馬が障害を嫌になってしまうというリスクを伴うが、馬とのコンビに自信がもてるよ

うになったらやってみると良いと思う。たとえ野外のコースがなくとも耐久の練習はできるものだと実感することができた。全日学までは、この練習と馬場の経路廻り、コンビネーションを繰り返して行っていた。

いよいよ最後の大会、全日学

東京でも北凌は思ったより落ち着いていた。それでも、少しでも早く環境に慣れさせるために地下馬道を何回も往復して曳き馬を長い時間やった。馬事交苑での運動は運動量が多くならないように気を付け、普段の確認程度のことにとどめた。ここまできてごちゃごちゃしても仕様がなかったからである。北凌の状態は良い状態であった。僕の方は北日学と違い、全日学はお祭りのような要素が強いせいもあって非常にリラックスしていたと思う。

総合の前日には北凌と開会式に出た。多くの人から反対されたが、馬事交苑に来てからも落ち着いていたし、他に安心して出られる馬もいなかったのだから出ることにしたのだが、北凌は我を失いひどく興奮してしまった。今までの中でもここまでコントロールを失ったのは初めてだった。僕にとっては、良い思い出になったが、北凌にはかわいそうなことをしてしまった。次の日の調教審査に嫌な感じを残さなければ良いと思ったが、その準備運動では多少落ち着きはなかったものの、そこそこまとまっていたと思う。しかし、馬場坪内に入ると北凌はまた我を失い僕たちは本当にひどい演技をしてしまった。前日に比べるとまだマシだったのがせめてもの救いであつたし、目標は完走だったのですぐに気持ちを耐久に切り替えることができた。北凌は状況の変化にとっても敏感な馬でそれを制御するにはしっかりとした騎座しかないと思うのだが、結局僕にはそれができなかった。なんとかこれから北凌に乗っていく人たちにはがんばって欲しい。それには、外部にも乗る機会を求めて食欲に練習していくしかないと思う。

耐久審査は北日学とは比べ物にならない難易度であった。納得がいくまで何度も下見をしてアプローチやロングルートを使う障害をきめていった。このとき前年に完走している木村のアドバイスにとっても助けられた。この難しいコースを一度帰ってきているというのは非常に説得力があったし、アドバイスも非常に的確だったと思う。ありがとう。今後、全日学の総合に出場する選手は、なんとかこの耐久の経験がある人を探して一緒に下見をしてもらうといいと思う。実際の経験があつてはじめて分かる事もあるからである。この全日学から、クランポンを装着して野外に出ることにしたのだが、どうしても右後ろのクランポンがはまらず、そのまま出場した。やはり耐久の準備には、何がおきるかわからないので、時間に十分余裕を持つておくことが大事である。耐久審査はもう必死だった。3番障害で一度コントロールを失ったが、その後はなんとか走行することができた。北日学のときとは違い、走行中も冷静にコースのチョイス（つまり下見で決めたコース以外を取る）ができたと思う。冷静に走行できたのは、もちろん一度北日学で野外を経験したことも大きいですが、もう1つの理由として僕自身の体力がアップしたこともあると思う。全日

学に出場が決まってから、毎日走りこみをしたため北日学の時はヘロヘロだった野外ゴール後もかなりの余裕があった。耐久審査に出場する選手は選手自体も体力をつけなくてはならないと思う。そのためには、普段の練習だけでは足りない。どこかで別の時間を取るしかないだろう。試合に出ない多くの人の支えで試合に出られるのだから、せめて、それくらいの努力はした方が良くと思う。僕も北日学をたいした準備もせずにむかえてしまっていたことを、この時に痛感し反省した。耐久審査の結果は、無反抗のタイム減点であった。タイム減点がものすごくついてしまい成績はよくなかったが、無反抗で完走できたことは満足のできる結果だった。耐久の経験をつんでいない僕と北凌にはタイムを詰めようとする余裕はなく、ただ安全に必死に一つ一つの障害に向かうしかなかった。もし全日学の総合に出場して成績を残そうとするのなら、全日学の耐久に実績のある馬(北旋風くらい)に乗り出場するか、同じ人馬のコンビで2年間全日学に出場するしかないと思う。

インスペクションをパスし、午後の余力審査に臨んだ。余力審査のコースは、前半部分はLBとLAの中間くらいの高さとボリューム、後半部分はMCクラスのコースであった。1日の中で耐久と余力を行うのは初めてで北凌の疲れを心配したが、準備運動では疲れている様子はなかった。それでも、やりすぎる必要はないと思ったので、軽めの準備運動で試合に向かった。しかし、この準備運動で北凌はテンションがあがりきっていなかったため、コースの前半部分で飛越後に出口に帰ったり、よれたりと納得いく走行ができなかった。軽めの準備運動の中でも、馬の気持ちをしっかりと作っておくべきだった。コースも中盤を過ぎると北凌もやっと障害を飛ぶことに納得して、後半はとても満足の行く走行になったと思う。後半部分では落下もなく、飛越もよいものであった。僕と北凌はMCクラスもクリアーできる状態になっていた。この1年間での北凌とのコンビでの成長を実感して全日学は幕を閉じた。

これからの課題

北凌の障害のレベルはこの一年でかなり上がったと思う。障害に関しては今の状態を維持できれば、総合では十分全日学レベルに入っていけると思う。馬場に関して、僕は何もしていないので言えることは少ないが、北凌は歩様が良く、試合でその実力を十分に発揮させてあげられれば、それだけで十分だとおもう。しかしそれには、かなりの騎座が必要であるため、騎乗者のレベルアップが求められる。野外に関しては、まだまだ不安な点があるが、野外馴致で騎乗者とのコンビで経験をつみ、時には北大の馬場でも上記のような練習をして、北凌に野外での心構えを常に持ってもらおう(?)ことによって解決していくしかないのかもしれない。北凌を見ると、みんなが良い馬だと褒めてくれる。それだけ素晴らしい馬体をしている彼をもっともっと活躍させてあげて欲しい。年齢的に厳しくなってくると思うが、騎乗者はしっかりやって北凌と東京をめざして欲しい。騎乗者が努力を惜しまず、練習のしかたを間違えなければきっと結果はついてくる。北凌は、それだけの馬であるのだ。

最後に

この一年間、僕と北凌の面倒を見てくれた OB の堀内兄には本当に感謝しています。僕たちが成績を残せたのも、堀内兄がいなければ考えられませんでした。生意気で意地っ張り、肝っ玉の小さい僕に対し、いらついたこともあったと思いますが、いつでも真摯に僕たちを指導してくれました。堀内兄は、僕が今まで見てきた現役を指導する OB の中で間違いなく一番真摯な姿勢で馬術部に関わってくれたと思います。現役の指導にあたる OB の方は皆さん真剣だったと思います。しかし、決して真摯であったとはいえませんでした。練習に遅刻する指導者など指導者として失格だと思います。僕が現役の間、堀内兄以外はいつでもそうでした。OB に指導を頼んでいる現役は OB に対し、強いことはいえないでしょう。僕を含め、これから現役を指導することになる人達は、堀内兄を見習い、真摯な気持ちで馬術部に関わるべきだと思います。

毎週のように馬場に足を運んでくださった市川部長、すぐに口答えをする生意気な僕のことを見捨てずアドバイスしてくださった中田兄、そして応援してくださった全ての OB の方々に感謝したいです。皆さんの作り上げてきたものの上に僕たちは立つことができ、そして素晴らしい時間を過ごすことができました。

本当に最後になりますが、一緒に活動してきた部員みんなにも感謝しています。寺島君をはじめ、同級生のみんなにはわがままで迷惑かけたと思うけどゆるしてね。先輩方、あの生意気な下級生が無事に卒部することになりました。ありがとうございます。下級生には本当にいつもいつもガミガミうるさいことばかり言ってごめんなさい。あなたたちのサポート無しでは絶対にやってこられませんでした。本当にありがとう。そのなかでも林君には北日でも、全日でも馬付きについてもらい本当に助かりました。ありがとう。いつの日か君が馬術部で活躍することを楽しみにしています。

き よ た

やきとり 居酒屋

ボリューム満点！コンパ150名様までOK！

札幌市北区北17条西5丁目西向き

当店誕生日、ご利用の方には
カラー写真・粗品をさしあげます。

TEL 011-747-7000

🐎北旋風(トルネードダンサー)🐎



調教報告

駒 サラ 鹿毛
平成2年3月26日生
北海道沙流郡門別町産
父 アスワン
母 ティーjeeブイ
平成5年9月4日入厩

竹田 敏宏

粹な調教報告のみを求める方は、3Pから読み始めてください。m(_)_m
それ以外の方は最初からどうぞ

僕が北旋風のチーフになったのは、半澤杯の後からだ。北日学までは3ヶ月弱しかなくそれまで北旋風に騎乗した経験もほとんどなかった。しかしながら、前任のチーフのとき、尾崎兄に人馬の育成をお願いしていたため、それを引き継ぐ形で、馬の調整と指導をお願いすることになった。僕が本格的に一人で騎乗を始めたのは、北日学から全日学までの間なので、北日学までの調教報告は、あくまでも僕の感じていたことであって、実際の方針と若干食い違っているかもしれないので留意してほしいと思う。

《トルネードに対するイメージ》

調教報告の前に、北旋風に対して誤解したイメージを持っている人が多い気がする。その点について触れておく。確かにみんなが思っているように、口と体が堅くて力が強く曲げにくくて丈夫である。そのことについてはまったくそのとおりであると思う。しかしながら、これは慢性的に改善しようのない癖ではなく、人も技術次第で改善できる余地は非常に多い。ただし、ものすごく繊細にそして我慢強く乗る必要がある。彼とうまくコミュニケーションをとることで、口をやわらかく使わせ、体を柔軟に動かし、軽い扶助で、スムーズな回転をすることができる。歴代のチーフの方々は何を言いたいのか理解していただけたと思うが、簡単に言うと、体や口が堅いからといって乱暴な扶助を使ってしまいがちになるが、丁寧に根気強く乗ることで徐々に馬が騎手に集中してくるし細かな扶助に

対しても敏感に反応できるようになる。(とても微妙な反応なので下級生の頃にしか乗ったことのない人にとっては扶助が伝わらない自分勝手な馬であると印象付けられたのだと思う)これは、北大にいる他の馬たちと比べると、扶助を理解し出すまでにはものすごく時間がかかるし集中力もいることであり、僕自身は毎日毎日とても苦勞・疲勞させられた。

また、僕が乗る前の昨年度の代替わりから僕が騎乗するまでの間の北旋風の状況についても触れてみる。

《代替わり直後のトル》

前年の9月より、チーフが2年生に交代した。その時から北日学まで1年間計画で尾崎兄に馬の調教と人の指導をお願いすることになった。このころの北旋風は、それまでのイメージ(障害に向ければ何でも飛ぶ)とは打って変わって、何の変哲もない低い障害でも躊躇したり、拒止したりしていたように思う。代替わり前に、まだ障害を飛越する技術の備わっていない下級生に障害練習ばかりをさせた結果であり、明らかにそのときに指導していた上級生のせいであった。僕個人の正直な印象としては、北旋風がもう一度活躍するようになるのは無理かもしれないと感じていた。それほどまでに馬の状態は悪かった。(それ故に、調整をお願いしていた尾崎兄はもう一度北旋風を立て直してくれたのには本当に感激した。)

《トルとの初めての経路走行》

僕が初めて試合に出場したのは10月の山下杯(於 酪農学園大学)で、このときは2年生チーフの下乗りとして110cmのコースを走行した。乗った感じは、馬が自分から障害を判断してくれるために、騎手が踏み切りやスピードをあまり考える必要がなく、また騎手が少々バランスを崩しても気にすることなく走行してくれたので、このときの経路走行ではとても乗りやすく北旋風にとってもいい印象を持った。しかし後から考えると、騎手のバランスに対して反応しないというのはバランスの安定しない下級生にとっては乗りやすいものではあるが、よりレベルの高い難しいコースを回ろうとして回転・半減却などを意識した際には大変厄介であり、また、それらの扶助を無視することにつながる。結果として、必要なときに手の内から外れてしまい、扶助が伝わらなくなったりしてしまうのである。(これは僕がチーフになってから嫌というほど思い知らされた。)

以上のようなことから、僕は北旋風に対してそれまでとは少し違って、経路走行自体は乗りやすく飛越能力も高いが、そのための普段のフラットワークを中心とした調整がとても難しい馬であると考えようになった。

また、騎手の扶助を無視することと関係することであるが、馬が障害に対して、あまりにも自分で判断しすぎていて、『飛べない、飛びたくない』と感じた障害においては、騎手がgoサインを出していても何が何でも反抗するといった具合であった。(なにぶん印象だけなので間違っていたらゴメンナサイ。)

《冬の間のトルネード??》

冬の間は、そのときのチーフの練習のみに使われていたようで、僕もリッチステートにつきっきりであったために、あまり詳しいことは知らない。

《テン乗り半澤杯、100cm クラスなのに・・・》

そして次に騎乗することになったのが半澤杯であった。半澤杯直前に北旋風のチーフが変更することは決定していたが誰が就くかはまだ決まっていなかった。僕も候補の一人ということで、このときはテン乗りで100cmのコースを走行した。山下杯のときのような経路走行をイメージしていたのであるが、このときは以前よりもさらに馬が人のいうことを聞こうとせず、ただ走りながら目の前の障害を飛んでいくといった具合であり、踏み切りも判断しているというよりは行き当たりばったりで踏み切るだけで、最終障害を逃避してしまった。(実はこの時は、もしも僕がチーフになると北日学すらまともに帰ってこれないのではないかと完全に自身も意欲も失っていた) もちろん人の技術不足のせいも大いにあった、今から考えるとこの経路走行は「もっとここでこうしておけばよかった」ということばかりである。しかし、今まで下級生が騎乗しても楽に完走できた北旋風で1反抗してしまったことは、そのときの馬の状態もかなり影響したと思う。

このあと僕がチーフになることが決まったわけである。(テン乗りではなくてしっかり練習していけば必ず結果は残せると考えて、みんなにも納得してもらってチーフになった)

さあ、いよいよ調教報告だ!

《北旋風調教報告～北日学》

北日学に向けて、まずはじめにフラットワークの組み立て方や、馬上でのコミュニケーションのとり方を教わりながら練習した。その一方で尾崎兄は馬の調整もしてくださっていた。具体的な方法として以下のようにした

1) 乗りはじめ

1日の運動のはじめに3種の歩様において、手綱を伸ばした状態で大きく動かし、ほとんど手綱を使わない状態での下方移行を頻繁に行った。特に速歩においては、体が硬いせいもあってか馬が自分で上手くバランスをとることができずに、コズんだような小さな歩様でしか運動できなくなっていた。(例えばキャバレティを通過させると、バランスを崩すように前のめりになって突っ込んでいくといった具合である) とくに北旋風は、馬がバランスを崩したり、苦しい姿勢とらされたりしたときに、扶助を無視して反抗する事を覚えてしまったようで、これは大変厄介であった。たいていの調教された馬であれば、人のバランス扶助に対して反応してくれるが、彼の場合はそれ以前にすべてから逃れようとするのである。こういった癖を改善するためにも、人のバランスに反応させた下方移行は大変有効であり、根気強く続けていくことでシーズン半ばにはかなりハミを軽くした状態で運動できるようになり、減却・半減脚も初めの頃と比べるとかなり楽

に行うことが出来るようになった。小さな速歩は残念ながらあまり改善されなかった（多少は良くなったが満足できるものではなかった）が、ゴーグを使い馬体を丸めた状態で運動していたために準備運動として、筋肉をほぐすといった目的では大変効果があった。

2) フラットワーク、平日編

平日のフラットワークは、人の練習と馬体の柔軟運動ばかりをしていた。まず、常歩においてリズムが速くならないようにゆっくりと大きく動かしていった。初めの頃、「こんなに遅くていいのか？」と思うくらい遅いと感じていたが、北旋風にとってはそれが一番扶助が伝わりやすく大きく動けるようであった。逆に速いリズムで運動してしまうと、歩様は側対歩気味になり、脚扶助に対しても大雑把な反応しかなくなり、細かい運動が出来なかった。尾崎兄が乗ると次第に馬が人を受け入れるようになっていく様子が下から見ていても十分にわかったので、それを真似するようになるべく同じペースで運動できるように心がけた。最後の全日学までこの常歩でのペース作りが大切であった。この状態をうまく作ることができれば、次に小さな巻き乗りをした。このときも少しでも騎坐・脚・手綱の力関係を崩してしまうと、馬が嫌がって反抗してしまい、最初の関係作りからやり直しになった。小さな反抗であれば、扶助を使い分けながら馬に納得させることが出来たが、それ以上では防ぎようがなかった。（たいていの馬なら悪い癖がでても、逆にそれを利用して更正させるという方法が可能であるが、北旋風に関しては反抗するときにもものすごい力でハミを突き出して逃げることを覚えており、恥ずかしながら当時の僕にはそれを防げるほどの深い騎坐が備わっておらず、一度反抗されると、叱ることは出来ても正しい方向に馬を導くことが出来なかった）

人の扶助を受け入れて巻き乗りが出来ると後はスムーズであった。次に、斜め横歩を行った。身体が硬くて長く続けると馬がなくなつて先程のような反抗につながるの、うまく手の内に入れながら2、3歩だけでいいと教わったのでそのようにした。実際にここで注意しなければならないのは、やはり身体が硬いので人の扶助とは無関係に馬が自分勝手に楽な方向に行くということと、扶助が不明瞭であると一歩目から反応できないということであった。これらに注意して斜め横歩で少しずつ少しずつ横方向にも馬体をほぐしていった。肩を張ったり（右手前）、ハミをはずしたり（左手前）、ハミに突っかかってきたり（右手前）と様々な悪癖を見せたが、それを完全に修正しようをすると反抗を招くだけであったので、最低限の修正しか出来なかった。（尾崎兄がかわりにやってくれていたためそれでも変な癖を悪化させることなく維持できていた。）そして前肢旋回に移った。これは脚反応をよくするためにも有用であったが、僕にとって一番良かったのは北旋風でハミに乗せる感覚をつかむことが出来たことである。しっかり外方のハミに載せていないと、肩を張ったり軸が大きくずれたり脚から逃げるように動き、また脚による推進を一歩ずつ手綱で受け止められないとリズムが壊れた。この前肢旋回を習得すると、より短時間で正確にハミを取らせて手の内に入れることが出来た。

やっとならぬ。実際の騎乗でもここまでの常歩が一番時間が長かった。）今まで

の怪我のせいなのか左右のバランスが非常に悪く、またすぐにバランスを保てなくなって身体を硬直させていたので、あまり無理な運動（つまりは反抗を招かないように）はさせないようにした。回転運動では、馬体を屈曲させずに倒れ込もうとするのでしっかりとバランスを後ろに置いて屈曲させて回転することと、なるべく一定のペースで運動するように心がけた。常歩運動がしっかり出来ていると、速歩では特に何もしなくても満足のいく運動が出来ていたように思う。そんなときは詰め伸ばしを中心に半減脚の反応性を高めていった。このときも、手の内に入っていれば推進時でもほとんど脚を使う必要がなかったように思う。

速歩で多くを望もうとすると『反抗→振り出し（常歩）に戻る』になってしまうので、なるべくうまく手の内に入れた状態で駆歩に移った。駆歩になると、とくに乗り始めた時期では、うまく乗らないと走り出す癖があるようだった。（下級生が駆足をしているうちにだんだん速くなってコントロール不能になって、「さあ、最終コーナーを回ってトルネードダンサー号、出口に向かって一直線！！」といった風景を記憶している方もたくさんいると思う。）僕自身も初めのうちは、走ろうとするのを抑えるだけといった乗り方しか出来なかった。次第に馬を興奮させない乗り方を覚えていき、やつとまともに運動できるようなるまでに2週間くらいかかったように思う。駆歩では主に回転を入れながら詰め伸ばしをただけだった。もちろん、馬体の屈曲やバランスバック、半減却などを意識していたが、とにかくこの単純な運動をするだけでもとても難しかった。こぶしを譲るタイミングや力のかけ方が少しでもずれると段々ハミにかかってくるようになり、やがて手の内から外れてしまった。しかしこれがうまく出来ないと、障害の経路走行など出来るはずもないので、ひたすら練習した。尾崎兄にはいつも回転で身体を起こすように注意された。自分では起こしているつもりでも、ハミが重たくなるとすぐに騎坐を奪われてしまうために腰を浮かせて前傾していたのである。何とか深い騎坐で乗るように心がけていたが、これは最後まで目指していたところまでは達成できなかったように思う。

また、これらの運動を行っていると、ハミが強くなって前のめりの体勢になることが数多くあったので、そういったときには停止・後退をさせることで体勢を立て直し、なるべくハミを軽くした状態で乗るようにした。無理をしてハミが強い状態で乗り続けると、やがて手の内から外れてしまうので、必要なときにはかなり頻繁に行った。

北日学が近づくと、1日の運動の初めは、調馬策で行うようにした。手綱を放した状態での準備運動は、馬の意思が先行してしまう欠点があるし、その日によって状態もかなり違っていた。一方、調馬策では、人が確実にペースをコントロールして、馬の動きを邪魔をすることなく一步一步確実に踏み込ませることで、いつもある程度運動できる状態にしてから乗ることが出来た。

2) フラットワーク、休み明け編

「トルネードは物忘れが激しすぎる！！」と思うほど、休み明けに運動するときには、休み前にやった運動がつかず、思い出させるまでに時間がかかった。平日であれば、前の日に満足の行く運動が出来れば次の日もある程度いい状態で乗ることが出来るのであるが、休み明けとなれば話は別でほぼ 100%マイナスからのスタートであった。身体が硬くなるのは当然であるが、休み前までは受け入れてくれていた扶助に対しても思いっきり抵抗した。休み明けで身体を硬くしたからだろうと普通に考える人が多いだろうが、その効きにくさは並大抵ではなかった。たった 1 日休んだだけで、まともに常歩で巻き乗りが出来ないのである。これまでの運動の組み立て方では、これが出来ないと次に進めないのに、である。ここでもあらためて北旋風の特異さに驚かされた。

これは調馬策をはじめてからはある程度改善されてきた。また、常歩では僕の騎坐少しは安定したようで、少々馬が（というか北旋風が）つらい体勢でも逃がすことなく運動できるようになった。おそらくこれから北旋風のチーフになる人も苦勞すると思うが何とかして深い騎坐を習得しないと同じ問題に必ず直面すると思う。

3) 障害練習編（コンビネーション・駈足飛越の二部構成です）

障害練習の日も基本的には普段と変わらない組み立てで駈歩まで行った。（尾崎兄に準備運動を一任して障害飛越練習のみをしたこともあった。）気をつけることは、普段はゴーグをつけて乗っているために、はずすといつもとはかなり違った感覚になるということである。（つまりはキリンさん復活である。）ただしやることは同じで、なるべくハミを軽くして人のバランスに従って運動させるようにした。また、どうしても走られるのが嫌で消極的な脚扶助になってしまうので、意識的に脚を使うようにした。

～～コンビネーションの部～～

まず速歩でクロスをとび徐々に高くしていき続いて単一を飛んだ。120cm くらいまであげていった。その後バウンスを入れてコンビネーションを飛越した。前の年はコンビネーション障害ですら反抗していたが、笑がチーフになってからは、尾崎兄の調教のおかげで馬が障害を躊躇する様子も見られなくなっていた。尾崎兄曰く馬が障害に対して自信を取り戻しつつあるということだった。確かにそのとおりであった。僕も障害飛越前・中・後になるべく馬の嫌がることをしないように細心の注意を払って騎乗した。さらに人が障害飛越になれてくると、踏み切りバーをまたぐときや障害間に置いても重心を前後させて馬が飛びやすくするように心がけた。もともと飛越能力はすばらしかったので、シーズンが進むにつれてゆったりとしたペースで大きく飛ぶことが出来るようになった。またやる気はあるが興奮しすぎないという理想的な状態に近づいていくのが日を追ってわかった。高さでは手綱を放した状態で 120cm の正オクサーから 130cm くらいをコンスタントに飛んでいたように思う。（もちろんこのときも必要以上に興奮するこ

とはなく、飛越後はすぐに手の内に入った。)

特に変わった組み立てをしなくても、毎日のフラットワークをうまくこなして障害に
つなげることが出来れば、あとは障害練習中に人が余計なことさえしなければ、馬が自
分から自信を取り戻していくようであった。

～～駢歩飛越の部～～

障害飛越に関してここまでいいことばかり書いていたが駢歩飛越に関しては一筋縄で
はいかなかった。明らかに人の技術不足・経験不足があったからである。先にも書いた
ようにフラットワークで駢歩の詰め伸ばしをするのでさえ苦勞していたのに駢歩飛越を
しようというのである。とにかくにも単一の障害を駢歩で飛越することから始めた。
尾崎兄が下乗りしてくれるのにもかかわらず、普段ならできる回転やバランスバック、
推進が全く出来ないのである。馬が障害に集中しているためであるがその意識を人に向
けさせることが少しも出来なかった。

これを改善していくためには数をこなして練習していくしかない、ということで普段
のフラットワークも含めて、出来るだけ手の内に入れた中で運動できるように、様々な
ことに気を配りながら練習した。(特に手綱を使うタイミングと、騎坐を深くして乗るこ
とを心がけた。) 障害前では踏み切りは馬が自分で判断して飛越するので一定のペース・
リズムで推進しながら、左右にぶれさせないように注意した。試合で逃避されたことが
何回かあったがこれらは回転中の推進が足りず、馬が障害に対して前向きな気持ちにな
れなかったことが原因であった。同じミスをしないように注意してはいたがシーズンを
通して2、3回同じようなミスをしてしまった。障害後に関しては、馬が身体を起こす
ときに同時に人も起こすことが出来ればかなりスムーズに手の内に入れることが出来、
次の障害につながっていった。

駢歩飛越に関しては、フラットワークでの運動がとても大切であり、馬のコントロー
ルさえうまく出来ればよかった。踏み切りはむしろ馬がヒトに教えてくれたように思う。
どういったペースで障害に向かってどこで踏み切りたいのか、初めは馬についていくだ
けで精一杯であったが、最後には馬が一番踏み切りやすいところに導くことも少しは出
来るようになった。(もちろん失敗もした。馬に悪いことをしたと思う)

《試合について》

普段の練習の延長として運動した。特に何も変えなかった。結果はいろいろであったが、
それなりに納得のいくものばかりで、なぜそんなことになったのかわからない、といった
反抗や走行ミスはなかった。

いつもと違っていたのは、試合になると馬のテンションがあがりすぎるということくら
いである。僕の印象としては北旋風のテンションは

厩舎内 ≒ 放牧 ≒ 普段の運動 ≒ 障害練習 ≒ 馬休明け
＜ 駆足での障害練習 ≒ 外乗 ≒ 競技会場 ≪ 競技中 ＜ 北日学 ≒ 全日学
≪ 野外走行

という感じで、競技中のテンションはかなりのハイ・アベレージである。そのために、その状態でうまく乗りこなすのには経験が一番重要ということで出来るだけ多くの競技に出場した。北日学 2 走で結果を出せなかったが、このときに多くの鞍数をこなしたからこそ総合の結果につながったと思う。今後のチーフの人も出来るだけ場数を踏むようにしてほしいと思う。（もちろん、馬の負担にならないように入念な馬体管理を行い、馬の邪魔をしない障害飛越ができるようになることが前提である。）

≪ 野外馴致 ≫

北旋風には野外馴致はほとんど必要なかった。これまでのチーフの方々の馴致の賜物であると思う。馴致においては、野外だからといって必要以上に興奮することもなく、また、一風変わった障害も騎手が go サインを出すものは障害を認識して飛越していった。明るいところから、暗くて狭いところ（あくまでも馬の目線に立って）に入っていくのだけは恐怖を感じるようで、騎手がしっかりと馬を励ましながら誘導してあげないと怖さが上まわって逃避するようであった。僕も馴致中に一度逃げられそうになったが、きっちりと誘導して go サインを出すと、意を決したように森（暗闇）の中に入ってしまった。

おそらくこれからの人たちは野外を走行する機会も馴致する機会も少なくなっていくと思うので、馬のやる気には特に注意してもらいたい。特に野外走行では何が怖くて、何が大丈夫といったことはそのときそのときの馬の気持ちで変わるし、人が大丈夫と思う基準と馬の基準とは大きく違うことが良く起こる。僕の印象としては、他の馬が嫌がるところには必ず何かあるということである。（たとえ馬が何度も経験していても起こりうることだと思う。）

≪ 北日学二走 ≫

結果は 1 走目に 3 反抗失権。僕の目標設定が甘かった。終わった後に何度も後悔したことである。具体的には、北日学までは 120cm のコースを無難に完走できれば北日学は通過できると思っていた。しかし、実際のコースでは、130cm の障害を飛越したときに僕がおられて、馬が手の内から完全に外れてしまって連続逃避した。よく 110cm から 120cm には壁があるといわれるが、120 から 130cm にも壁があった。この高さは普段から練習しておらず、予想外の飛越の大きさについていくことが出来なかった。北大では 120cm を超える練習はほとんどやらないが、もし本気で 2 走を狙う人がいれば、最低でも 130cm は普段から練習するようにしてもらいたい。（ただしやりすぎると馬体に無理がかかるので回数を減らしたり、足場を選んだりして対応してほしい。）

《北日学総合》

調教は麒麟さんだった。

耐久は、何の問題もなく減点なしだった。出番が後のほうで、さらに僕自身も2鞍目だったので特に注意が必要な障害も目星がついていた。しっかり誘導しなければならないところと、抑えなければならないところはさすがに、経路走行と同じで難しかったが、それをカバーできるだけのやる気が馬にあったように思う。

余力は、それまででは一番手のうちに入った走行が出来た。もちろん野外走行の次の日なので半減却は効きやすい状態にあったし馬体も大きくほぐれていた。また、雨が降ったこともあり、足場が悪くて馬が足下を気にしていたために、僕にとってはとても乗りやすい条件が整っていた。ゆったりとしたペースで大きく飛越できたことで、どういった感覚で経路走行をすればいいのか体験することが出来、その後の騎乗にとっても役に立った。

～～インスペクションにて～～

余力の朝になって、少しコズんでいるようだったので調馬策をかけた。そのときに馬場がぬかるんでいたせいで転倒してしまった。すぐに起き上がったが歩様が少しおかしかったのですぐに上げて引き運動をした。また、馬付と馬体をきれいにした。歩様はすぐに直りインスペクションも通過したが、一歩間違えれば大変なことになるところだった。いつ何が起こるかわからないので、皆も注意してください。

《北旋風調教報告～全日学》

全日学に向けて基本的にはそれまでと同じことをやった。ただし、全日学ではゴーグを使用できないこと、ある程度調教審査で点数を取らないと全く勝負にならないことを考えて、折り返し手綱を使って馬場的な運動も取り入れるようにした。

1) フラットワークについて

北日学まではゴーグを使って運動していたために、初めて折り返し手綱を使ったときも、すぐに馬のほうから道具を受け入れて運動してくれた。今まで苦労してやっていた横運動も、ハミの効きがいいために馬を納得させながら運動することが出来た。折り返しを使った運動をするときによく言われるのが、道具の効きが強いために騎手が無意識のうちに道具に頼った運動をしてしまうようになったり、いつも口を下に引っ張っているために巻き込む癖がつくということがある。巻き込みについては、全くそういった兆候を見せなかったが、道具の使いどころに関しては、この頃とても苦労した。というのも、もともとハミを突き出して反抗する癖があるように、折り返し手綱をもってしてもその抑制から逃げようとするからであった。手の内に入って運動しているときには道具に全く頼らないで運動することは出来たが、やはり馬が苦しいときには、ハミに突っかかってくるのがまだあった。

しかし、このころには僕の騎坐も多少は安定してきたのか、それとも折り返し手綱の

効果なのか（おそらく両方だと思う）、それまでは反抗されっぱなしになるのを避けるために、あまり行っていなかった強めの要求も出来るようになった。具体的には、もっとウナジを低くさせた状態で運動させたり（要するに低伸運動のことであるが、北旋風でウナジをキ項より低く保って運動できたことは馬のフレームを伸ばすのにとっても効果的であった）横運動、特に肩内において角度の調整や、馬体の屈曲をより高度に求めたりした。身体の固さゆえにそれまでは肩内をしていても馬体の屈曲がなかったし、すぐに反抗してきて蹄跡から外れられたりしていた。しかし、折り返し手綱と使用するようになってからはこれらの苦労もほとんどなくなり、僕の騎坐でも馬に対して強い要求を出せるようになった。少しずつ折り返し手綱の使い方を覚え、使いどころを確認していった。もちろん、道具の副作用が大きいこともわかっていたために、細心の注意を払って、絶対に道具がきつくなりっぱなしにならないように集中しながら騎乗した。

9月の下旬、秋季大会の頃になると、折り返し手綱を使うことによって、思い通りのフラットワークができるようになっていた。この頃から全日学本番までのフラットワークの組み立てについても書いておくので、これから北旋風に騎乗するかもしれない人は参考にしてほしいと思う。

準備運動は馬が良く踏み込んでいけるように、また、左右の非対称性を出来るだけ無くすように注意しながら、調馬策（馬の状態がよければ人が騎乗して）で低伸運動を行った。この時は、何よりも馬の踏み込みを重要視して行った。（速歩・駆歩両方とも。）

次に、輪乗りで常歩運動をした。今までと違ったのは、巻き乗りの半径をかなり小さくしたことと（多分8mくらい）輪線上にきっちりと馬体を載せて出来る限り逃げられないようにした。（今までは反抗を避けて少しなら妥協していた）

速歩は、同様に馬体の屈曲を意識して運動し、巻き乗りも小さくした。また、ツースターでは肩内・腰内も要求されるために、それまでよりも長い距離を馬に我慢させながら肩内・腰内を行った。どうしても右手前になると馬体を曲げるのをやめてまっすぐになろうとするので、絶対に僕が隙をつくらないようにした。

駆足では、これも同様に小さな巻き乗りを取り入れるようにした。このときも、すぐに馬体をまっすぐにして倒れこむような回転をしようとするので、思い切り坐骨を鞍に押し付けるようにして、馬体を曲げさせて運動した。

毎日が柔軟運動ばかりであったが、十月初め頃になってようやくツースターを無難にまわれるくらいの動きをさせられるようになった。（折り返しをつけた状態での話だが、道具を使用しなくても、ある程度まとまった経路周りは出来た。）

2) 障害について

障害については、特に変わったことはしなかった。手綱を伸ばした状態でのコンビネーションと、駆歩飛越をした。しつこいくらいの柔軟運動のためか、障害の高さにあわせて肢をさばくのがうまくなった気がした。それまでのように、力に頼った飛越という

よりは、身体のパネを使って飛越に変わってきた。(騎乗しているときはもちろん、ビデオで見ても明らかに身体を使うようになっていた) もちろん騎手自身のバランスもようやく北旋風になじんできていたし、北日学の余力で北旋風の全身を使ったきれいな飛越がどういったものか体験できていたのが良かったと思う。

駈歩飛越に関しても、それまでに経路走行でなるべく多くの経験をつむようにしてきたために意識しなくても踏み切りや回転のペース、馬の前進氣勢などが身についていた。

(尾崎兄に北旋風との関係作りや、試合感を身に付けるためになるべく多くの試合に出たほうが良いとの助言をしてもらっていたからだった。) そういった理由で、詰まった飛越になったときでも騎手があわてずに待ってから飛越についていけるようになっていたし、北旋風の方もたとえ詰まってしまっても、難なく障害を通過してくれるようになっていた。本番を想定して 120cm 位のミニ経路を作って練習した。完歩によるペースの違いや回転で出来るだけ楽に馬に前進氣勢を与える練習を中心に行った。1 度ミスして踏切がドン詰まりになったときでも 120cm の正オクサーを楽に通過してしてくれた。(おそらくこれが本来の北旋風の力なんだなあと能力の高さを再認識した)

少し気になっていたのは、折り返し手綱で強い低伸を求めているためなのか、少しバランスが前のめりになっている感じがした。経路走行中では馬が自分からバランスを起こしていたし、僕自身もバランスバックさせることができるようになっていたので弊害は感じなかったが、明らかに尾崎兄に乗ってもらっていたときよりもバランスの戻りが悪くなっていた。これは、フラットワークで詰め伸ばしを多くして、それまで以上に手綱を使わないようにして対処した。

《秋季大会にて》

秋季大会では、本番と同じ高さの MC に出場した。それまでの運動内容からも特に不安もなかったのだが、結果は 1 反抗 1 落下であった。このときの 1 落下は前の障害を飛越した後に馬体を伸ばしてしまい、そのまま伸びた状態で、また踏み切りで仕掛けてしまったためであり、僕の判断ミスだった。1 反抗は、ハミをはずして推進が十分ではなかったところで馬が障害を逃避してしまった。僕に隙があったことと、その障害が北日学で二反抗したところと同じであったために馬が思い出してしまったと思う。

この大会では、特に完歩の決まった連続障害でミスしやすいことがわかったため、ここからは、鈍角回転と直線 (3～5 完歩) の駈歩飛越で、もっとシビアにバランスバックや推進の練習をした。

《秋季大会直後の馴致》

北日学から全日学までは野外走行の練習をする機会がなく、畜大馴致に行くと本番直前になってしまうために、大会最終日に野外走行の練習をした。このときは、なるべく馬が障害を見ながら飛越できるようにゆったりとしたペースで走行た。馬の状態のよさのため

か全く興奮することなく一つ一つの障害を判断しながら飛んでくれた。

しかし、僕が少し速いペースにもなれておこうとスピードを上げたときに、鼻出血をおこしてしまった。発見が早く、また大会中だったこともありすぐに酪農の鈴木さんに治療してもらったために大事には至らなかったが、それでもここから 2 週間ほどは安静にして過ごした。

《全日学まで》

鼻出血が起こってからは軽めの運動で、馬体が固まらないように柔軟運動だけは行った。運動中に咳き込むことがあり、おそらく出血の後遺症であろうと考えて、咳をしなくなるまでは軽めの運動のみにして障害飛越もしなかった。

2 週間経った頃には咳もおさまリ、ようやく運動を再開した。短期ではあったが一応休み明けであったので、まともに運動できるか不安であったが、少し身体が固くなったくらいで、障害飛越になって興奮するといったことはなかった。

ここから全日学までは特にショート完歩のミニコースでスムーズな走行が出来るように練習し、後は体調維持に努めた。全日学出発の頃には、フラットワーク・障害ともにそれまで目指していたレベルの運動は出来るようになっていた。バランスバックと、なるべく怪い状態でのハミ受けに関しては、満足のいくものではなかったがこれは馬の状態が悪いというよりも、僕の技術不足（つまりは騎坐が浅い）であって、HP の掲示板にも書き込んだように北旋風の状態はかなりいいものだったと思う。

《全日学》

輸送はさすがにベテランで何の問題もなかった。厩舎では慣れない環境と暑さのために飼食が悪くなった。練習馬場では常に興奮状態でほとんど運動にならなかったが、毎日馴致を繰り返して徐々に環境に慣れさせていった。何度も馬事公苑に行っているためにあまり興奮しないだろうと予想していたのだが、かなり興奮して、普段の運動をするだけでもかなり手を焼いた。

・調教審査

準備運動でも相変わらず興奮していたものの、折り返し手綱をはづしてからしばらくは良かったが、競技馬場の埒の中に入ったとたんにはちやめちやになってしまった。またもやキリンさんになってしまい、ハミも全く効かなくなりどうしようもなかった。

・耐久審査

準備運動で少し前進氣勢が足りない気がしたので、少し速めのペースで練習馬場の障害を飛越してから走行に向かった。

このときも同じようになり興奮しており、スタートした直後は、引っかかってしまった。2 番障害では逆に行く気が無くなり U ターンして帰ろうとした。ここを通過して

からは特に問題が無かったが、前々から気にしていた、暗い森の中に入っていく障害では、かなりペースを落として、馬が判断する時間を十分に与えるように注意して向かった。逃げるそぶりは見せなかったがそれでも自分から障害に向かおうとはしなかったので、しっかり推進して絶対に隙を与えないようにした。ここを通過してからは人もミスがあったものの、馬自体には何の問題も無いスムーズな走行であった。全日学ゆえの急な回転では騎手が苦勞することもあったが、行く気になった北旋風はどんどん自分から飛越していった。尾崎兄に言われていたように後半に疲れてペースが落ちてきた。特に上り坂ではかなりペースが落ちてくるので、北旋風がやる気を無くさないように推進だけは忘れないように心がけた。結果は無反抗だった。騎手のミスで飛ばなくてもいい宛内の柵を飛んでしまったりといろんなことがあったが、とにかく馬のやる気は十分だった。

・インスペクション

恐れていたようにまた鼻出血を起こした。幸いに森田兄の助言でタオルを用意していたおかげでインスペクションは通過した。

・余力

余力ではさすがに疲れがピークに達しているようだった。バランスが前のめりになったままで起こしてくるのがかなりきつそうだった。また、馬体が伸びきっていて、詰めようとすると、前進氣勢まで削がれるといった状態であった。走行中もひたすら前に出さないといけなかった。そのせいで落下がかなり多くなってしまったが、そのときの馬の疲労と僕の技術を考えて、反抗せずに完走してくれたことが何よりであった。

《最後に》

僕が実際に北旋風に騎乗していたのは半年間ほどでしたが、この間、特に障害飛越に関して色々と勉強になりました。騎乗していて感じたことですが、北旋風は少なくとも僕が乗っていた時には実力を出し切っていなかったと思います。これまで書いてきたようにまだまだ克服していかなければならない課題は山ほどありました。(出来れば少し高度な運動をしたかったです。) それでもあれだけやれたのだと思うと、潜在能力の高さはすばらしいものがあると思います。また、その気性からほとんど弊害を考えることなく障害練習をさせてくれます。今後もこれまでと同じように、部員の練習に幅広く活躍しながら、さらにその能力を引き出してもらって試合でも活躍してほしいと思います。

ここ数年間下向きだった北旋風の状況を上向きにすることが出来たと思います。出来てから日の浅かった僕たちコンビを全日学まで連れて行ってくださった多くの方に感謝しています。どうもありがとうございました。そしてこれからも北旋風を管理していく人たちへ、彼は気持ちが必要な奴です。かわいがってあげてください、必ず応えてくれます。

北彗(メジロゲネシス)



騊 サラ 芦毛
平成5年5月30日生
北海道伊達市産
父 メジロティターン
母 メジロマリア
平成10年11月8日入厩

調教報告

木村 滋之

“調教報告”という題名の文章を書くにあたって僕は、少し違和感を覚える。他大学の部誌においてこういった“調教報告”なるものを僕はまだ見たことがない。確かに毎年チーフが、1年間を振り返ってどんなことをして来たか、どんなことで失敗し、どんなことが成功に繋がったか、ということを綴ったこの“調教報告”はとても参考になるもので、けっしてこれ自体を否定する気はなく、むしろこの“OBの遺言・遺産”ともいうべき“調教報告”の載った部報は北大の宝であり、現役部員はもっと昔の部報をたくさん読んで勉強するべきである。自分の乗っている馬の調教報告はもちろんだが、長屋さんや加藤ゆうこさんの文などは必読である。僕の部屋の本棚には部報専用の棚があり、そこには昭和59年から今に至るまですべての部報が並んでいるというのはもはや周知の事実であるが（すいません、もう返します）、何度読んでも新しい発見があるものである。

だったら、なぜ“調教報告”に難癖をつけるのかと思うかもしれないが、僕にはこの“調教”という言葉が引っかかるのである。“調教”という言葉はすなわち馬が“生徒”であり、人が“先生”という立場にあることを示す。チーフになった人間は、この馬を“調教”するんだという思いから、無意識のうちに“先生”の立場に立ってしまうことがある。こうなると、馬に乗ることが“練習”ではなくなり、ただの“運動”となってしまう。先生なら先生で、他人や生徒の言葉に耳を傾けない頭の固い先生ではなく、他の先生方の姿勢から積極的に学ぼうとし、時には厳しく生徒を叱るが、それ以上に良く誉めてやり、生徒から間違いを指摘されたときには素直にそれを認められる、そんな生徒から信頼される先生にならなくてはならない。ただ、まだ何をどうやって教えればいいのか分からない場合は英会話教室に通って自分が生徒として学ばなくてはならない。そのときのネイティブスピーカーの先生が馬である。

参考書や教科書もたくさんあるし、生徒同士で教えあうこともできる。たまに、訛りのひどい先生が登場するかもしれないが、その人からだって多くのことを学ぶことができるはずだ。

学ばなくては成長しない。厳しい受験を勝ち抜いてきた北大生なら学ぶことはもともと得意そうだが、受験勉強というのは一種の訓練であって、“学ぶ”とは程遠いものだ。高学歴な人間ほど学ぶ姿勢を持ち合わせていないのではないか。それでいて、プライドだけはやたら高い、一番厄介な人種が集うのが北大馬術部である。

少し話がそれたが、そうやって馬と人がそれぞれ“生徒”であり“先生”となって二人三脚？で高めあって始めて人馬のレベルが向上するのであって、特に学生馬術においては人の上達が鍵となる。よく「北大生は下手くそだから、誰が乗っても飛ぶような馬を作らなくてはならない」というような言葉を耳にするが（昔は自分もそのような事を言っていた気がするが）そう考えている時点で、スポーツ選手として負けである。誰が乗っても飛ぶ馬なんて、下手くそには作ることも出来ないし、ましてや維持することも不可能だ。北大馬術部に必要なのは、良い先生となる練習馬であり、その先生に学びながら選手が成長することで初めて、良い競技馬となるのだと思う。

だいぶ長い前置きだったが、そういうわけでゲネシスは僕にとって良い先生だった。特に、今年はたくさんの失敗をして、そこからたくさんのことを学んだ。

一言で言えば今年は調子が悪くてどうしようもない年だった。障害の試合で、まともに帰ってきたのは、春先の試合と全日学だけである。そもそも春は、元気がいいからどんな向け方をしても止まらない。それを、調子がいいと勘違いし、成績が良かったことに満足して、十分な反省をしていなかったため、その後苦しむことになる。スポーツ選手が満足出来るのは、自分の最終目標が達成されたときだけである。それまでは満足はすなわち油断となる。

さっきから、スポーツ選手云々という話をしているが、現役部員はあまりピンとこないかもしれない。さらに言い換えて、アスリートだと言われたら全くピンとこないであろう。でも紛れもなく馬術はスポーツであるし、馬術部員はアスリートであるはずだ。その辺のところは、昭和63年度の部報で中野さんが書いた「前主将から」と「北皇子調教報告」を読んでもらいたい。先ほど調教報告の話をしたが、この「前主将から」という文もまた、勉強させられる文章が多い。

話を戻そう。新緑大会ではMCで、2番障害において1拒止。単純に1番障害からの距離の読み違いが原因。下見で、6歩にしては少し短いなと思い、最初から元気よく行くという意味もこめて、5歩で行こうとしたら、ぜんぜん届かなかった。もともとゲネシスは馬体が小さい分歩幅も狭い。昔は、障害に対して興奮して突っ込んでいく癖があり、少し走られ気味で経路を回っていた事が多かったが、この頃になると馬も成長してきて、障害に対して走っていくこともなくなりコントロールが効くようになった。その分今度は走らせなければならないし、他の馬にとってノーマルの距離もこの馬にとっては少し長いと考

えなければならない。単純なことだが、今シーズンの失敗は全てこのことが原因となっていた。北日学の二走での拒止も、5番、6番の障害間が少し長い5間歩のところで、5番のオクサーを詰まって飛び、相当追って走らせたが届かず、という同じパターンであった。このときはさらに6番についたと黒いブロックが入っていたことで、馬が躊躇したということもあったが、また後で述べる様に、腰を痛めていたことで前に出ない状態だったことが全ての元凶であった。

この北日学での二走の反抗には相当悩まされた。この場合どうすればよかったのか。5番を詰まって飛んだ時点で、無理に追わずに1歩多く行くという手もあるが、6番障害がダブルであったため、中途半端に詰めて近くから飛ばせたら、後ろが届かなかったであろう。模範解答としては、5番を詰まったならば、次の4歩を推進力を維持しながらしっかりと詰め、最後の2歩を少し楽にして6番障害を大きく飛ばせる。これが出来たならば、あるいは反抗はしなかったかもしれない。でも、そのときにとっさの判断でそういう選択をして実行しろと言うのはちょっと酷な話である。セオリーとしては、1つ目の障害を詰まって飛んだならば、着地で前に出すというのが基本で、そのときの判断も今は間違っていないと思う。問題は、前に出そうとしても出て行かなかったことにある。

新緑後の畜大野外馴致では、さすがに3回目だけあって、全く問題なかった。ただ、帰る日になって外厩で、隣同士だったヤスノインディアンと噛み合って、口の中をざっくりと切ってしまい、畜大の獣医の方々や部員に大変お世話になった。

腰を痛めたのは、その後の春季大会のフレンドシップのときだった。飛び乗りをしようとした時に、背を凹ませてそのまま倒れ込んでしまった。もともと背中が弱く敏感なために、昔から馬繋台で腹帯を締めるとソッパをすることがあり、普段は乗る前にも1穴ずつ腹帯を締めていき、歩かせてから乗るようにしていたが、その日は最後腹帯を締めてから、そのまま乗ろうとしてしまった。その他にも、馬が試合ということで緊張していたり、僕の飛び乗りが乱暴だったということもあるのかもしれないが、とにかく普段と違うことをしたために起こった事で、本当に軽率だったと思う。

その後、約1ヶ月馬休にして、とりあえず跛行はしていなかったので乗ってみたが、背中が繋がらなくなっていて、全く前に出なかった。外見上は普通に見えるが、乗るとものすごく気持ち悪い。索でも同様。一応公認大会にエントリーしたが、フレンドシップの準備運動をしていて、跳ね方が尋常じゃなかったので取りやめた。それでも、ノーザンの野外の馴致は行なった。本当ならば、障害を飛ぶことはおろか、馬休にしていなければならない状態であったが、北日学に出て結果を出さなければこの馬の存在意義はなくなってしまふ。馬にとっては拷問のようなものだったかもしれないが、北日学までは2日おきくらいで運動し、必要だと思った練習はやった。馬の調教ではなく、人の練習のために。

去年の全日学でのウッドパインの失敗の教訓として、試合前には自分の納得のいく練習をしなければならない、という思いがある。これは、試合直前でなくても良いのだが、経路走行の良いイメージを練習で、頭と体に刻み込まなくてはならない。これがなくては、

本番で自信をもって走行することが出来ない。去年のゲネシスの例でいえば、ちょうど中野善弘さんのクリニックがそれだった。今年は北日前、全日前共にクリニックも出れず、馬の状態も悪く、このままでは不安で押しつぶされそうだったので、あがいて、失敗してでも、さらにそこから何かをつかむよう必死になって練習した。

この頃は、よく止まった。完全に止まり癖がついて、とうとう 80cm の障害でも止まるようになった。特にオクサーだが、障害前で遠いなど思ったときに前に出そうとするが届かず止まってしまう。問題は、障害前で馬が前に出て行かないことと、遠くから大きく踏み切るバネがなくなっていたことにある。だが、人間は自分が踏み切りの判断を誤ったと思い、踏み切りを合わせることに必死になる。そうすると、無意識のうちに駆歩を小さくしてしまい、さらに近くからも遠くからも飛べなくなってしまう。こうなったら悪循環である。馬も踏み切りが合わないと思えないと思うようになり、実際に飛ばない馬になっていく。

それでも、北日中には何とか持ち直すきっかけをつかんだ。ひとつは、準備運動の歩度の伸縮で思いっきり走らせること。障害を飛ぶ前には、馬が自分から前に出て行く状態になっていなければならない。本番、1 番障害に向かう前にも一度走らせるようにした。フレンドシップでは、距離の決まっていて踏み切りの合わせやすい障害は、少し遠目から大きく飛ばすようにした。そうやって、踏み切りに幅を持たせるようにした。

北日学が終わって、全日学の 1 ヶ月前までは休ませることにした。特に跛行していた訳ではないが、9 月に JRA の水野さんが来て下さり診ていただいた時に、馬は痛がっていないが左腰の状態が相当悪いと言われて、そう決めた。とにかくこの状態のままでは全日学で失権するのは目に見えていた。

実際には、10 月に入って突然フレグモーネになってしまい、運動をはじめたのは 3 週間前からとなった。運動を再開した当初は動きも悪く、全く治っていないと落胆したが、頭頸を深く下げさせ背中をよく伸ばして繋がるように、低伸運動を重点的に行なうようにした。そうしている内に、いつのまにか動きもよくなり前進氣勢が出てきた。

全日学という大舞台に臨むにあたって、人馬共に一番必要なものは“自信”であった。馬には、あまり無理しない範囲でコンビネーションなどを気持ちよく飛ばせることで障害に対する自信をつけさせた。問題は自分自身であったが、自分を自分自身のトレーナーだと思って、一人二役で練習した。

このとき一つの確信を持って行なったことは、一定のペースで経路を廻ることであった。基本的なことではあるが、このことが本当に大事だと思う。馬のバランスを崩さずに常に同じペース、同じリズム、同じストライドで障害に向かうことによって始めて、馬も人も踏み切りが読めるようになる。このことを実践すれば、良い方向に進むはずだという思いで、経路練習を 3 回行なった。

1 回目はまだ馬の動きも悪く、80cm くらいで行なったが、それでも 1 回止まった。人に、遠くから追い出すと止まるという意識がまだあり、全体的に駆歩が小さくなり、さらに普

通なら遠くから飛ばす障害を無駄に 1 歩入れようとして止まった。だが、他の部分では遠くからでもよく飛んでいて、北日学のような止まり方をするのではなく、ただ人間がビビり過ぎているだけで、同じ失敗さえしなければ大丈夫なんだと自分に言い聞かせた。

2 回目の練習では前回の反省を活かし、全体的に前に出し、迷ったときは思い切って遠くから飛ばせるようにした。特に回転してすぐの障害は回転で詰まらせてしまうことが多いので、回転で前に出すようにした。この試みは見事に成功し、良いイメージを作ることが出来た。

3 回目は、2 回目で得た良いイメージで 110cm のミニコースを廻った。この頃には馬の動きも飛びもだいぶよくなっていた。この練習で人馬とも確実に自信をつけることが出来た。これで大丈夫だと思った。

野外の練習は、昔の全日学の耐久のビデオを何度も見て、出来る限りのパターンを練習した。馴致できない馬事公苑のコースにおいて、下見をしてルートを考える時の判断材料として、出来るだけ同じようなタイプの障害を経験することが大いに役に立つ。昨年作ったコフィンに加えて今年は、アローヘッドや水濺もつくり、バンケットを利用した即席のスキージャンプなど、一通りのものは練習できた。特に、幅の狭い障害対策として、レンガやめがね橋のかたわれを馬場にボンとおいて飛ばせたりした。こういった、オープンスペースにあるトリッキーなものや馬が見そうな障害、つまり馬が逃げそうな障害に向かうときは、走らせて向かうと失敗すると思ったほうが良い。実際に北日学での反抗がこれなのだが、馬がアプローチ中に不安を感じたときに、ちょっとでもコントロールから外れていたり、左右の抑えが甘かったりすると容易に真直性が失われ、反抗につながる。こういった障害は、人間は体を起こし、アプローチで走らせずに真直ぐにし、左右の逃げ場をふさぐことで、馬は観念し飛ぶことを決心する。練習において、こういった障害は最初、左右にバーなどを立てかけて逃げ場をふさぐことはとても有効だと思う。

馬事公苑では動きもよく、いつの間にここまで良くなったのだろうと、自分でも驚いていた。北日学が終わってからも、なかなか腰の状態が良くならず、もう治らないんじゃないかと思っていた。だから、全日学で結果が出なければ離職させなければならないと考えていた。

調教審査では、準備運動で馬のテンションがどんどんあがり、バタバタし始めたので、出番前は輪乗りで低伸させて、よくリラックスさせるようにして臨んだ。

耐久審査では、いくつかの障害でどのルートに行くべきか最後まで迷った。ただ、今までまだ 1 度として耐久審査で無反抗で帰って来た事もなく、賭けに出れるような身分ではないし、今回は団体成績もかかっていて、「多分」ではなく「絶対」を選ぶべきだと思い、結局ちょっとでも怪しい障害は全てロングルートを選んだり、巻き乗りを入れた。実際には、ストレートでも充分いけたという障害もあったが、判断としては間違っていなかったと思う。無反抗で帰ってくれば人賞圏内には入れると思っていたし、それで充分だった。登りの障害は前に出して、下りの障害は突っ込ませないように、用心すべき障害はしっか

り手の内に入れて、走らせるべきところは思いっきり走らせて、全く危なげのないほぼ完璧な走行が出来たと思う。最後にしてようやく、耐久を無反抗で帰ってくることが出来た。

ここまでくれば余力は大丈夫。この馬は耐久の後が一番調子がいい。練習通りにやれば、まずひどい事にはならないだろう、という思いで臨んだ。3番から4番への直線、少し長い5歩のライン、3番の垂直を大きく飛ばせたくて回転から元気良く向かったが、逆に近くに入ってしまった、とっさの判断で6歩入れることにした。ただ、もうこのときには前に出して5歩で飛ばしても大丈夫だったのではないかと思うが、そうする勇氣はなかった。8番のオクサーは、遠くから飛ばそうと前に出したが、届かなかった。しまったと思ったが、もう何もすることもないので、馬に任せてじっとしていた。馬は最後の二歩を上手く後肢でブレーキをかけて、歩幅を調節して飛んだ。野外障害を飛ぶときによくやるが、畜大の馬みたいにこれを馬場の障害でもやってくれととても助かる。普段から、出来るだけ障害前でハミを使わないことである。障害前では馬の自主性を尊重しなければならない。飛ぶのは馬であって、人間ではない。

いくつか当てた音がしたので落下があると思ったが、最後のトリプルをきれいに抜けてホッとしたところで拍手が聞こえてきたので、電光掲示板を見てみると満点であった。最後の試合を満点で帰ってくるのは、とても気持ちがいいものである。

もうこの辺で終わりにしよう。最後に一言。

ゲネ、跳ぶのは障害だけにしておけよ。

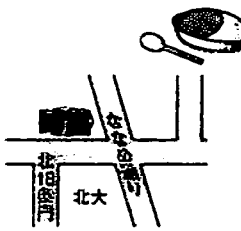
人を落としちゃだめだぞ。

自分も怪我しないように気をつけろよ。

もう大人なんだから。

4年間どうもありがとう。

美味しさ発見



新しくオシャレになった
時の館で、一時を
すごしてみませんか。

カレーライス
焼肉丼
ソフトクリーム
各種あります。

営業：11:00~24:00
N18 W7
TEL 726-0158

カレーから明日を見つめる
自由人舎 時館

北鳳(ヤスノインディアン)



駒 サラ 鹿毛

平成8年4月29日生

北海道三石郡三石町産

父 ダイヤモンドショール

母 ヒカリハード

平成13年12月2日入厩

調教報告

木村 滋之

僕には馬乗りとして致命的に欠けていたものがある。それはうまく言葉で表せないが、“負けん気の強さ”、“馬に対して妥協しない姿勢”、“厳しさ”のようなものであると言ったらわかりいただけるだろうか。要するに僕は“へなちょこ”な人間であり、そのために今まで乗ってきた馬で何度となく失敗を繰り返してきた。

TOTOさんのホームページに“Last speaker should be the rider.”という一文が載っていたが、馬に対して騎手の立場をはっきりと示すことはとても重要なことである。馬や犬のように群れで行動していた動物には特に、上下関係という概念がある。そして、下の立場のものは上の立場のものにスキがあれば、立場を逆転させることを狙っているものである。犬の社会では、ボスが先頭を歩く。ちゃんと躰のされていない犬は、散歩のときに人の前を歩こうとするが、これは自分の立場が上であることを示しているもので、さらに人が何も言わずに前を歩かせているということは、犬に対する服従を意味する。これと同じことが馬と人間の間にも起こりうるのである。人間が無意識にでもどこか馬に対して下手に出るようなところがあると、馬と人との上下関係は崩れ、いざというときに人の言う事をきかない馬になってしまう。新馬調教においては、体を作り、扶助を教えるとともに、この上下関係を揺るぎのないものにしておくことが大切である。

ここで、僕があえて“上下関係”という言葉を使っているのは、“アメとムチ”の“ムチ”の方に焦点を当てているからで、本来は“信頼関係”という言葉を使う方が正しいのかもしれない。馬の調教においては誉めることが最も重要であり、そこから信頼関係が生まれてくるのである。最近では少なくなってきたように思えるが、エサをやる調教方法は馬を誉めながら調教していくという概念の現れであり、よく誉めながら地道に育てた馬は長く

活躍していけると思う。ただ僕が言いたいのは、上下関係が崩れてしまつては替めることも出来なくなってしまうということだ。見下した者からアメをもらつても何のありがたみも感じないものだ。

馬の社会において上位にいる馬は、やはり人間に対してもなかなか立場を譲らないところがあるように思う。放牧をしたときに、他の馬を蹴散らしながら飼いを食べるような馬だ。僕が今まで乗ってきた中では、ブルー・リッチ・ヤスがそれにあたる。こういうプライドの高い馬は一度人間に反抗する術を覚えると、なかなか改めようとしない。最初に反抗する原因は人間の過失によることが多いが、そこで調子に乗せると厄介である。挙句の果てにはなんでもなようなところで反抗を見せるようになる。ヤスも中野善弘さんのクリニックでしばいていなかったら、オクサーを飛ばない馬になっていただろうし、これからもそういう危険性がある。ただし、ここで勘違いしてほしくないのは、馬をしばく事で解決するわけではないということだ。だいたい馬が障害を飛ばなくなるのは、馬の口を引っ張ったり、突っ込ませて飛ばせたりして、人間の過失によって馬が障害を飛ばすことを嫌だと思うか、飛ぶ自信をなくしてしまうからである。常に馬に気持ちよく障害を飛ばせる努力をしなければ、いくらしばいても無駄である。

もう一つ厄介なのはハミにかかって興奮しやすい馬である。北大にはこういう類の馬が多いように思えるが、僕はレジェンド・ウッドバイン・ヤスに乗って、同じ失敗を繰り返してきた。こういう馬は、フラットワークで口向きをしっかりと作っておけばいいのだが、そう簡単にはいかない。日々、興奮させないようにとなだめるように乗っていると、どうしても人間が下手に出てしまい、乗り方もへなちょこになってしまう。馬を抑えようとしても、腰が引けて中途半端に引っ張りつづけるから、馬はさらに興奮する悪循環である。こういう馬こそ文字通りどっしりと構えて、思い切った乗り方をしなければならないのだが、僕のようなへなちょこな人間は気持ちに余裕がなくなり、必死になってしまうのである。人間が必死になってしまつては馬をおさめることは出来ない。そういう人間がそういう馬に乗るときは、誰か信頼できる人に練習を見てもらうのがいいと思う。誰かに見てもらう事で、自分の心に余裕ができ、思い切った乗り方ができるものである。

ちょっと話はそれるが、各個練習の多い今の練習では、日々の下級生の練習はその日乗る馬のチーフに委ねられるわけであるが、チーフはその責任を十分認識して指導にあたっているだろうか？モチベーションの持ちにくい下級生にとっては、日々の練習が有意義なものでなければ、作業やバイトなどでつらい思いをしてまで馬術部にいる意味などないのである。自分の練習が、次の日も暗いうちから布団から這い出して練習に行くだけのエネルギーを下級生に与えるものになっているか、チーフはよく考えなくてはならない。一番良くないのは、上級生がイライラしながら教え、下級生が出来ないことをただ怒鳴るだけで、何の助けも出してやらず、挙句の果てにはそのまま下ろしてしまうような練習。下級生がその練習から得るものは、ただ自分が下手くそだという事実だけである。その屈辱をバネに換えて、次は頑張るぞ！と思えるような下級生ばかりではないはずだ。本当に自分

の指導が下級生にとって意味のあるものだったかどうか、馬の調教と同じように日々反省すべきであると思う。これは、僕自身が現役のときに出来ていなかったことなので、せめてもの罪滅ぼしにと書いているわけであるが。

話を戻すが、僕が3年生の時にウッドバインで権利を取れたのは、当時主将だった山口兄に練習を見てもらったおかげである。山口兄は馬に対して絶対に妥協を許さない人で、時にはやりすぎではないかと思うほど強く馬にあたることもあったが、それでも馬がふてくされなかったのはそれ以上によく馬を営めることが出来ていたからだと思う。しっかりと座り込んで馬を抑えることの出来なかった僕は、ウッドバインで駆足すら満足に出来ずひどい状態だった。そんな僕を見兼ねてか、山口兄は北日前の練習を数回と、二走の準備運動を見てくれた。そのおかげで、北日学では思い切った走行が出来たのだ。それとは対照的に、全日学では準備馬場で人馬ともにテンパリ、むちゃくちゃな走行をして失権になった。

これは僕の勝手な思い込みで、何の根拠もないことだが、北大馬術部ではここ何年も最上級生の中でも一番実力のあるはずの人が権利を取れていない。一貫した理由があるとは言わないが、まわりを引っ張っていく立場とは、最も精神的なサポートを受けづらい孤独な立場でもあるのではないだろうか。

ヤスについて具体的なことを少し。この馬は、尾崎兄が新馬戦で活躍したことで分かるように、類まれな才能をもっている。最近、二走馬が育っていない中で久しぶりに期待できる器である。そんな馬に一年間乗せていただいて、ほとんど調教を進めることが出来なかったことが僕は悔しい。怪我をして追い詰められたゲネシスとは対照的に、ヤスに対しては妙な自信があり、自分の乗り方を顧みることもしなければ、尾崎兄に積極的に相談することもしなかった。今まで乗ってきた馬で何度となく挫折を味わっているはずなのに、それを真正面から受け止めてこなかったのだ。つくづく僕は自分に対して甘い人間だと思う。

ヤスは、バスキュールが悪く、背を張って飛びいわゆる“蠟燭飛び”の気があり、幅が飛べないためオクサーに対してコンプレックスを持っていたが、7月の公認大会で失権するまでは止まることを知らず、突っ込んでもバカッ飛びをして何とかやり過ごしてきた。公認大会では初めてLAに出場したが、終盤のトリプルの中に一間歩の連続したオクサーがあり、その一間歩が届かず2反失権となった。一つ目のオクサーを上に乗るためにどうしても次の一歩が小さくなってしまふのだ。そのときはどうして止まったのか理解できず、しばらく事もしなかった。帰ってから、一間歩の障害間にバーを置き飛び方を理解させるように練習したが、もう後の祭りであった。一度試合で止まるということを実感したら、わざわざ苦労してオクサーを飛ぶことがバカらしくなったのだろう。北日学の余力では、1番で1拒止、3番で2拒止、共にオクサーで失権となった。きっかけは公認大会の失権だが、それまでにオクサーを気持ちよく飛ばせる努力をしてこなかったことに問題がある。障害を飛んでいけばいいという素人考えで、安心していただけ。経路走行中にハミにかかっていくため障害に突っ込ませてしまい、そのたびに馬は障害に対する不安を増長させていっ

たはずである。中野さんのクリニックでは、連続の中のオクサーを、遠目から飛ばせることで、体を大きく使わせて飛ばせるようにした。そのときに、踏み切り前からハミをはずしてもいいから絶対にハミを引っ張らないことで、馬は頸を使えるようになる。そうやって十分体を伸ばして自由に飛越させる事で、オクサーに対するコンプレックスを解消することを教わった。興味のある方は実際に2003年9月に行なわれたクリニックの2日目のビデオを見てもらえば、よく分かると思う。このクリニックのおかげで、何とか最悪の事態は免れることが出来た。

野外に関してだけは、僕が一番力を入れた部分でもあり、成果はあったと思う。シーズン中に3回帯蓄大に行かせてもらった。3回目は9月で、北日学幹事長だった帯蓄大の小倉君の企画した“北日本総合強化合宿”に便乗して一頭で行かせてもらった。初日は一頭で馴致していたのだが、新しく作られていた前面と上面がすかしになっていて少しボリュームのあるオクサーを頑として飛ばなかった。何とか一回勢いで無理やり飛ばせたのだが、そのときに肢をぶつけてしまいまた飛ばなくなってしまったので、その障害はきっぱりとあきらめ、次へ進んだ。次の日に合同練習に混じり、柏海の後ろにつけさせてもらったが、前日の出来事がウソのように、すんなりと飛んでくれた。僕が一年生の頃は、野外の練習という何頭も連なってやっていたものだが、前の馬を追って必要以上に興奮して突っ走ってしまうのと、時間がかかりすぎるという点に難があり、最近では1頭で行くケースが増えてきた。しかしそれも、前述したようなケースもあり、また一頭ずつバラバラになってしまうことで、客観的に見てくれる人がいなくなることもあり、デメリットも大きい。どうする方法で行うにしても、馴致の前にはしっかりと下見をしてチーフ同士でよく話し合い、綿密な計画を立てることが大切である。

最後に全く関係ない話だが、僕は昔から馬術書や調教報告などを積極的に読み、多くのことを学んできたという自負があったが、今思えばまだまだ甘かったという気がする。一度読んだら分かったつもりでいたが、今読み返してみると、現役の頃は気にも留めなかった文にとっても重要なヒントが隠されていて、驚くことがある。重要だと思うものは、何度でも読み返した方がいい。

ミュージーラーの「乗馬教本」やパールマンの「障害馬術」などの古典的なものや、最近では乗馬ライフでも有名な指導者による連載などが充実してきているし、教材には事欠かない。ただ、北大生として一番読むべきものはやはり「調教報告」。ゲネシスのところでも書いていて、しつこいと思われるかもしれないが、これだけは強調させてもらう。なぜならば「調教報告」が、北大馬術部を実際に経験した人間によって、北大馬術部の現役部員のために書かれた文章であるからだ。正しいことが書かれているとは限らない。僕の書いた文などおかしい所だらけであろう。でも現役に必要なのは、自分の現状を少しでも前へ進めるための“きっかけ”であり、それは一般論的な正しい答えからではなく、同じような経験をつんできた人間の証言から得られる方が多いと思う。もちろん一般論が分かっていなければ話にならないので、他の教材も十分に活用すべきだが。

ひとつだけお勧めさせてもらおうとすれば、それは「今村馬術」である。あまり読まれないのであえてとり上げたのだが、ここに書かれている“自然馬術（イタリー式馬術）”は、決して特殊なものではなく、合理的で理想的な手段であると思う。ハミをいじらず、代わりに起伏のある野外での運動によって、馬は頭頸を伸ばし全身を大きく使って、落ち着いた運動が出来るようになり、バランスと筋力が自然と養われる。もちろん北大ではこんな調教は無理であるから他の方法を考えなくてはならないのだが、この本に書かれている障害調教における基本的なスタンスは理解すべきだと思う。

ここまで現役の為と思って偉そうにいろいろと書いてきたが、はっきり言ってほとんどはウソが書かれていると思った方がいい。他人の経験に基づいた言葉など、自分にとっては何の根拠もないものである。“百聞は一見にしかず”というように、自分の経験によって裏付けられて初めてその言葉は自分のものとなる。とにかく経験あるのみである。

馬と畑の有機的関係の確立を！

野菜の新しい生産と流通を模索する。

上田農園

上田正徳



〒003-0876 札幌市白石区東米里2072-1

TEL 011-874-3272

FAX 011-873-2307

CELLULAR 090-3-891-4988

ファームレストラン

うえだ

🐎サラマンダー🐎



駒 中半血 栗毛
昭和58年生
オーストラリア産
父 不詳
母 不詳
平成14年3月14日入厩

調教報告

武井 亮

サラマンダーはその高齢と飛越能力が権利馬としてやや劣るという点から代替わり直後は離厩候補でした。しかし、彼の素直で扱いやすい性格、多少重いところはあるものの癖のない乗りやすさ、自由手綱でも安定してコンビネーションを飛ぶこと、そして下級生が乗っても100cmクラスなら満点でかえってくることなどから、一年間練習馬として残ることになり、引き続き僕がチーフに就きました。

彼は競馬学校の先生が調教した馬なので、僕がこの馬に教えたことは何もありませんでした。僕がこの馬を担当して心がけてきたことは、1)馬体の維持、2)上記の彼の長所を維持すること、3)下級生を効果的に成長させること、の三つでした。

まず 1)についてですが、基本的に彼は体が丈夫で結果として一年間フルで働いてくれました。ただ彼は、背中肉がなく、一定のコンタクトを与えることができないとすぐに頭を上げてしまうため下級生が乗ると背中をもろにたたいてしまうため背中を痛めることを心配しなくてはなりません。そのため冬が終わるくらいまでは、まず自分が準備運動をしてハミを受け入れさせてから下級生を乗せるという方法をとっていましたが、この方法だと乗り換わりの最初しか効果がなく、別の方法を考えなくてはなりません。そこで春からはゴーグを使うことにしました。この道具により前に出づらくなるという面はありましたが、下級生が乗っても頭を上げて背中をはることは無くなり背中への負担も減ったと思います。

次に 2)についてですが、乗りやすさ、コンビネーションに関しては僕が何をするでもなく維持することができました。ただ彼は乗り手によって気を抜くことがあるので、下級生には常に元氣よく動かして気を抜かせないように注意しました。障害についてですが、

昨年は 100cm クラスでは一度も失権したことが無くほとんど満点でした。が、今年はシーズン後半から満点も少なくなり、何度かは失権することもありました。これはシーズンの中盤から僕が競技馬に集中するためと、3)のこともありますが、最上級生が 2 人しかいなくなる来年を見据えて下級生に自主的に考えさせ成長してくれればという思いから大部分を下級生に任せ、あまり口をはさまないようにしていたためにあると思います。彼は体が小さくばねがあるわけでもないので、障害の試合では特に元気よく動かす必要がありました。しかし、普段の運動から前を持たず集中して動かしていなかったため、いざ障害になっても大きく動かすことができず、加えて障害の試合になれない下級生はどうしても遅いペースで廻ってこようとするため体の小さい彼は飛び切れなかったり、苦しくなって走ったりしてしまいました。また馬がペースを作るとそれが速いと感じる下級生は脚を使うのをやめてしまうため、良い走行中にとつぜん拒止することもありました。やはり、僕がもっと口をはさんで入れば良かったと思います。特に障害では、下級生に(たとえその人が 1 ヶ月後には馬を持つことになる人でも)下を見ないことから、経路どり、ペース、脚を使うことなど基本的なことしつつこく丁寧に教えるべきでした。特にペースに関しては下級生は速いペースに慣れていないため、できるだけ抑えていこうとするので上級生はこの点に気を付けてあげるべきだと思います。今後も下級生の技術的ブレイクスルーを期待してこの方法をとる年が出てくるかもしれませんが、かなりの危険だと思います。(OB の方のなかにはそんなの当たり前だという人も多いと思いますが実際ぼくらはこの方法で下級生が成長してくれると信じていました。)少なくとも今回のケースでは、人も大して成長せず、馬にもかわいそうなことをしてしまったと思います。

ただ下級生に任せる前に 3 年目の前野に任せた時期がありました。この間の彼の成長はかなりのものだったと思います。実際彼も学んだ物は多いようでした。サラマンダーのようなできた馬は下級生よりもむしろ上級生の練習に使った方がいいのかもしれませんが。僕に関しても彼には色々な練習をさせてもらいました。サラマンダーがいなければ僕はきつとレジェにも乗ることができなかったと思います。僕の乗馬の基礎は全部がサラマンダーです。本当にありがとう。現役の方々も彼への感謝を忘れないで、かわいがってあげてね。

有限 菅原写真商会

パスポート写真

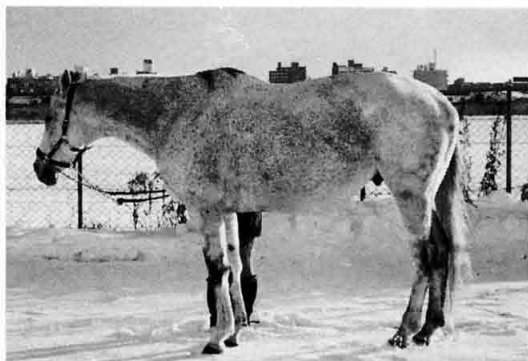
カメラ・カラープリント特急仕上

3 分間写真

各種証明写真

北22条西4丁目 ☎ 716-2662

🐎エルグレイ🐎



調教報告

駒 サラ 芦毛

平成元年6月10日生

北海道三石郡三石町産

父 メジロエスパーダ

母 スナークリーゼン

平成14年9月16日入厩

高島 渉

エルグレイは元々M級クラスで活躍していた馬であり、いまさら僕がどうこうするという事ではなく、いかに僕が上手く乗れるかということが問題でした。なのでこの馬にある程度乗れるようになってから感じたことを書きたいと思います。

つかまっているだけで飛ぶと言われましたがつかまっているだけでは飛ばないのも事実です。ただ、ある程度馬を起こして待っていれば必ず飛んでくれるはずですが。またこの馬はとてもストライドが大きいので、ほかの馬と同じ歩数で行こうとすると多少窮屈になります。特にショートコースだと確実に窮屈になるので、1歩少なくしたほうが馬が楽な姿勢で飛べると思います。やはり窮屈な姿勢で飛ぶと落下につながるので、1歩少なくして多少遠くから行かせたほうがリスクは少ないはずですが。(僕は全日の2走目の最終ラインを4歩で行けばよかったと今でも後悔しています。だったら5落で済んだかも・・・。)

後は普段の練習で人がどれだけ上手になれるかです。この馬は体も柔軟だし、FWも僕らのレベルでできることなら何でもできるはずなので、もしできなかったら人に原因があると言って99%間違いありません。ただちょっと上手くなってくると、自己満足な練習に陥ることがあると思います。無駄に馬場運動をやってみたりしたくなるものです。でも、こういう時には自分が行っている運動がどういった意味を持っているかをもう1度考え、必要なか不必要なのかを見極めて、自分に酔わないようにしましょう。

この馬は肺に持病がありうちに来たわけで、常に体調に気をつけて管理してあげてください。そうすればたぶん最後には人を助けてくれるはずですが。

最後に、メインフィールズの小野さんをはじめたくさんの人にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。特に前田くんにはわがままばかり言ってごめんなさい。これからも可愛がってあげてね。

🐎北翔(シンコウブラウン)🐎



騾 サラ 鹿毛
平成2年3月6日生
北海道浦河郡浦河町産
父 クライムカイザー
母 アーマゲイ
平成15年1月19日入厩

調教報告

前野 伸策

北翔は1月に浦河高校から入厩してきて、OBの中田兄の指導のもと乗り始めました。右後の腱を切っておりハ行しているため運動はあまり多くなりすぎないようにしました。ハ行しているために腰に負担がかかりやすいので常歩で腰を十分にほぐしてやる必要がありました。輪乗りで巻乗りを入れていき外方の確認、内方後肢の踏み込みを意識して乗りました。できれば反対姿勢の輪乗りなどをいければより効果的だと思いましたが自分の技量から考えてやりませんでした。少し肩を張る癖があるので内方の拳を引き込まない事、先行してしまわないこと、外方の壁をしっかり意識するようにしました。斜め横足と直行進を繰り返すことで肩を張りにくくなります。速歩、駈歩でも輪乗り、巻乗りをやって内方後肢を踏み込ませるようにし、馬が起きてくる様にイメージして乗りました。また、リズム良くやること、かかりやすいのもつところはもってしっかり楽なところをつくってやること、前進氣勢が良すぎるからといって前が強くなり動けなくならないようにすること(この馬はハ行しているのに二走レベルの障害を飛べるのはこの馬のすばらしい前進氣勢による所がかなり大きいのでこの前進氣勢がなくならないように今後もやっていかなければならないと思います)等を特に注意して乗りました。

障害に関しては3歩前までにしっかりとできるようにと思って練習しました。前進氣勢を作る、回転でしっかり馬を起こしてくる、アプローチに入ったら脚をつけて体を起こして待つ、障害後背中をたたかないようにしすぐ起こしていく。特に右回転は後ろ足が踏み込みつらいのでしっかり内方脚を使うようにしました。経路ではさらにリズム良く一定のペースで回ってこられるように意識しました。

試合は半沢杯から動き出すつもりでしたが、雪が解けてから急にペースを上げすぎてし

まい、腰を痛めてしまいました。この怪我が長引き新緑大会も出ることができませんでした。春自馬では 80 c m クラスにエントリーしました。自分の技術不足のせいで馬をまともにコントロールできていない状態だったことが主な理由で、とにかくいいペースで回ってくることを意識して臨みました。その後は北星乗馬クラブで行われた札幌市民大会の L B、公認大会ではスピハン MC (115 c m) にエントリーしました。スピハンでは後半少し走られたが大体イメージどおりに走行することができました。そして北日へと進みました。春自馬からの過密スケジュールのせいでかなり疲れていたのでフレンドリーはパスして本番前日は軽めの調整にしました。

<一走目>

準備馬場でやはりかなり疲れていたのだろうか公認大会のような前身氣勢がなく、脚を使えば前に出るという反応がいまいちでした。障害をやり始めても乗っていていつものような感じがなかった。最後あたりになってよくはなってきたがいつもの感じにまでもっていくことができずに本番に入ってしまった。経路では元気よくやることを心がけ、自分のできることを確実にやろうという気で臨みました。5 番障害のオクサーであおられてしまい次のダブルに向かえずに一反、そこでリズムを崩してしまったのと馬が怖くなってしまったのだと思う。ボリュームのある 7 番障害の三段オクサーで二反して失権した。北日に入るまでほとんど反抗されたことがなく、いざそのときになってしっかりとした対応ができなかったと思う。

<二走目>

オープンで参加した。準備運動では前日に比べて前に出る感じはあったが本来の感じにはまだ届かなかったので、脚を使ったら前に出るという反応をしっかりと確認して臨んだがダブルの A を左によれながら飛んで、人が B の袖にぶつかって落馬、失権となった。

最後に技術面だけでなく精神面でも根気よく指導してくださいました中田さん、米家さん本当にありがとうございました。

赤ひげ

で

よくコンパをやります。次のコンパが楽しみです。

札幌市北区北 2 2 条西 5 丁目 2 - 5

T E L 7 0 7 - 5 0 7 6

🐎シーベスト🐎



騾 サラ 黒鹿毛
平成7年6月5日生
北海道浦河郡浦河町産
父 タマモクロス
母 シークイン
平成15年8月25日入厩

入厩報告

前田 晋也

シーベストは8月25日に白井牧場からやってきました。

競走馬時代には1勝もできなかった彼ですが、7歳とまだ若いのでその能力を最大限に発揮できるようにがんばりたいと思います。

🐎パワフルショット🐎



騾 サラ 青毛
平成9年4月21日生
北海道三石郡三石町産
父 ブライアンズタイム
母 ゴールデンリッカ
平成15年11月15日入厩

入厩報告

小阪 梨奈

11月15日。昭和30年卒の鎌田さんのご紹介で、恵庭のすずらん乗馬倶楽部より入厩しました。競走馬としては未勝利でしたが、乗馬として活躍してくれることを期待したいと思います。

今は木村兄に調教をお願いしています。

北鈴(スズロード)



騾 サラ 鹿毛

平成4年3月31日生

北海道沙流郡門別町産

父 スズマッハ

母 メイワレディ

平成8年7月20日入厩

平成15年12月9日離厩

調教報告

寺島 良

年明けから乗り変わって調教してきました。神経質なところがあったなるべくそれを出さないように馬の気分を悪くしないように心掛けました。トモがあまり入ってこなくて駆歩のとき後肢がついてこなくてリズムの悪い駆歩になってしまうので準備運動では横運動と小さめの巻のりをなるべくやって後肢をよく動かすようにした。障害では神経質などところがあるのでぜったい無理はさせず馬にどんどん自信を付けさせるように低いのを多めにやった。練習での反抗はぜったいさせなかった。そして常歩飛越、放手綱でふみきりの横木なしの速歩駆歩飛越をやって人が飛ばせるのではなく馬が自分で飛ぶようにしていった。経路では、右肩を張るくせがありそのまま右方向へ回転した後きられることがある感じだったのであぶなそうな左回転は馬の頭を真っ直ぐから外に向けるくらいの気持ちで右手綱を持って回転した。これはけっこう有効だったと思う。LAは無反抗で確実に帰ってくる馬になったが、結局最後はパトリック同様、僕の馬体管理不足のため最後までいけなかった。本当にごめんなさい。

離厩報告

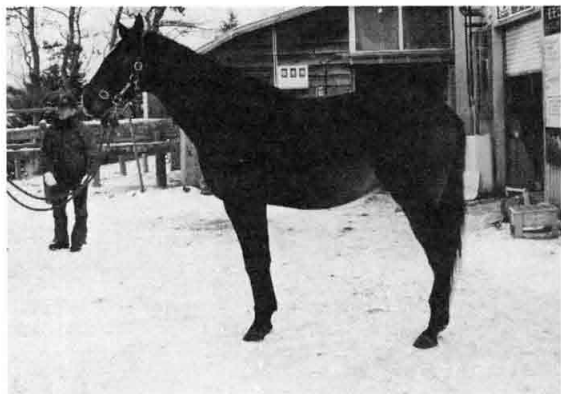
小阪 梨奈

12月9日に北陽（ドリームグリーン）と一緒にモモセライディングファームに行きました。

北日学からの跛行が治らないことなどの事情から離厩することになりました。

スズとドリームの2頭ともモモセライディングファームでかわいがってもらっていると思います。

北陽(ドリームグリーン)



調教報告

駒 ア・ア 鹿毛
平成8年5月8日生
青森県八戸市産
父 カツラギセンブー
母 ドリームグリーン
平成10年7月20日入厩
平成15年12月9日離厩

高島 渉

この馬に1年間騎乗した中で、気付いたこと、気を付けたことをいくつか書きたいと思っています。

ドリームは馬体面では特に問題もなく管理しやすい馬だったと思います。ただ2歳のときに入厩してかわいがられてきたせいか、人をなめるところがあり、普段の手入れ・引き運動などでしっかり接しないと、どんどんわがままになっていくと思います。はっきり言ってこの馬に乗る中で最も重要なのはこの部分です。やる気さえ出せば、体高も大きいので余力審査の高さも十分こなせます。

ではこの点について僕が気を付けていたことを書きます。

まず普段の接し方はさっきも書いたとおりわがままを許さないということ、特に引き運動でしっかりと歩かせること、人が止まると馬も止まるようにしてあるので、まず引き運動で人へ集中するようにすること。手入れでもうるさいようならしっかり怒ること。あまり根に持つ性格ではないので怒っても大丈夫だと思います、たまに逆ギレしてくることがあるので、そういう時は絶対に人が上だと分からせること。

普段の騎乗面については、初歩的なことを繰り返し馬の集中力を高めていくようにしました。まず発進・停止の繰り返し。次に巻き乗りで内方脚と外方脚の区別をさせる、この時内方の後ろ脚がお腹の下に入ってくるようにすること。そして詰め伸ばしで脚反応の確認、というような感じで運動を組み立てていました。これができないのであれば、できるまで繰り返したほうがよいと思います。もう1点、肩から逃げる癖のある馬なので、輪乗り、巻き乗りをする時はそこに十分に注意すること。外方のコンタクトは多少きつくらいで良いと思います。

他の馬場運動ですが特別なことをしなくても、馬場では確実に上位に食い込めるので、変にゴチャゴチャいじらないほうが良いと思います。馬を動かすことを意識すれば十分な結果が得られるはずです。

障害の練習についてですが、速歩のコンビネーションを中心にやっていましたが、バウンスは馬が詰まって飛ぶのであまりよくない気がします。1歩・1歩とか1歩・2歩などオーソドックスなもので人が十分練習すべきだと思います。時々自由手綱でやるのも馬が体を使って跳ぶので効果的でしょう。駈歩飛越でも3歩から7歩くらいの間歩で直線とか鈍角とか簡単な練習を繰り返せば十分だと思います。とにかく元気良く動かすこと、そうすれば不思議と踏み切りが合います。

実際の試合では、いつもと違って多少かかりぎみになるので、やはり発進と停止を繰り返すことから始めました。しつこいくらいやってちょうど良いくらいだと思います。新緑大会のLBの時は、拳を控えただけで停止するほどでした。無反抗で帰ってきたのはこの時だけなので、やはりしつこくやるべきでしょう。準備馬場では飛越回数は少なめ、高さも試合の高さマイナス10センチまでしかやりませんでした。これは僕の好みなのでどうすれば1番良いのかは分かりません。

経路走行では当たり前ですが「元気良く、でも走られない」ペースを心がけると良いと思います。が僕の場合走られぎみの走行が多かったです。また反抗されるんじゃないかと思うとどうしてもいけいけになってしまいました。結局はそこまで信用できない、という意識があったわけです。この点については、色々と意見が分かれるところだと思いますがドリーム of の性格を考慮すれば、全幅の信頼を置いて馬に任せるというわけにはいかない気がします。

野外に関しては僕が落馬して耐久審査の記憶をなくしたのでよく分かりません。ただ、乾潦・コフィンなど穴を掘ったような障害は大嫌いなので十分な練習が必要だと思います。

最後に結局権利は取れなかったけど、一応余力も帰ってきたし「もしかしたら何とかかなるかも」レベルにはなったと思います。最近少ない純北大産なので何とかトルネードの後を継いで欲しいと思います。お世話になったたくさんの方々どうもありがとうございました。

離厩報告

橋場 拓冬

ドリームは12月9日にスズロードとともにモモセライディングファームへ離厩しました。ドリームは下級生でも乗りやすく、加えてとてもかわいいので部員に人気がありました。また、北日学でも調教審査で2002年・2003年にそれぞれ1位・2位をとるなど活躍していたのですが、毎年北日学後にじんましんが発生し、今年は特にひどく騎乗できない日が長く続きました。原因は乾草・季節が考えられますが、今後も発生すると思われる、環境を

一新したほうがよいと部員で決めました。モモセで新しい日々を楽しく過ごすことを祈っています。

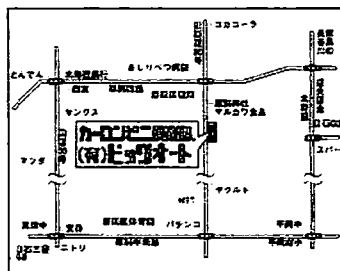
最後に、中田兄をはじめドリームのことをみてくださった O B・獣医師の方々に御礼申し上げます。



カーコンピニ倶楽部

愛車のキズ・ヘコミを

最短45分〜で直しちゃおう!



カーコンピニ倶楽部

(有)ビッグオート

Tel.011-888-6888

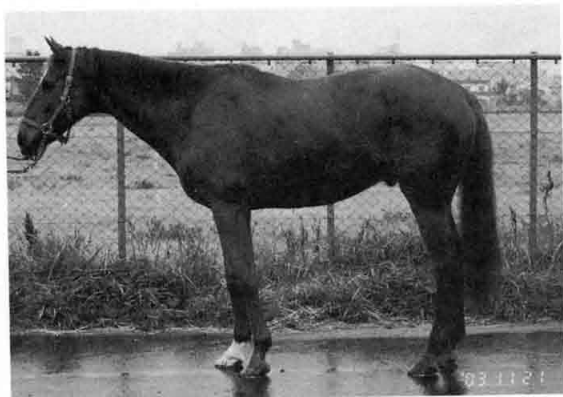
Fax.011-886-2042

〒004-0871 札幌市清田区平岡2条2丁目1番55号

営業時間：8:30〜20:00 休業日：日曜日・祝日（日・祝受付のみ可）



リッチステート



騾 サラ 栗毛
昭和59年9月1日生
オーストラリア産
父 不詳
母 不詳
平成12年5月28日入厩
平成15年11月22日離厩

調教報告

竹田 敏宏

リッチに僕は2年間乗ることになったが、2年目を迎えるにあたって課題は1つだった。去年の北日学の余力で失権したように、北日学に向けて120cmのコースを満足に回ってこれるようにすることだった。北大のほとんどすべての人馬にいえることでもあるが、120cmの経路を満足に走行することが現時点ではかなり難しい。仮に経路を回れたとしても、その内容はただ経路を回っただけになっていて、理想とする経路走行からは程遠い。しかしながらこれが出来ないことには総合にしても二走にしても、全日学への権利は夢のまた夢である。

そんなわけで120cmの経路走行を目指すに当たって、自分なりに冬までにやっておかなければいけないことを考えることから始めた。当時のリッチの状態としては、身体的には、まだまだ余裕を持って障害を飛越することは出来るが、馬が障害に対して不信感を持っていた。騎手が踏み切りを合わせられなければ反抗するし、そうでなくても何かあれば障害を切ろうとしたり、たいした障害でもないのに走ったりしていた。この3点を重点的に補えるように練習を組み立てた。

①障害飛越の踏切についてであるが、もともと騎手が踏み切りを合わせないといけない馬であったが、このころは本当にピッタリ合わないとかかなり躊躇していたように思う。

②障害をきろうとするのは、やはり馬がベテランになっていて、少しでも隙を見せると突然障害を拒避するようになった。対処法としては、出来るだけ回転をスムーズにすること、ハミのかかった状態で経路走行をすること（特に巻き込ませた状態では絶対に運動させないこと）を考えていたが、これがかなり難しかった。

③障害を走ることに関しては、もともとうまく折り合いをつけないと走りはしていたがこ

のころは特にオクサー障害に自信を持っていなかったように思う。

運動としては、今までのことは忘れるようにして新馬調教を手本として組み立てていった。コンビネーションでは、なるべく手綱を持たないようにし、自由飛越に近い状態で自分から踏み切っていけるようにしていった。これによって馬が踏み切りを判断するようになったわけではなかったが、少なくとも踏み切りの幅は広がったように思う。また、それまで手綱を持った運動しかしておらず、障害飛越時に体を硬くしていたが、これも体を自由に使えるためか徐々に改善されていって、最終的にはかなり理想的なバスキュールで飛越できるようになった。

最初に経路を回ったのは OB 戦だった。100cm のコースではあったが、手の内に入れた中で、一定のペースで経路走行することが出来たと思う。ここまでは、駈歩飛越の練習は全くやっていなかった。フラットワークでは、きちんとハミを取った状態で運動すること（経路走行に入っても馬がもぐってこないようにするため）と、人のバランスに馬が正確に反応するようにすること（障害前のバランスバックと、障害後に前のめりになって馬が伸びないようにするため）の2点に特に気をつけていた。障害は先に書いたコンビネーションのみを繰り返したただだった。この後の課題としては、120cm のコースを回するためには、もっと馬を大きく動かした中でコントロールしていくことと、障害が高くなっても踏み切りを迷わないようにすること、障害を躊躇しないようにすることだった。

冬の間は、筋力の維持運動を中心に行ったが、もともと馬場運動も出来る馬なのでほとんど苦勞することなく運動を行うことができ、残りの時間は下級生の練習に使うようにした。ただ、どうしても馬体を丸めて運動しないとすぐに背中を張って腰を痛くしてしまう為に、なかなか満足のいく練習を下級生にさせられなかった。ゴメンナサイ。

春になり雪解けが始まると同時に障害飛越練習も開始した。OB 戦の頃にやっていたことをリッチが忘れていないかどうか、かなり心配していたが、それも取り越し苦勞だった。確かに、コンビネーションをやり始めて1週目は、障害飛越を始めるとイライラして、飛越後に走ったり飛び跳ねたりしていた。しかし、馬の嫌がること（先とび、背中をたたく、手綱を引っ張るなど基本的なこと）は絶対にしないように丁寧に騎乗し、また障害飛越の時間間隔をなるべく長く取って馬が落ち着いた状態でしか障害に向かわないようにしたところ、2週目に入ったときには、ほぼ秋と同じ状態で飛越できるようになった。

このときから半澤杯までは1ヶ月弱であったため、実践的な練習で、きっちりと手の内に入れた走行が出来ることを目指した。まず単独障害から始めて、きっちりと誘導することや飛越した後に馬体が伸びないようにすることを確認していった。このときに、今までやっていたフラットワークやコンビネーションが間違っていなかったことを確信した。誘導に関しては、内方手綱を引っ張らない（というよりも全く使わない）ようにさえしていれば、人のバランスを起こせば馬がのめることなくバランスバックできたし、障害についても、馬が自分勝手に突っ込んでいくのではなくて、あくまで人の手の内に入った状態で、自信を持って注意深く障害に向かってくれた。単独障害の飛越に関しては、もうやること

は何も無いと思うくらい、理想どおりに仕上がっていた。連続障害については、どうしても馬が次の障害を見て突っ走ってしまい、手前の障害を落下したり、無茶苦茶な踏み切りで飛越したりと、まだまだ不安が残る内容だった。コンビネーションで、2完歩、3完歩と完歩に変化をつけながら、高めの障害を飛越したり、なるべく馬を落ち着かせてアプローチしたりしたが、あまり効果は無かった。ただ、障害を低めにして、2つの障害間を思い通りの完歩で通過する練習をしてみると、はじめは突っかってなかなかうまくいかなかったが、徐々に障害間で人に集中してくれるようになり、さらには、連続障害の前後においても人の手の内に入ったままアプローチできるようになってきた。馬場において4・5個の障害飛越では120cmの高さでも人がミスさえしなければ理想に近い走行ができるようになった。(それでも少しでももぐらせてしまったりバランスバックを忘れると馬が伸びてしまって踏切が読めずに障害に突っ込んだり、走ったりはしていたのだが。)これで何も思い起こすことなく、シーズンを迎えられると思っていた矢先に、半澤杯直前の最後の経路走行でリッチを故障させてしまった。

具体的には、いつも障害飛越の前には同じ準備運動をしていたのだが、その日は、今年初めて経路を回るということもあって緊張していたせいか、普段と違って高い障害から駈足飛越を始めてしまった。箱番が新1年生ということもあり、指示通りの障害を作れなかったのだが、今のリッチの状態なら何も問題は無いだろうと軽い気持ちで最初から高い障害に向かった。1度目には、やはり馬が戸惑ってしまって、変な姿勢で飛越した。ここで、指示通りの障害に戻せばよかった。しかし、もう一度向かえば大丈夫だろうとまたしても軽い気持ちで向かったところ、同じように馬が戸惑い、障害直前で拒止(これが前年の秋季大会以降では初めての反抗だった)、横木を思い切り肢にぶつけてしまった。拒止した直後は痛がる様子は全くなくて、僕もリッチが肢をぶつけたことに気づいていなかったため、普段と同じペースに戻して準備運動を再開し、経路走行を行った。しかしながら経路に入ると、今までやってきたことが嘘のように、人には集中してくれず扶助が伝わらないし、障害に向かっても全く前進氣勢が感じられないし、そんな状態だから、5番障害だったと思うが、同じように拒止した。その後も、反抗を繰り返しながら何とか経路走行を終えたが、僕自身はどうしてリッチがこんな状態になってしまったのか悩むだけで、怪我のことには気づかなかった。しかし、その日の夕方に跛行していることがわかり、詳しく診てもらうと、股関節の筋を痛めていることと、右後肢に管骨瘤が再発していることがわかり、ここで初めて最初の反抗のときに怪我したことに気がついた(ビデオでみるとやはり右後肢に横木をぶつけていた)。今から考えると、この怪我で今シーズンのすべてが決まってしまった。このあとは、怪我の治療に専念して、骨瘤が完治したのは、6月の終りから7月のはじめであった。運動を再開してからは、とにかく身体が難しくなり、また脚反応も悪くなっていたが、どちらも基本に沿ったフラットワークをすることで改善されていった。障害飛越に関しては、低いものからはじめたのだが長期間のブランクを考えるとむしろ出来すぎなくらいで、問題は無いように思えた。しかし、障害が高くなると、障害に向かう

のを嫌がるしぐさをたまに見せるようになり、連続障害では馬がもぐってしまい、手前の障害を切る癖が悪化してしまった。もうこの時点で、僕の技術では防ぐことは出来なくなっていた。もう一度調整をやりなおしたいと思っても北日学までは半月ほどで、どうしようもなかった。北日学本番では、なんとか競技会の雰囲気、集中力や障害に対するやる気を見せてくれないかと勝手な期待をしていたのだが、結果は耐久審査で3反抗（3逃避）で失権、予想はしていたとはいえ、悔しい結果に終わった。

以上が2年目のリッチの調教報告です。本当に、この2年間何をしてきたのかと思うと、悔しくて悔しくてたまらない、というのが2年間を終えての正直な感想です。確かに僕の技術向上には、最高の先生となってくれましたが、リッチとのコンビでは何一つ結果を残すことが出来ませんでした。下級生の皆には、いろいろと馬体管理の無理を聞いてもらってありがとうございました。また、リッチを気にかけてくださった、市川部長、近藤喜十郎さん、札幌 OB の方々、ほんとうにありがとうございました。皆さんの一つ一つのアドバイスが、決まった指導者のいなかった僕たちコンビにとってはとてもありがたいものでした。特に、最初の冬に何気なく言われたことですが、「今はまだ、よくわからなくてもいいから横運動をやるようにしたほうがいい」・「手綱を放してみ、馬に自分で障害を飛ばせる」という2つのことは、その後の騎乗に際して本当に役立つものになってくれました。理由をつらつらと書いてもいいのですが、おそらくは大半の人はこれだけでわかると思うので省略します。

離厩報告

馬場 絃子

リッチステート号は高齢のため引退することとなり、11月22日に乗馬倶楽部メインフィールドの方へ離厩しました。

41年卒の近藤喜十郎さんからお預かりしてからおよそ3年間、北大馬術部に在籍していました。全日学への出場は果たせませんでしたが、彼は私たち部員に多くのことを教え、多大な貢献をしてくれたと思います。

足腰への負担がだいぶ重なっているようですが、あとはゆっくり養生して穏やかな余生を送ってほしいものです。

リッチ、ありがとう。お疲れ様でした。

🐎 ウッドバイン(ウッドバインパトリック) 🐎



騾 中半血 栗毛
平成3年生
ニュージーランド産
父 不詳
母 不詳
平成14年3月14日入厩
平成15年9月8日離厩

調教報告

寺島 良

シーズンに入ってから屈腱炎になってしまって何もすることができませんでした。この馬に限っては調教するというよりもいかに走らないようにするかということでした。経路になったら自分から走らすくらいの気持ちでいかないと手の内に入らなかったです。

この馬には調教という調教もできず、僕の馬体管理不足のせいでケガだけをさせてしまい本当にかわいそうなことをしました。本当にごめんなさい。

離厩報告

寺島 良

2年間北大にいましたが、脚部の不安で競技にもなかなか出られない状態になってしまったためメインフィールドに出されることになりました。130cmまではいけるということでOBの本城さんからもらいましたが、僕のせいでこんな状態にして本当に申し訳なかったです。メインフィールドでは何とか回復してまた元気に競技に出てくることを願っています。

我がポプラ並木横の青春

宮崎 健（昭和38年卒）

北大馬術部を卒業して40年もたったのですが、つい数年前のこのように思えます。

このところ仲間もみなリタイア年代を迎えています。私は新聞記者をしていたので、挨拶状をもらうと、あの事件のとき彼はあそこに赴任していたとか、あの政変劇に巻き込まれてなければこの人の人生も変わっていたらうになど、ほかの事は経年で思い出すのですが、馬術部仲間だけはポプラ並木横の青春時代そのままです。思い出はトシをとらないものです。

当時の馬術部の仲間とは今も交友が続いています。例えば今年2003年の夏。

農林省を退いてからパラグアイに畜産指導に行っている清水洋君は馬術部同期ですが、しょっちゅうメールで近況を知らせてきます。筆不精の私に代わって家内がメル友をつとめています。間髪をいれず返事が来るので家内が感心しています。私がよほどヒマなのだろうとか、ゴルフコンペで優勝したと聞くと、パラグアイではゴルフやるのが一ケタくらいなのだろうよとか毒づいていますが、彼とは馬術部のとき、馬房の周りにいるニワトリを2羽失敬して、彼の下宿で、彼の洗面器で、水炊きで食った仲です。私が後悔の念に耐えられず、最近自分のホームページで（興味があれば「ハヶ岳の東から」で検索してください）告白したところ、「そうだっけ」といっていますが、洗面器の灰汁（あく）か鶏の灰汁か分からない不安など忘れられるわけありません。

ハヶ岳の私の山小舎にこの夏、堀川芳男君が奥さんとやってきました。彼や志水一允君、現部長の市川瑞彦君も同期です。王決（全日本学生馬術王座決定戦。今の全日学）優勝に優勝した黄金時代というキャッチフレーズが今なお生きているのも困ったものですが、応援団が札幌駅頭で杖の先に犬の骸骨がついているものを振り回しながら例のパンカラストイルで踊って歓迎してくれたものです。

私はメンバーとその優勝旗を押し立てて、今でもあると思いますが狸小路の竹内呉服店と

三楽酒造札幌支店（現在のメルシャン）、その直営店（すすきのの飲み屋「三楽」。この前後の部員はよく知っているはず）にお礼報告に出かけました。当時ともに親戚がいて、馬術部の部報に大枚5万円も寄附してくれていたのです。お礼参りのつもりです。

お客さんがいる前で口上をいう我々をありがた迷惑そうな顔で眺めていたものです。

このころの部室の写真を見ると、壁に「風と共に去りぬ」のポスターがあります。映画会やダンスパーティーで部費を稼いでいたのが思い出されます。バイトといえば札幌競馬場へ大挙して出かけたものです。部員で誘導馬や場内整理にあたるのですが、私ともう一人

（特に名を秘す）はトラックの中央に掘られた塹壕のようなコンクリートの中が持ち場でした。レース直後電話がかかってくるのですが、その「ハナ」とか「クビ」とか着差をボ

ードに取り付けて、これをカラコロと滑車で引き上げて観客席から分かるように掲出する仕事です。

一瞬の時以外はヒマです。相棒は自転車で馬券を買いに出かけた帰りに捕まりました。バイトといえども関係者は買ってはいけないことを知らなかったのです。もし馬券にからむ結果なら大変なことになるといわれて震え上がりました。どうか着外になってくれと皆で祈りました。外れたのと馬券を手にとって自転車をこいでいたという無邪気さから説教だけで放免になりました。今も現役部員はバイトに忙しいようですが、自分の懐に入らない仕事に精をだすのはムダではありません。ほっといたって、その後の人生はすべて金額に換算することを迫られるのですから。

馬術部の思い出が食に結びついたものが多いのは腹を減らしていたせいでしょうか。秋になると部室の横にジャガイモとリングガ野積みになっていました。牛や豚の餌なのですが、部室の石炭ストーブでゆでて飼料に入れる粗塩で食べたり、夜食にリングをかじったりお世話になりました。農場から採集してきたトウモロコシを食べようとしたらエサ用のデントコーンで今度は捨て場所に苦労しました。

合宿で炊事当番に当たると 30 人ほどのおかず代予算が 400 円ほど。これでどうしろと言うんだと思いました。味噌をシソでくるんだものが 5 個ほど串に刺さっているのがあります。一人一串でなく、一人一個でご飯をかきこむのです。早く食べ終わった者からアイスクリームがもらえました。今でも食べる速さが尋常ではないとあきれられています。たまに料亭に行くと、私の前だけ猪口しかないお膳で仲居が困っています。クラーク会館の定食が 48 円の時代です。

合宿で洗濯が苦手なので下着を表裏と二回はく、と自慢したら「バカまだ前後がある」と一蹴されました。特に名を秘す某君のおかげで今もその後遺症に悩んでいます。

さて、くだんの堀川君は私がゴルフに出かけている留守中にやってきました。八ヶ岳の近くに姉さん夫婦の山荘がありそのついでに我が山小舎にもよく来るのですが、この日もそうでした。ちょうど家内の中高校の同級生夫婦が遊びに来ていました。最近全日空の役員を退任してちょうど八ヶ岳の反対側の蓼科に山荘を建てたというので訪れたのです。留守中の私に代わって堀川君が山の話（彼は前年利尻岳に登った）、スキーの話で盛り上げてくれていました。

堀川君が帰ったのと入れ違いに私が戻ったら「いやあ話題の豊富な方ですねえ」と感心しきり。彼は馬に乗るのも人を乗せるのもうまい男なのです。私の方が全日空と聞き、「では東園さんをご存知ですか」と聞くと、「知るも知らないも私の部下でした。学習院の馬術部でしょう。彼も最近役員を退任しました」とのこと。

ここで北大馬術部東京 OB 会の話をしなければなりません。樋口正明さんたちがはじめた、と聞いていますが結成にいたる経緯はもっと詳しい方が書かれると思いますので省略します。私が最初に出席したのは昭和 44 年ごろです。そうそうたる先輩方が大勢いて卒部後数年という”若輩”は会の終わりごろやっとスピーチの順

番がくるくらいでした。みんなで肩を組んで「明治44年度寮歌、横山芳介君作歌・・・」という例の口上に続いて「都ぞ弥生」を歌い、会場の床が許せばストームもやり2次会にという具合で、同じ時期に在籍した人より乗馬姿も見ることがない人が大半なのに「北大馬術部」という土壌だけで盛り上がっていました。

北大馬術部はオリンピック選手を輩出した運動部だということをいまどのくらいの部員が知っているのでしょうか。その千葉幹夫さんが日本中央競馬会（JRA）で選手育成のポストにあつて世田谷の馬事公苑におられました（その後、苑長に）。東園基文会長が義宮の侍従をされていた（その後掌典長に）前後だと思いますが、東京OB会は大いに盛り上がりました。千葉さんの肝いりで馬事公苑名物の八重桜が満開のころを選んで東京OB会の観桜会が開かれるようになりました。

昼間は千葉さんのお世話で乗馬会です。オールドボーイも馬に触ったこともない家族も乗りました。私の上の娘はこれから馬が好きになり、前述の堀川君のお世話で彼が馬を預けていた東京乗馬倶楽部で乗るようになりました。私はこの会を最後に馬に乗るのをやめました。理由は以下の展開です。

サクラの季節ですから大勢繰り出しています。うらやましように我々の乗馬会を見ているのですが、私が乗ろうとしたら「ウッソー」と女性から声が上がったのです。美食はしてないのですが怠惰な生活と大酒で、馬術部時代のスマートな姿とは見る影もないありさまです。「ウマがかわいそう」と思われるようではもうオシマイだと観念しました。

乗馬会のあと、一般客がいなくなった苑内の桜の下でジンギスカン鍋です。東園会長が宮内庁の大膳部に頼んで届けていただいた高級のマトンです。先年亡くなられましたが東園夫人が家族や子供の世話をされていました。我が家の娘に「お前たちに肉を切り分け、ジュースの心配をされていた、やさしいお婆あちゃまは明治天皇のお孫さんだよ」と教えると驚いていました。そのとき東園家の家族もよく出席されていて長男の東園基宏氏の一家も見えていました。彼は学習院大学の馬術部ですが、東京OB会の何人かは馬乗り仲間としてお付き合いがありました。

私も全日空にいた基宏氏とはその後、仕事の上でも何度かお会いしました。前述のように私の山小舎に見えた方が全日空だったことから、東園会長のご長男の話に及んで盛り上がった背景には東京OB会の観桜会というものがあつたからなのです。

有志のOBで運営されている北大馬術部後援会ホームページの掲示板にいささか苦言を呈しましたが、ここ2年ほど東京OB会の新年会が開かれていません。

新年会は運営資金を集めるという大事な役割を持っています。「都ぞ弥生」が歌えないのはともかくとして、資金が集まらない、前後のOBの顔が見えないというのは困ったことです。現役に鞍のひとつも送ろう、部旗を作り直す資金に、新馬場の植林に役立ててもらおう、というこれまでの支援が出来ないわけでこれは存亡の危機だと思っています。

志水一允君からハガキがきました。定年まで勤めた森林総合研究所から中国に派遣され2年ほど教えていたが、今度日大でバイオマス研究に携わるといいます。バイオマスはこ

れからの政府の施策として注目されている分野で、最近少し勉強したところだったので思わず手を打ちました。

彼が八ヶ岳の私の山小舎にやってきて林の木を切れ、太陽を入れろとアドバイスしてくれました。送ってくれた松、イチョウ、槇などがいま元気に育っています。

大場善明先輩からは自分で撮影したカワセミのすばらしい写真を送っていただきました。写真は馬術部時代からの趣味のようで、今もそれが生きているのです。「北大馬術部25年史」があるはずですが、これは大場さんに譲っていただいた現像・定着・引延しの道具一式を北24条の私の下宿に据え付け、全馬匹を撮影した労作です。しかし全部真横からだけの撮影で、今思ってもあまりにも芸がなかったなと反省しています。

この6畳一間の下宿に集まったほかの馬術部同期生の消息に触れておきます。

市川瑞彦君は現部長ですからよくご存知でしょう。王決優勝の年だったと思いますが、彼が入院していた真駒内の病院まで馬を連ねて見舞いに行きました。読売新聞の社会面に写真つきで大きく報道されたのですが、裏話をすれば当時読売北海道の社会部に生田勝一先輩がいたからです。

小出秀達君はその北24条の下宿で隣の部屋でしたが、私と同じ大阪で「小中高大」皆同じところを出たという不思議な関係です。現在、大阪で開業していますが、「水琴窟」に凝っていて開院何十年かのパーティーに招かれた連中は患者さんと一緒に（専門は精神科）妙なる音色を聞かされたようです。

実吉峰郎君は名簿では「不明に」になっていますが山梨県の都留薬科大やその後同じ山梨にある帝京大薬学部で教えていると聞きます。彼とは馬術部時代宿直がよく同じになったのですが、寝るとき睡眠薬代わりにクロロフォルムを使うクセがあり、2段ベッドの上にいる私がコテンといってしまう、餌やりが出来なくなって問題になったことがあります。

玉沢一晴さんは名簿では同期になってますが先輩です。東京OB会の熱心な支え手ではとんどの集まりに出席されています。総会が途絶えていることを心配していると思います。

岡田征至君は私たち同期の食の恩人です。当時、父上が拓銀の（本人もその後同じ道に）根室支店長をされていてテーブルの上に山積みされた毛蟹を飽きるまで食べていいと言われて至福の時を過ごしました。私と同じヨットが趣味で、室蘭にクルーザーを持っていてデッキに息子さんと並んだ写真をよくいただきました。

中村（田中）せつ子さんは同じ世田谷にお住まいですが、馬事公苑以来お会いしてません。でもちよくちよく私のホームページの感想などをいただきます。書き込みはされませんが馬術部の掲示板はよく読んでおられるようです。

原重一君は「腰から下のバランスが同じだ」と馬術部を冬にはスキー部に変えた張本人です。“パラレルの原”の指導で同期のほとんどはスキーをやります。交通公社にいて東北の岳温泉にスキー場をつくるとき設計にあたり、何人かで出かけたことがあります。

恩田正臣君は名簿では下級生ですが同期です。王決の優勝メンバーです。群馬県の馬事公苑の運営にあたり退職後、県内の太田市で乗馬クラブを開いたと聞きましたがまだ行っ

たことはありません。

恩田君に限らず馬術部を卒部してからも本業とは別に馬とかかわりを持つ OB が多いのに気づきます。

前述の千葉幹夫さんは東京から岩手県の遠野市に住まいを移され「馬の里」の運営や馬種改良につとめられています。堀川君は都心にいながら長く自馬をクラブに預けていました。

高野文彰君は本業は造園設計ですが新宿から北海道に会社ごと移り最近ではやはり乗馬クラブを始めたと聞きます。高野君とは不思議な出会い方を何度もしています。卒業後何十年もたってからですが、親戚の法事で出かけた山形県の上の山温泉の湯船の湯気の向こうに彼がいました。

私が静岡支局長をしているとき東京駅のホームでパツタリ出会ったときは静岡県の仕事で「こどもの国」の設計をしているということでした。そのときの県知事とはゴルフ仲間（互いに下手）、そのあとの知事は選挙に出る時から相談を持ちかけられ、戦略をたてたという仲で、今でも2人とも付き合いがあり、年1回は酒を飲む会があります。そのとき、それとなく聞いたら、2人とも「こどもの国」は気に入っているそうです。（高野君には伝えてないのですが）

現地に行ったことがない私は現と前の知事にいつも「あそこに乗馬施設をつくりなさい」と言ってます。もちろん二人とも門外漢で理解はしてないのですが。

さて、馬術部にいたのはみなさん4年間のはずですが、その後の人生でも馬と関わりを持ち続けているというのは、そう思うだけの魅力があるということです。

私は酔っ払って馬房で大の字で寝たことがあります。普段中央を使っている馬が片隅に身を寄せて立っていました。寝ワラもあまり汚れていなかったから、小用も控えていたのでしょう。朝になると心配そうに顔をよせてきました。何十年たった今でもそのときの彼の眼を思い出すと涙が出るのです。

ことし名古屋の横田肇君から「偶然に HP を見たので」とメールが舞い込みました。彼は2年下ですが明治乳業を退社後、本を2冊も上梓されたとかで立派なハードカバーを送っていただきました。馬術部のこの学年は特にまとまりがよく10人ほどで今でも集まっているそうです。なにより皆さんの近況が分かるメールなので以下に紹介します。（了解をしていただきました）

我々馬術部同期は3年前の10月、札幌に集合致しました。

まず羽田空港から吉田（御坊田）賢一、野田行文、松永武彦、荻原雅典、守屋正に小生の6名が出発、千歳空港で瀧澤南海雄、大木誠示が合流して定山溪で一泊。翌日大型レンタカーで雪の中山峠を越えて洞爺湖、支笏湖を経て夕方札幌着。瀧澤迪子、大澤（牧）竜子、菅野弘が加わってススキノで大いに氣勢を上げました。翌日は日曜日でしたので午前中北

24条の馬場へ練習を見に行ったところ斎藤先生、市川さんに会うことができました。我々同期が11名も来たのに部員が少なく、全員でも17名しかいないこと、主将が女性であること、馬場は我々の時代の2倍以上も広いこと等に驚きました。

その時以来我々同期はメールで意見を交換するようになりました。消息をご報告致します。

瀧澤南海雄

北海道林産試験場で食用キノコの栽培技術の開発と品種改良を専攻。今年3月定年退職。キノコに関する論文の他、『誰でも簡単、10割蕎麦』（近代文芸社）という本を2年前に出版しています。母堂が鍼灸の心得があったそうで、彼は鍼灸師をめざしてこの4月から3年間の予定で北海道鍼灸専門学校（札幌）に通っています。40年ぶりの学生生活で若い同級生について行けるか心配だったようですが一学期の期末試験で34人中2番の成績だったそうで自信をつけている模様。芸術、文化にも造詣が深く、まれにみるマルチ人間です。

荻原雅典

昨年の日立製作所を定年退職。現在外国人に日本語を教えるボランティアをやっているようです。趣味はバードウォッチング、漢詩、四国八十八ヶ所の巡礼。同期の中で唯一ホームページを開いています。ただしバードウォッチングのみ。宮崎さんのホームページを紹介したところ、非常に感心して「宮崎さんに弟子入りしたい」とメールしてきました。シャイな荻原のことですからまだ弟子入りはしていないと思いますが、彼の野鳥の写真とその解説のホームページは（<http://homepage2.nifty.com/GATTEN/>）です。

吉田（御坊田）賢一

めずらしい苗字でしたが学生時代後半から吉田になっています。日揮を今年の2月頃定年になりましたがまだ仕事でカザフスタンあたりへ時々出かけているようです。近年ますます頭脳明晰でよく本も読んでおり、話しの合う男です。夫婦で四国遍路の旅をしています。

野田行文

中外製薬を定年退職後、彼が住んでいた長泉町（沼津市の東側）がニュージーランドのナントカいう姉妹都市に国際交流センターを作ったので昨年9月からそこへ行っています。その後何も言ってきませんでしたが昨日初めてメールが届き、元気であることがわかりました。

松永武彦

福島県須賀川市に住み、昨年の日立製作所を定年退職しました。今年10月には故郷である

静岡県藤枝市に転居するそうです。今年3月のメールでは古武道に熱を入れていて、えらく元気なようです。最近のメールでは考古学にも熱心で、みごとな文章をくれました。文武両道に優れた、堂々たる教養人です。

守屋正

三菱重工を定年退職後、ボランティアでトランプのブリッジの講師をしているとのこと。今年6月、名古屋へ来て、いっしょに明治村へ行きました。

大木誠示

千歳に住んで元気なようですがメール討論に参加しないので近況はわかりません。

菅野弘

北広島市に住んで道庁退職後、趣味と実益をかねて園芸をしています。

水野祐亮

藤女子大教授。昔からいい男でしたが今もって腹も出ず、頭も薄くならず、若い女の子に囲まれてうらやましいヤツです。

何十年たってなお OB たちは北大の馬場を訪ね、馬と関わりを持ちたいと望み、思い出に涙します。確かに馬術はスポーツです。オリンピック競技で唯一、男女差、年齢差を問わない競技です。それは分かっていますが、そういうことを越えたもうひとつ別な何かがあると思います。それが今なお OB を結び付けているものなのだと思います。

(了)

腹へ二様大歓迎

丼物各種 500円～650円
バラかつ丼 カツ丼 牛カルビ丼 他丼物各種
定食各種 650円～730円
回鍋肉 肉野菜炒め 子キンカツ 他定食各種
御満腹 御満悦! 北大生御用達の店!

北大生御用達の店

AM 11:30～2:30 PM 5:00～10:30
北21条西4丁目北大通り沿い

春田恭彦（昭和 44 年卒）

平成 15 年 12 月

雲流れて旅路遙か

馬と出会っておよそ 39 年になる。非常に半端な年数だが、現役から頼まれて何か書くはめになった。おそらく馬事公苑長という数年前まで自分でも想像だにできなかった立場にいるので、部報担当者がその気になったのだろう。

昭和 40 年 4 月、北大馬術部に入ったがために今の自分があることは間違いない。それまで父に何回か中山競馬場に連れて行ってもらった以外、まったく馬には縁がなかった。昭和 39 年の東京オリンピック、私が高校 3 年で一応受験勉強らしきことをやっているときの母の言葉。日本で行われるオリンピックは一生に一度しかないのだからテレビぐらい見なさい。全部見る時間がないのなら、馬術だけでも見なさい。外人選手の演技はすばらしい。日本選手のなんとなさけないことか。母のこの勧めで、私はちよつとの時間しか放映されない馬術だけは見た。このときの情景はほとんど覚えていないが、日本選手と外人選手の技術の違いは素人の私にもわかったと記憶している。しかし、そのことは北大に入学し札幌に行くまで全く忘れていた。馬術部の入部勧誘に出会ったときにそれを思い出した。そして、今書いたように一生忘れないエポックになった。

畜産 4 年目になってまもなく普通の学生が就職探しを始めた頃、3 年ちよつとのほとんどの時間を馬術部で過ごした私には卒業を考えることはできなかつたし、できたとしても「農学部畜産卒業見込みです」と胸を張って就職試験を受ける気にはとてもなれなかつた。さらに言えば馬への未練も大きすぎた。そこで馬術部で得た大動物取り扱い技術と畜産でのわずかな知識を生かして、獣医に転向することを決心した。畜産の安井先生や半沢先生のはからいで、獣医の繁殖学教室への出入りを許され、卒論もおおかた省略してもらって畜産を卒業、大学紛争のため 4 4 年 4 月から丸々 1 年間の浪人生活を経て、「獣医として共済で働きたい」と訴えて 4 5 年 4 月、無理を通して獣医への学士入学に成功した。私の馬術部同期の田中力君は当初から志を持って獣医に進み、JRA を就職先の一つに考えていた。私は「趣味と仕事は違う」などと偉そうなアドバイスをした。そのくせその 3 年後、自分が JRA に就職してしまうとはなんとズルイことか。言い訳はある。先に農業共済組合の試験を受け、滑り止めで受けた JRA だったのだが、JRA からすぐに合格通知がきて返答を迫られ受諾してしまったため、返事がなかなか来ない共済にはいけなくなってしまったのだ。後から共済から合格を聞いたが、気持ちはすでに、再び馬の魅力にはまっていたのだ。また乗れるぞ。

競馬会での仕事は、中山競馬場の診療所から始まった。「新米獣医の乗馬は許さん」との上司の厳しい命令が解けた翌年 3 月から乗馬再開。そのときの最初の馬が、ノーザンクロスという小さなチョコチョコ歩きの芦毛のサラブレッド。この馬は、競馬を引退した後、

ちゃんとした調教も受けず定期的に運動もされず一応誘導馬に使う目的で中山に繋養されていた。当初は地上横木も跨げなかったが、器用な馬ですぐに飛越を覚え、その年6月、馬事公苑で行われたJRA職員大会の小障害で優勝した。ジャンプオフには12頭ぐらい残っていたが、猛烈なスピードでダントツのタイムで勝った。これは非常にうれしかった。何故かという、この馬に乗り始めたとき小障害優勝を周囲に宣言した。それを不可能と言ったある人と、勝ったら乗馬ズボン、負けたら飲み屋のはしごを賭けたのだ。そしてまんまと乗馬ズボンをゲット。私が転勤し再びこの馬に乗る人がいなくなった。担当者から退屈させたいとの話があり、ノーザンクロスの三番目の働き口が北大となった。26・7年も前に、それもちよっとの間しか北大にいなかったこの馬を覚えている人は少ないかもしれない。よくわからないけれども1年か2年しか北大にはいなかったはずだ。私が次に札幌を訪ねたときには彼はフロンティア乗馬クラブにいた。フロンティアを訪ねると、たまたまノーザンクロスが1頭だけ馬場に出ていて、布浦さんの指導で女性が乗っていた。布浦さんは、馬場も障害もできるといってこの馬を褒めてくれた。そして、私に見せるため布浦さんが乗り代わって、馬場に作られていた障害コースを飛び始めた。いくつかの結構大きな障害はきれいに飛越したが、六角横木障害（六角だけで100cm）で失敗。ずいぶん手前で踏み切って馬が腹の下で六角を抱えて泳ぐ格好になってしまっ、て、人馬転。布浦さんは、顔中血だらけ耳がちぎれる大怪我をしてしまった。このとき厩舎には他には誰もおらず、この馬に乗っていた女性と一緒に救急車で病院に運んだのだが、それが今の女房である。話が脱線。私が今書こうとしているのは、経歴ではなく馬の話だった。

学生時代からこれまでにいろいろな形でずっと馬に乗り、馬を見てきて、時に真剣に、時に自信を持って、時に怠けながらあるいは絶望感を感じながら、見続けて感じたことがいくつかある。最初の感動は、1980年初夏ケンタッキー州レキシントンで総合馬術のオリンピック選考会を見たときである。因みにこの年のオリンピックモスクワ大会は、東西の緊張が強まり日本を含めた西側のボイコットに終わった。まず初日の調教審査で私は目を見張った。この躍動感のあるしなやかな美しい動きは何だ。どうやったらこんな動きをさせられるのか。これまで本物の馬術を見たことがなかったことを改めて思い知らされた。野外走行と余力審査でまた感服した。どの選手も全く姿勢が乱れない。馬は激しく動いているが人は動かない。脚が動かない。このときの優勝馬はボルトルーンという名の牝のピントホース（白茶斑毛）。体高150cm強のポニーだが、3日間とも常にトップ、完璧だった。

このときの私のアメリカ滞在目的は、「アメリカにおける競走馬の育成と調教の実践」研修である。いろいろなことを学んだが、2年間の研修での最も大きな収穫は、日米の乗り方・バランスの持ち方の違いである。その頃の日本の騎手は膝で乗っていた。競馬のモンキースタイルとは、膝と鎧で体重を支え、馬の首の上に手を添えて四つん這いで乗るものだと思っていた。モンキースタイルはアメリカから持ち込まれた乗り方のはずだった。しかし、アメリカのモンキースタイルは違った。競馬騎手も調教騎手も膝ではなく完全に鎧だけで体重を支え、鎧を支点としてバランスをとっている。従って、鎧の位置すなわち踵

の位置が動かない。待てよ、乗馬の選手も鐙が長いだけでバランスの取り方は同じではないか。このバランスで乗るからこそあの動きが生まれるのだ。膝でキ甲の上下動を阻害しないとむしろキ甲の上下動は小さくなり、馬はスムーズにより速く走れるのだ。人の体重は、常に馬の重心の上に置かれている。早く走るときはそのまま上体を低くする。追うときにはむしろ馬の重心の後ろから押す。駈歩のピッチング運動の中心に乗っていれば、馬は人の重量負担が最少になるはずだ。

レキシントンでのショックからこのことに気づくまで半年以上かかった。帰国して JRA 宮崎育成牧場の若手にそのバランスを指導し、1 歳育成馬調教で実践したところ、競馬場に配付された後、宮崎育成の抽選馬は驚くほどの勝鞍をあげたのだ。今年の世界陸上で末続選手は自分の走法を飛脚走法と言ったが、これを聞いたとき、私が考えたのも飛脚走法と同じことだと思った。1981 年にジャパンカップが始まり、当初は日本の競馬関係者は欧米との実力の違いに理由も判らずただただ驚いているだけだった。しかし、20 数年が経過し、調教師も騎手も徐々に調教法、コンディショニング、バランスを欧米に学び、倣い、変わっていった。現在では日本でも多くの騎手が正しいバランスで乗っていると思う。

さて、乗馬の話に戻ろう。いま書いたように馬術の基礎はバランスである。我々は、馬に乗り始めて左右のバランスをある程度覚えれば、うまくいった気がしてしまう。前後のバランスは力ずくでごまかせるからである。力ずくとは膝と手のことを指しているのは言うまでもない。1-2 年目の諸君はぜひ「力ずく」を使わず「前後のバランス」を習得してほしい。3-4 年目になってからでは手遅れかもしれないから。そして馬の重心の上に乗ることを心がけてほしい。馬の重心は鞍を置いたときの鞍壺の下あたり、まさに真つすぐ座ったときのお尻の下にある。ところで、成書ではもう少し前にあると説明されているが、最近の研究でその間違いが証明されたそう。だから前傾姿勢をとるときも前にかぶってはいけない。膝をキ甲に押し付けて前後のバランスを取ろうとさえしなければ、前にかぶることはないのである。

とはいうものの、馬には持てる技術を甘んじて受けてもらわなければならないのが現実。毎日が一喜一憂、二憂かな？、なかなか思う様には馬は動いてくれず、往々にして予期せぬ反応をさせてしまうのが我々アベレージライダーの悩みである。そもそも、この年になってこれからうまくなる訳ナイッショ、とも思いつつ今も毎朝がんばっている。高野さん、近藤さん、八木沢さん、小栗さん達（昭和 41 年卒部の揃って泥沼にはまった人達）のバイタリティを思えば、私などまだまだこれからである。馬から受けている呪縛を快感と感じている限り、まだまだ女房にも周囲にも迷惑をかけそうである。

私は長い間、現役の迷惑も顧みず、「仕事をリタイヤしたら、北大馬術部の押しかけコーチになる」という夢を暖めていた。今やほとんど絶望的だが、気持ちとしては捨ててはいない。馬術部賛歌の一番と二番の時代は自分の中で過ぎてしまったが、三番の心境はざっと持っていきたいと思っている。私とあまり変わらない世代の皆さん、たまには謳ってください。きっと同じ気持ちになることでしょう。

三、 雲流れて 旅路遥か
青春の孤杖 泥濘はばめど
凜然と 進みて行かむ
駿馬の替れあるかぎり

チキンをどうぞ

モ モ セ

札幌市清田区美しが丘3条3丁目
TEL 881-0470

馬術部を振り返って

H7年卒 松原貴史

卒部して10年、馬術部を離れてはや8年。その間に馬場も移転し、私が居た当時とはかなり環境が変わってしまった。私が現役の時も昔は農場のところに馬場があって、昔はああだったこうだったと諸先輩方から話を伺ったことがあります、本当に時代の流れを感じます。

今回（H15年）、全日学の試合をたった1日ではありましたが、馬事公苑に行ってきました。最終日の耐久・余力の日に行き、時間の関係で耐久だけを見せてもらいました。今回、全日学に連れてきた馬の中で私の現役の時にも入厩していた2頭が含まれ、非常に懐かしく感じました。この2頭にはそれぞれ思い出がある馬だったことでもあります。1頭は「レジェンド（北凌）」。「レジェンド」は私が2年の時に6歳で入ってきた馬で、来た当時に馬体管理をさせてもらっていました。当時はおぼっちゃまの風格で気品を漂わせ、でもちょっとしたことで驚きそしてもう手が付けられない一面もありました。もう1頭は「トルネード（北旋風）」。「トルネード」は私が主将の時に5歳で入ってきた馬で、入厩する際の馬の輸送でアクシデントが起きながら、何とか入厩してきた馬でした。そんな当時新馬だったこの2頭が今や古株になっている。よく育ってくれたものだと思えます。これからも毎年連れてきてもらいたいものです。この2頭以外にも「エルグレイ」と「北磐」を全日学に連れてきており、私は関東に住むOBとして毎年成長を楽しみにしたいと思っています。

私の現役当時のことにも触れたいと思います。私は3年の時、「明日楡」という馬で全日学で個人5位になることができ、そして4年で主将をやらせてもらいました。「明日楡」と共に道内は勿論、山梨そして馬事公苑と様々な場所へ遠征に行き、そして数多くの試合に出場しました。本当に素晴らしい経験をさせてもらったと感謝しています。私自身3年まではただ勢いだけで馬に乗り、馬に教わる部分が大きかった。しかし4年で主将になり、当時の北大には高齢馬が多かったため、世代交代をする足がかりを築くことが必要だと感じていました。自分たちで新馬を調教し、次世代の馬たちを作らなければならない。（卒部したばかりの若いOBを含め）未熟な技量である現役だけでも出来る調教方法を確立するが必要だと考えていました。そして自分なりに考えた結果、最終的に行きついたのは蓄大の調教方法でした。蓄大は下級生が乗っていても、気軽に自由手綱で障害をポンポン飛んでいる。なんでだろう？どうしてだろう？どこが北大と違うんだろう？私には馬が喜んで障害を飛んでいるに見えたのです。喜んで障害を飛ぶ馬に人が跨っている。だから人は余計なことを考えることなく、リラックスして練習が出来る。そして上達して上級生になり、試合で活躍する。そのサイクルが出来ている。だから強いのか。そしたら、そんな馬たちにするにはどうしたらいいんだろうか？それは毎回障害を飛ぶ度にもらっている餌にある

ことに気付きました。餌を障害を飛ぶ度に毎回与える必要があるのだろうか？こんなことを続けていたら、餌を与えないと障害を飛ばなくなるんじゃないか。そんなことも考えましたが、現に蓄大は成功しているんだし、私たちが高度な技量を持っている筈もなく、この練習を取り入れて見ることにしました。それを私はOBになってからも続け、合計3年間実行し、ようやく全体の練習に変化が表れてきたことを感じながら、就職のため札幌を離れました。

私は札幌を離れて7年になります。現在、北大の調教方法がどうなのか私は知りません。しかし、もう少しで馬事公苑に連れて来れそうな新馬が控えているとも聞きました。おそらく、順調に新馬調教が進んでいるのでしょう。現役の皆さん、是非ともこれからも真剣に馬の調教について考えて下さい。毎日、課題を持って馬に乗って下さい。私は今、馬から遠ざかっています。なかなか馬に乗ることが出来なくなりました。毎日馬に乗ることが出来る現役の皆さんが羨ましく思います。是非、この馬術部生活を有効に過ごし、楽しんでもらいたいと思います。私もいつの日かまた馬に乗ることを始められたらと思っています。

最後になりましたが、市川先生には私が主将の時から北大馬術部部长をして頂きましたが、今回退官されるとお聞きしました。馬術部厩舎の移転、そして様々な事件があったりと多岐にわたり御尽力頂き、本当に有難うございます。今後も馬術部に関わりを持って頂けることを願っております。本当にお疲れ様でした。



札幌北高前店

(有) 丸エス丸和食品

札幌市北区北23条西9丁目18-654

電話：011-717-7788

北海道大学 水産学部馬術部

i n 函館

文責・主将 鈴木 雅人

<活動内容>

現在、部員数は24名で、過去最高と思われるぐらいの部員数を誇っています。
活動目的は①馬とのふれあいを楽しむ事 ②馬術の腕を磨き大会に出場する事が主なものであり、各部員がそれぞれ目標を定め活動しています。活動はJRA 函館競馬場乗馬センターで乗せていただき、競馬場の先生方の指導のもと、競馬場一般会員の方や少年団と共に朝練を中心に日々練習しています。北水馬術部は自馬を持たず、函館に来てから馬術を始める部員ばかりなど、他大学とは多少異なった性質を持っていますが、楽しく真剣に活動しています。

最後に今回もこのような形で掲載させて頂き、誠にありがとうございました。
本学馬術部の水産学部生入部求む！



<活動報告>

平成15年度活動報告（H15/4～12）を記します。

～平成15年～

4月	OB会 …………… 渡部兄（S61卒）・倉本姉（H6卒） 小野兄（H15卒）と会食
5月	代替わり …………… 塩崎前主将から鈴木現主将へと代替わり お花見会 …………… 五稜郭にて平野兄（H15卒）吉田兄（H15卒）とお花見
6月	北日本選手権 ……… 鈴木（3年） 学生選手権課目に出場 （岩手大） 経路違反により失権
7・8月	函館競馬開催
10月	新人入部 …………… 移行生10名（男4・女6）新規入部 北大OB戦 …………… 安河内（4年）・鈴木（3年） クロスバー競技 （本学） 椿原（4年） ・服部（3年） ジムカーナ競技 山下杯 …………… 安河内 ジムカーナ競技 （酪農大） 服部 ジムカーナ競技 1位 鈴木 80センチ障害 減点0点 2位 モモセダービー ……… 安河内 L級C障害 減点0点 2位 （モモセファーム） 鈴木 L級B障害 3反抗 失権
11月	学祭 …………… 甘味処「祇園」を出店 映画会 …………… 荒木兄（S39卒）出演の「ラストサムライ」鑑賞
12月	乗り納め会 …………… 今年最後の騎乗

卒部にあたって

★ 木村 滋之(前副将・馬匹・北日幹事、農) ★

馬術部で学んだ事の一つに、“前向きに生きる”というものがある。どんなスポーツでも前向きな姿勢が求められるが、特に馬はグチグチとした後ろ向きな性格の人間を嫌うので、馬乗りは常に前向きでなければならない。日々の練習での良し悪しや、試合の結果に一喜一憂するのではなく、どんな状況でも自分にとってプラスになるように考えて、次の行動を決める。不調なときほど新しいステップを踏み出すチャンスだと捉え、1歩退いた視点から冷静に状況を見極める。自分を前に進ませる要素は、見渡せばそこらじゅうに転がっているはずだ。

馬術部が他の組織と違うところの一つに、馬がいるということが重要だと思う。馬は人間よりも正直にものを言ってくれる。馬と真剣に向かい合うことで、自分という人間が見えてくる。だから現役の部員には、馬の言葉を素直に受け入れる耳を持つてほしいと思う。

最後に、この部活で関わった全ての人と馬に。

4年間ありがとうございました。

—4年間いじめてごめんなさい、でもまだ終わりじゃないから気をつけてね。

—発気合いを入れていただきたい

★ 佐賀 由美子(前後援会、獣医) ★

始めに4年間馬術部に在籍していた間に関った人及び馬たちに感謝したいと思います、どうもありがとうございました。

振り返ってみると馬術生活は長かったような短かったような……。現役時代は間違いなく長いと感じていたし、正直やめたくなかったこともあったこともありましたが、終わってみればやはり短かったなと感じます。というよりも、あんなに時間があつたはずなのに もっと頑張れたはずだろうと過去に戻って自分をとちめてやりたい気分になります。が、そういうことはできるはずないので、現役の皆に、3年半なんてあつという間なのだから今できることは積極力になってやっておけ、と言い置きたいです。お節介かもしれませんが……。

馬術部をやっていく上で目指すものは人それぞれあつていいと思うし、実際私は試合になると緊張しててんで駄目で、終わると馬に「うわー、ごめんよ」と毎回のように誤る羽目になり競技会は好きではありませんでした。しかし、私自身の馬術部の思い出の中で何が一番大きいかというと北日なのです。私がついていた馬が好調だった(1・2年のときは北旋風が権利獲得、3・4年のときは北鈴が耐久で満点と一反のみ)おかげなのが大きいのですが、自分のところの馬が勝ち残ってくれている時のドキドキした感じは忘れられませ

ん。あのワクワク感があったからこそ頑張ってくることが出来たのだし、また、後輩にもあの感じを味わって頑張って欲しいと思うのです。だから正直に言って、馬術部をやる上で勝利を目指さなければ嘘だと思います。自分の代は人が多かったおかげでサポートに回りそちらの責任はドンパに果たして貰った私が言うのはおこがましいのですがそう思います。勝利優先ですべてを運ぶのは間違っていると思いますし、そのことに関してはドンパの中でもめめました。ぶつかったこと自体はお互い本音をさらせてよかったと思います。ただ、ああいうことはもっと早くやっておけばよかったと感じるのです。そこで、お節介を自覚しつつ言わせてもらいましょう。現役の皆、もっとガシガシ本音をぶつけ合った方がいいよ、せっかくの仲間なのですから。

ああ、とりとめもない文を長々と書いてしまいました。最後までやれて良かったと言いたかっただけだったはずなのですが。最後に改めてもう一度、皆さん本当にありがとうございました。

—いつも楽しそうですね

★ 高島 渉(前会計・車両、水産) ★

水産学部なのになぜか4年間やってしまいました。そこまでののが良いか悪いかは別にして、やはり4年間やらなければ分からなかったこと、得られなかったことはたくさんあったと思います。そして、いろんな人に迷惑をかけつつも楽しんでやり終えることができました。特にドンパのみんなには苦勞をかけました、腐ってた時期もあったし。でも今となっては良い思い出、ということにして下さい。

こんな僕を4年間続けよう思わせてくれた皆さんどうもありがとうございました。やっぱり4年間やって良かった。

—ヤング team 総帥。でも名誉総帥は坂下氏。

★ 武井 亮(前記録、獣医) ★

この4年間に有益だろうが無駄だろうがどっちでもいいんだ。どうせ俺は不完全な人間だからね、自分が思うままに流れていくのがサイコーなはずなんだ。俺にはまだなめつくしたドロップの気持ちだって、世界の終わりだって、ましては澄み切ったその青の先にいけるかだってわかんないけど、きっとビエロは首吊って、それでも笑ってるんだろう。いつか俺のまわりがロックしてロールするようになるさ。太陽だってつかめるようになるんだ。

こんな僕ですが、僕が今こう在れるのもみなさんのおかげです。父さん、母さんありがとう。家族の皆さんありがとう。同級生の仲間たちありがとう、楽しかったよ。下級生の人たち本当にありがとう、色々ごめんね。クロ、ホントお前はかわいいね、みんなかわいがっ

てあげて下さい。他大学、馬関係の人々どうもありがとうございました。お友達たち、君たちがいなければ続けられなかったかも、ありがとう。OBの方々ありがとうございました。そして市川先生本当にお世話になりました。最後に、レジェとサラちゃんありがとうね、君たちとコンビが組めて本当に良かったよ。また一緒に遊びたいな。

—しっかりした人

—OK!OK!good boy!…。ちょっと恥ずかしい。

★ 竹田 敏弘(前主務、獣医) ★

ついに馬術部の3年半の生活が終り、卒部することになりました。ほんつつつとうにつらくて楽しい部活でした。

特に、リッチに乗った2年間とトルに乗った半年間は、楽しかったです。大会運営に学校にと頭の中が爆発するほど忙しかったときでも、いつも彼らのことばかり考えていた気がします。どんなに忙しくても、明日はどういうふうに乗ってやろう・次はこうしてみようと試行錯誤しているとき、彼らに実際に騎乗しているとき、彼らの世話をしているときは、そんな忙しさは忘れて夢中になっていた気がします。

また、他の部員の方にはたくさんたくさん助けてもらいました。作業に箱番に馬体管理に……みんなで運営していく部活とはよく言われますが、僕自身はみんなに助けられっぱなしだったと思います。後輩のみんなへ、いくらつらくて大変でも、こんなにいい仲間がいるところは他にはいないと思います。絶対に続けて損はないよ。

最後にもう一度、とっても楽しい3年半でした。みなさん本当に有難うございました。

—数多くの豆知識を持っている

★ 寺島 良(前主将、経済) ★

終わってみると本当に早い感じがします。でも僕の馬人生まだ始まったばかりです。北海道大学馬術部が僕の馬人生のスタートであることに誇りを持ってこの馬術部で学んだことをこれから先、生かしていきたいです。この4年間本当に多くの人にお世話になって多くの良い思い出ができました。本当にありがとうございました。

—こんなお兄さんがいて欲しい

—〇〇の未来に…



木村兄と北彗号



佐賀姉と北鈴号



高島兄とエルグレイ号



武井兄と北凌号



竹田兄とリッチステート号



寺島兄と北鈴号

部員紹介

3年目

★ 馬場 紘子(馬匹・会計、獣医) ★

早いものでいよいよ残すところ1シーズンとなってしまった。

いろいろと反省しなければいけないことも多いけれど、卒部するときに後悔しないようにあと1年間精いっぱいがんばります。

—その目が素敵です。

—クロと同じくらいいいじめられている気が…

★ 前野 伸策(主将・北日幹事、農) ★

平常心と気合でいきます。

—突然キレ口調になる時はびくびくする

—風格出てきました。いろんな意味で去年よりLv up しているようです。

—前野兄の「ま」は麻雀の「ま」。



(左から、馬場姉、前野兄)

2年目

★ 小阪 梨奈(主務、農) ★

農学部生物機能学科の2年生です。「大学生」らしくなりました。

—女帝ぶり…そろそろ発揮しますか？いや、もうしてるか…

—なんか物知りらしいです。

★ 利根川 正明(飼料・副務、農) ★

いろいろ考えさせられるなあ、馬術(部)って…

—表裏が激しいよね。でも本当はいい奴なんだよなあ…

—見た目と違ってけっこう幼い

—トリビア好き

★ 日野 恵介(バイト・車両、獣医) ★

そろそろ…

性格を変えるべきかなあ…

なんて思う今日この頃です…

—実は20代後半という噂が…

—キャバキャバうるさい

—ピノッティー

★ 前田 晋也(副将・後援会、農) ★

今年もすぶらぎを食べに行きます

—命かけてます。きっと本当です。でもひよる時も多々あります。本当の君の姿はどちら？

—今日も部室で寝てました。

—ものまねするから話長い



(左から、利根川兄、日野兄、北旋風号、小阪姉、前田兄)

1年目

★ 猪狩 舞子(ビデオカメラ・企画、水産) ★

今まで温室で育ってきたんだなあ

北海道の寒さにも他の寒さにも耐えられるようにならないと

—料理うまい

—おいがりさんはうまかった

—食当隊長

—恵笛の人気者らしいです。そんな気がします。

—「マイペース」以外の何者でもない。

—クロチーフ。目が光る。

★ 一色 真明(大会関係・部報、薬) ★

ダメ、ネガティブ！

—もっと1年生を引っ張っていってくれ！

—本物のネガティブリスト

—アートネイチャー

—「恋してる」の響きだけで強くなれる気がしていたあなたはまだまだチェリーボーイ
—字の上手なキューピーちゃん

★ 久保 裕道(大会関係・部報、農) ★

夢は夢のままでいい、そう思っていたあの頃
夢は掴み取るものだ、そう決意したあの時
人の夢は儚いのかもしれないし起こらないから奇跡というのかもしれない
それでもゼロではない可能性を信じ、あの日の誓いを胸に秘め
眩しいばかりの光溢れる未来へとガムシャラに爆走しつづける今日この頃

—怖い。
—問題児。
—その調子でガンガンいこう！！
—つつこみきついし、痛いし、意味わからんし。

★ 坂井 慎哉(衛生、記録・水産) ★

賭け事が大好きです。競馬、麻雀など。
でも麻雀は最近嫌いになってきました。ボコボコにされたから。
賭け事よりも馬が好きです。かわいい馬たちと素敵な学生生活を送れたら、と思います。

—がんばって！
—坂井君の次に乗る時鐘の長さを妥協したくなる。
—そんな控えめにならずに、もっと自分をガンガン出していきましょう！
—1年目の中で一番スマート。

★ 関田 愛子(薬品、薬) ★

北海道に来たからといってこんなに自然を体験できるとは思っていませんでした。驚きと発見の毎日です。

—本物の謎
—いわゆる不思議ちゃん
—しっかりしてるなあ、と思いきや「え！？」って思わせることもあったり…まだまだつかみづらいなあ
—稀少な乙女系。でも耳が遠い。
—結構押しが強い、かわいいコ。

★ 林 宣隆(作業・馬備、農) ★

絶対に寝れるか!と思った部室の布団で寝て、キュロットでローソンにも行けるようになりました。

—イケメン

—腹の内側に何か黒いものを抱え込んでる様子

—本物の黒

—まだまだ僕らの知らない一面が彼にはあるみたいです。少しずつ…暴いてみるか…



(上段左から、林、坂井、久保

下段左から、関田、猪狩、一色)

訂正

平成 14 年度部報 (No.48) には一部誤りがございましたので訂正いたします。

○ 会計報告

P.4 収入 (合計) 3802962 → 5350562

○ 戦績報告

P.14 第 38 回北日本学生馬術女子選手権

→ 第 38 回北日本学生馬術女子選手権大会 (於 ノーザンホースパーク
6 月 30 日)

P.15 第 27 回北海道馬術競技 (於 ノーザンホースパーク 7 月 19、20、21 日)

→ 第 27 回北海道馬術大会 (於 ノーザンホースパーク 7 月 19、20、21
日)

P.21 全日本学生賞典馬術競技会 (於 JRA 馬事公苑 11 月 10～17 日)

第 52 回全日本学生賞典障害飛越競技会

アポロオブザダンス → 明秀

シルバークラネット → アポロオブザダンス

ライバークセル → シルバークラネット

○ OB 名簿 (敬称略)

P.97 西村 雅夫 (平成 7 年卒)

〒080-0836 帯広市空港南町 294 - 26 エフ S108

→ 〒061-1423 恵庭市柏木町 547 - 2

P.98 小野 元也 (平成 14 年卒)

〒041-0853 函館市中道 1 - 91 - 1 北大北辰寮

→ 〒001-0019 札幌市北区北 19 条西 7 丁目 小堀マンション 10 号

○ 北大馬術部部室連絡先

TEL/FAX 001-737-1626 → 011-737-1626

アパート、マンション

一 至・新川

北校区所
札幌サンプラザ

北24条通り

西口
南口

北24条駅

北海道大学
馬術部

多摩池

北21条ハイソ
・至京道

にしき酒ピア

六花亭

北2条通
研究所

ホワイト
パレス

・田村邸 セブン
イレブン

・ローソン

北大農場

北大
獣医学部

岡路

松田
影形

当分

エルムトンネル

一 至・札幌国思場

北18条門

ローソン

ア

北18条駅

北海道大学

(取扱エリア)札幌市内全域および近郊

info@estation-h.co.jp

家賃交渉、費用値引き、条件交渉etc.何でもおまかせ！
ご相談の時に「馬術部関係者です」と、お伝えください。



有限会社 エステーション

札幌市北区北18条西3丁目21 セイコーマート向かい
1-ロビビル1F

Welcome to Estation

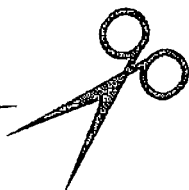
☎ 011-709-8850 ☎ 011-709-8851

＜広告主への感謝の言葉＞

この度、平成15年度北海道大学馬術部部報発行に際し絶大なるご援助を頂きました諸社・諸店に対し、厚く御礼申し上げますとともに諸社・諸店のご繁栄を心より祈り、ここに深く感謝致します。

北大馬術部

**COMETS
MEMBER'S
CARD**



カットイントライ

北海道札幌市東区北18条西5丁目1番1号ビル2F(11)ビルディング内
☎011-747-1058

毎月10日、20日は

ヘアカラー50%OFF

平日10日20日に御来店頂いた場合

大学生カット(シャンプー・ブロー込み)

+

ヘアカラー

¥3200+¥1500=¥4700

消費税は含まれておりません

●学生平日会員証の特典●

カット料金……………通常料金の10%OFF
(お友達をご紹介いただきますと、さらに10%OFF)

カラー&パーマ……………10%OFF

※この会員証は平日(土・日・祝祭日は除く)のみご利用できます。

※ご来店の際は必ずこのカードをご持参下さい。

◎営業時間/平日:AM10:~PM8:00

◎定休日/火曜日(第三月・火連休)

中古車と整備

民間車検工場

株式会社 **北大モータース**

札幌市北区北18条西5丁目 ☎726-1526

編集後記

なんとか発行することができました。工程が順調であると思ひ込み自分たちに甘さが出てしまい発行が遅くなってしまいました。本当に申し訳ありません。今回の経験を活かして自分により厳しく頑張っていきたいと思います。

また、今回の発行にあたり原稿を書いてくださった方々、ご協力いただいた方々、この場をかりて厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

何か意見等がございましたらお知らせ下さい。

部報担当 一色 真明
久保 裕道

北海道大学馬術部部報

部 報 第49号

平成一六年四月 発行

編集者 北海道大学馬術部部報担当

一色 真明
久保 裕通

印刷所 北大印刷

〒〇六〇・〇八〇八

札幌市北区北8条西八丁目

クラーク会館1階

TEL (〇一一)七四七・八八八六

FAX (〇一一)七五六・七九七一

発行所 北海道大学馬術部

〒〇一一・〇〇二三

札幌市北区北23条西十二丁目

TEL (〇一一)七三七 一六二六

FAX (〇一一)七三七 一六二六

訂正・追加

部報 (No.49) に幾つかの誤りがございましたので訂正と追加を致します。

P.15 第38回北日本学生馬術大会

学生賞典総合馬術競技	調教	耐久	余力
木村 北鳳 北大(4)	79.3	92.0	3反E

P.17 第53回全日本学生賞典障害飛越競技大会

総合馬術競技団体結果	団体減点
1位 明治大学	170.1
2位 日本大学	235.2
3位 帯広畜産大学	251.0
8位 北海道大学	426.5

P.46 居酒屋きよたの住所

西5丁目→西4丁目

P.76 シーベスト号の生年月日

平成7年→平成9年

P.128 表紙担当 猪狩舞子

● 住所変更

P.117 小林則子(昭和39年卒)

〒057-0012 浦河郡浦河町常磐町146-3
TEL 01462-2-7582

P.119 半浦剛(昭和53年卒)

〒046-0325 積丹郡積丹町大学野塚町字丸山791-1
TEL 0135-47-2466

P.121 米家直子(平成8年卒)

〒089-5615 浦幌町字新町19-4 25号
TEL 01557-6-3958
勤務先 浦幌高校 (TEL 01557-6-3958)

P.122 川崎洋史 (平成12年卒)

〒059-1432 勇払郡早来町源武275ノーザンファーム
源武コモンズ104

この他にも誤字など多々あると思いますがご了承ください。